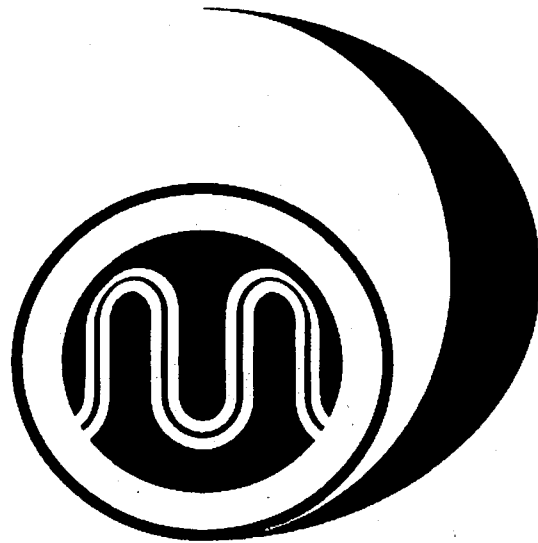


第297回
地震防災対策強化地域判定会
委員打合せ会

記者レクチャー資料



平成23年1月24日

気象庁

この資料は、独立行政法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、気象庁、独立行政法人産業技術総合研究所、国土地理院、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所、横浜市及び独立行政法人海洋研究開発機構のデータを基に作成しています。

以下の資料は暫定であり、後日の調査で変更されることがあります。

目次・概況

定例資料

1. 地震活動概況 P. 1-6
2. 注目すべき地震活動 P. 7-8
3. 活動指数 P. 9-13
4. 静穏化・活発化領域の抽出 P. 14-15
5. 領域別地震活動 P. 16-31
6. 歪計による地殻変動観測 P. 32-51
7. 天竜船明観測点におけるレーザー式変位計による地殻変動観測（気象研究所）
. P. 52-53

平成 22 年 12 月～平成 23 年 1 月 19 日の主な地震活動

○ 想定震源域およびその周辺； $M \geq 3.0$ または震度 1 以上を観測した地震

月/日	時:分	震央地名	深さ (km)	M	最大 震度	発震機構
1/19	8:21	駿河湾	21	2.9	1	東西に張力軸を持つ横ずれ断層型

○ 南関東； $M \geq 3.5$

月/日	時:分	震央地名	深さ (km)	M	最大 震度	発震機構
12/6	3:20	千葉県北西部	68	4.3	3	東西に圧力軸を持つ逆断層型
12/11	6:33	千葉県北西部	64	3.5	1	東西に圧力軸を持つ逆断層型
1/9	11:21	茨城県南部	43	3.5	2	南北に圧力軸を持つ逆断層型
1/12	22:16	東京湾	73	3.5	1	東北東－西南西に張力軸を持つ型

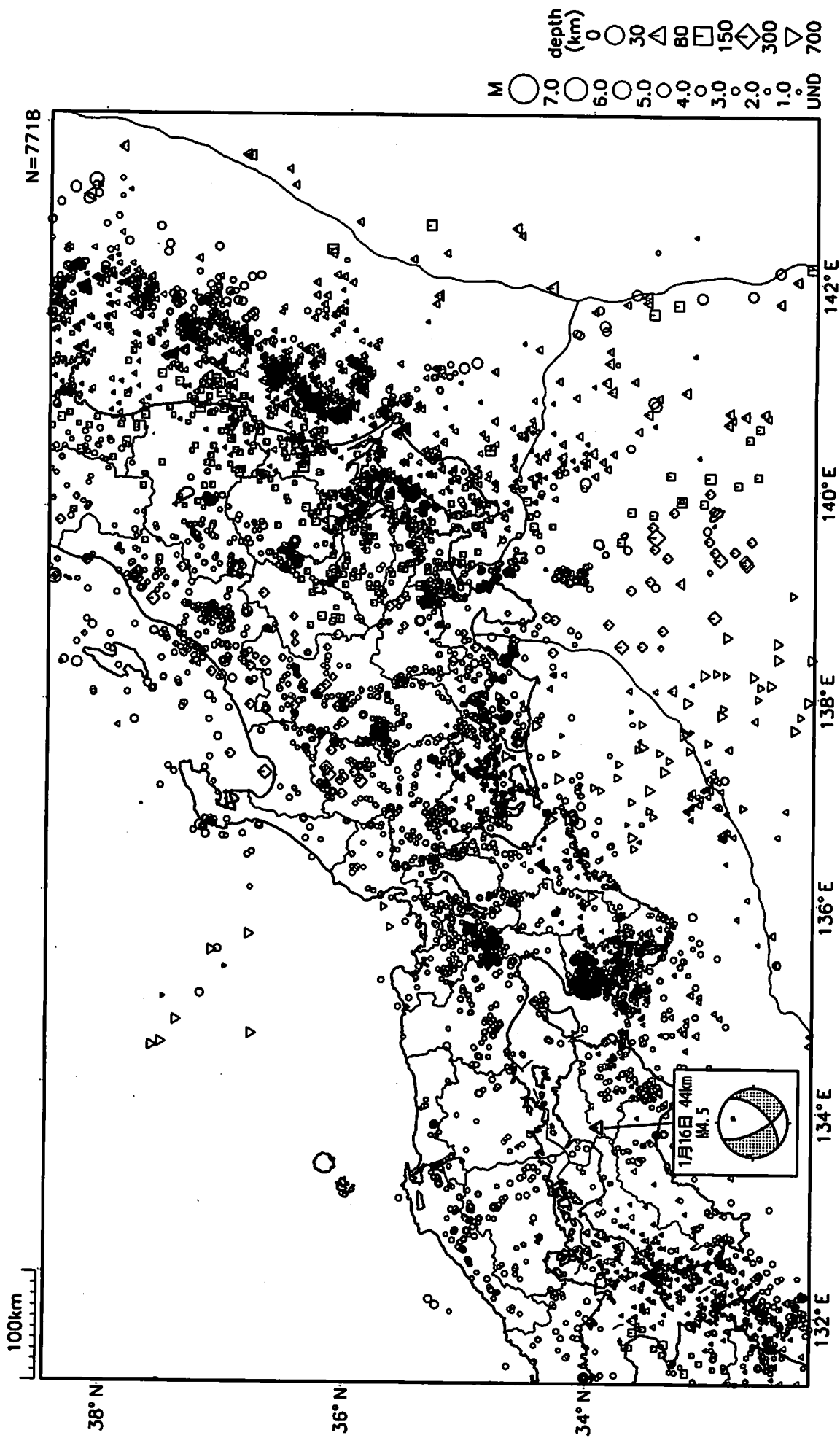
○ その他の地域； $M \geq 6.0$

なし

※ 低周波地震活動

愛知県西部から三重県にかけての領域で深部低周波地震活動を観測

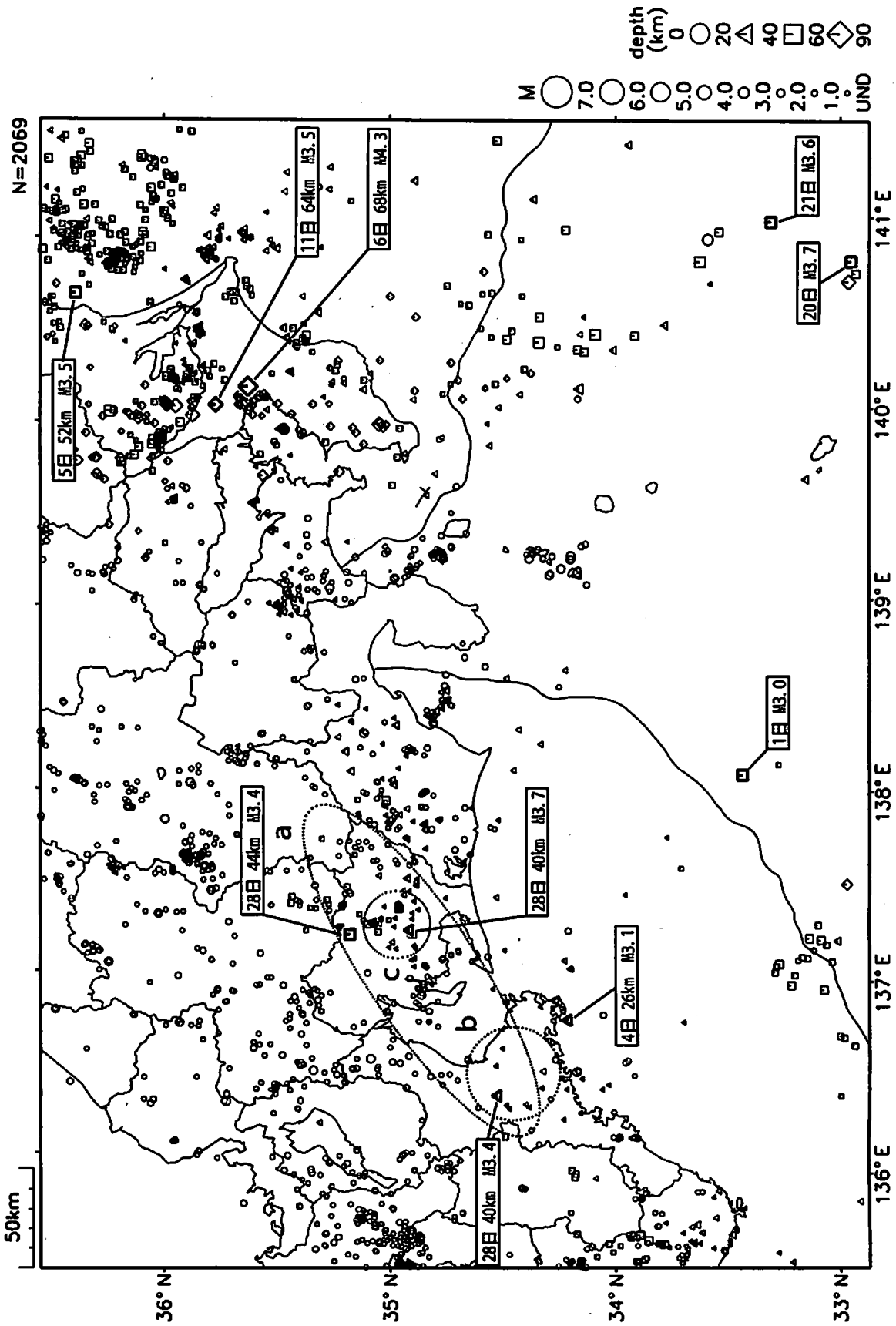
東海地方とその周辺の広域地震活動 2010年12月1日～2011年1月19日



図中の吹き出しは、陸域M. 5以上・海域M. 5.0以上とその他の主な地震

気象庁作成

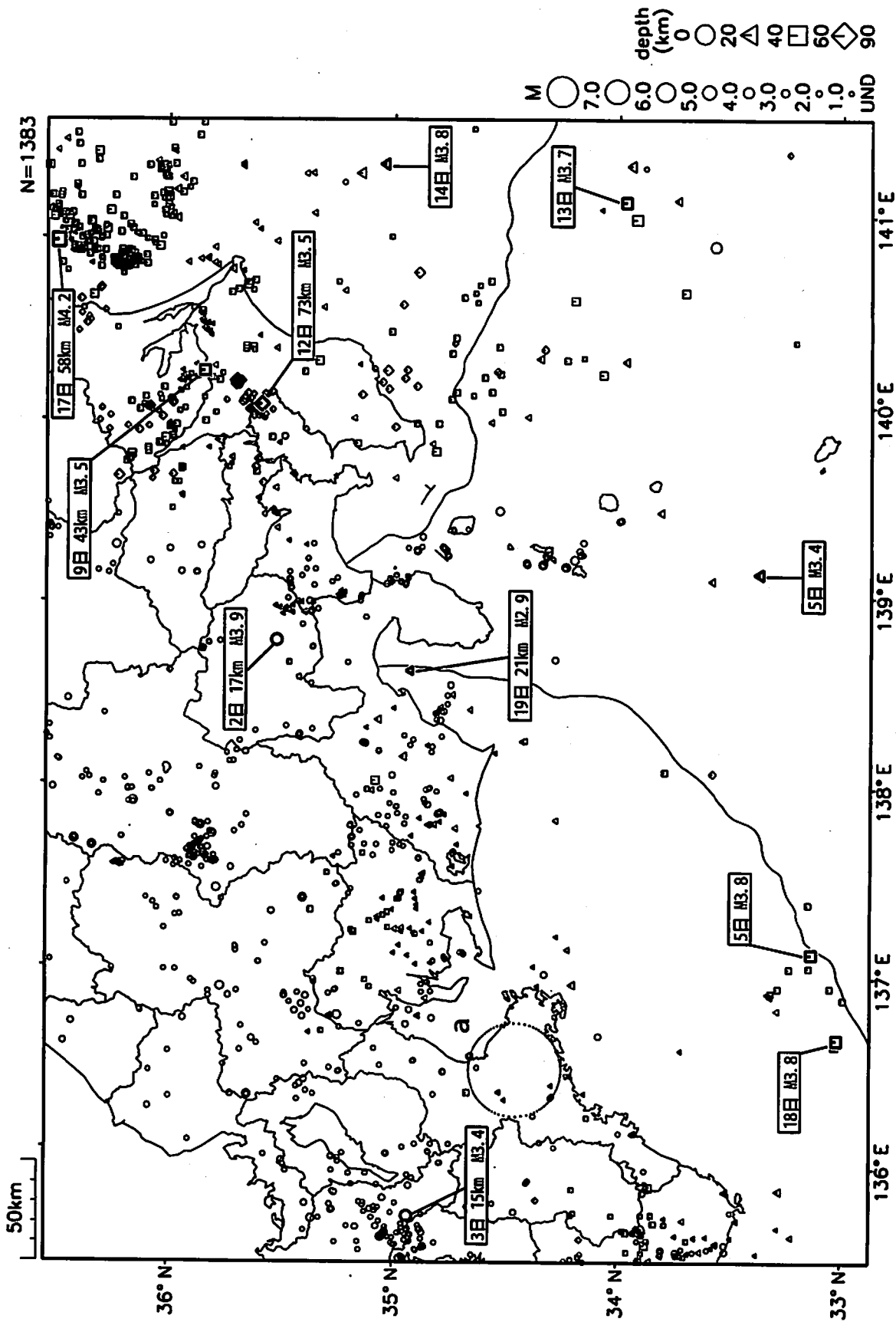
東海・南関東地域の地震活動 2010年12月 (1日~31日)



気象庁作成

精度良くは推定された地震のみを表示している。
 長野県南部〜三河県西部(破線の領域a)で11月11日から12月11日まで深部低周波地震が観測された。
 三河県(破線の領域b)で12月25日に深部低周波地震が観測された。
 愛知県西部(破線の領域c)で12月13日に深部低周波地震が観測された。

東海・南関東地域の地震活動 2011年1月(1日~19日)

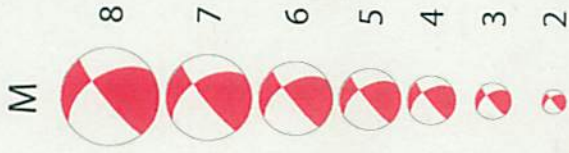
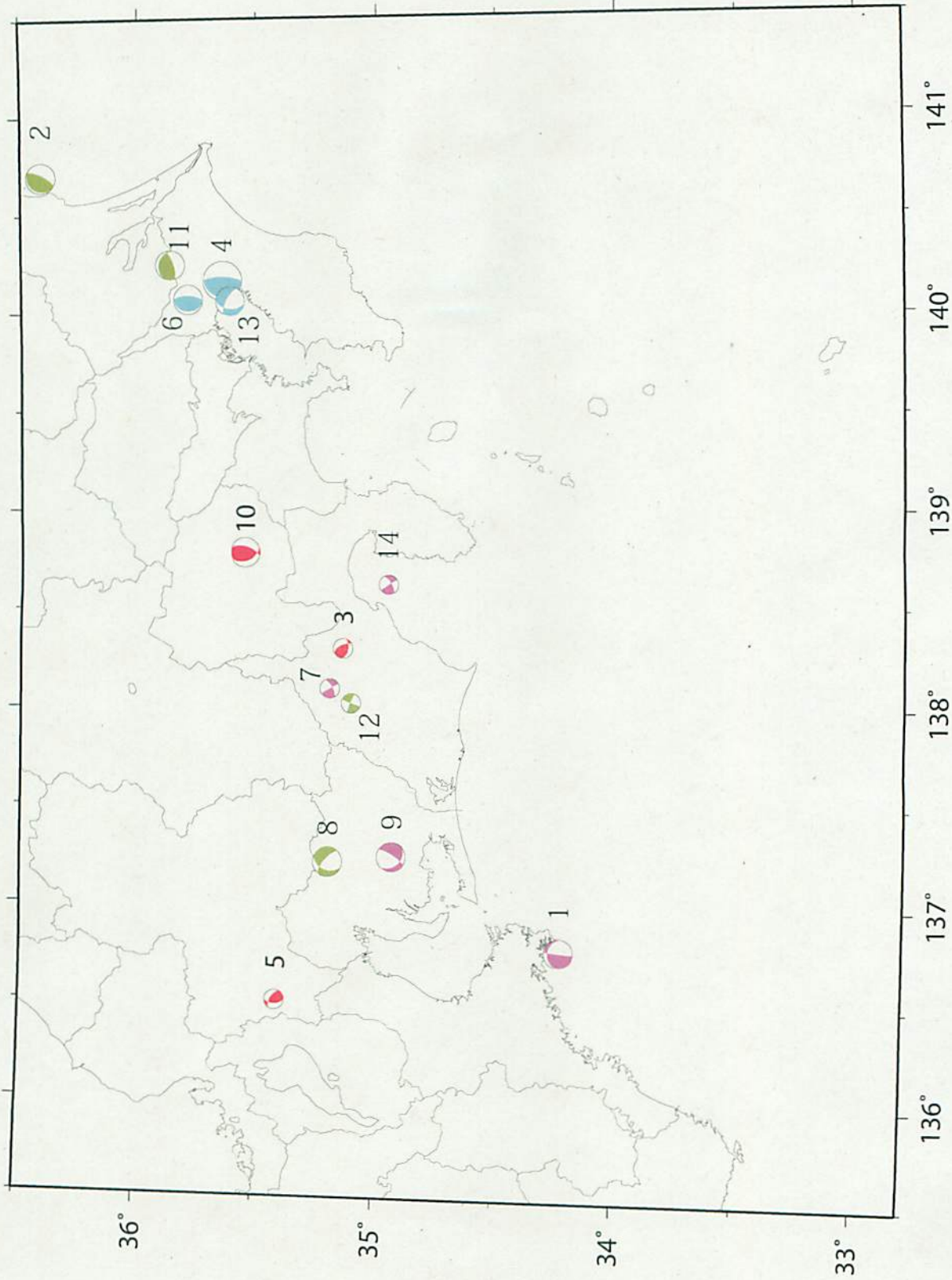


気象庁作成

精度良く震源決定された地震のみを表示している。
三つ巴中部(破線の圏域a)で11日11時に深刻な液状化が観測された。

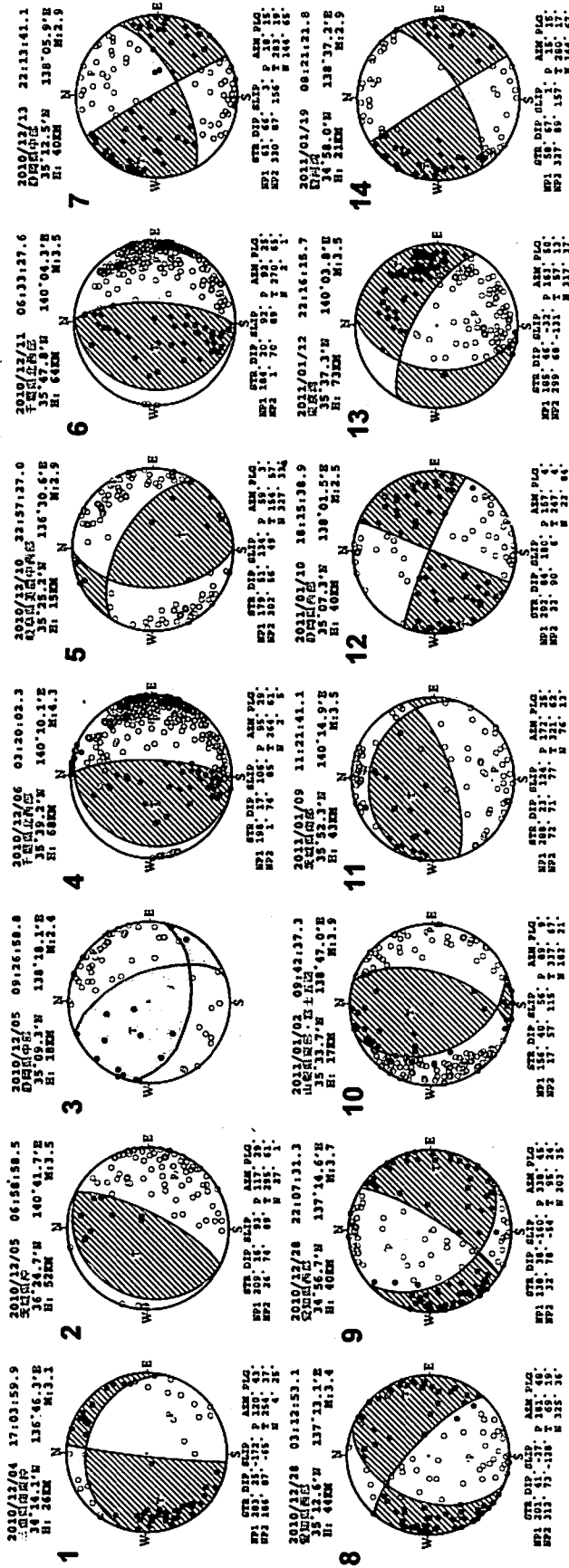
東海・南関東地域の発震機構解 (1)

Period:2010/12/01 00:00--2011/01/19 24:00



Depth(km)
(下半球投影)
[気象庁作成]

東海・南関東地域の発震機構解 (2)

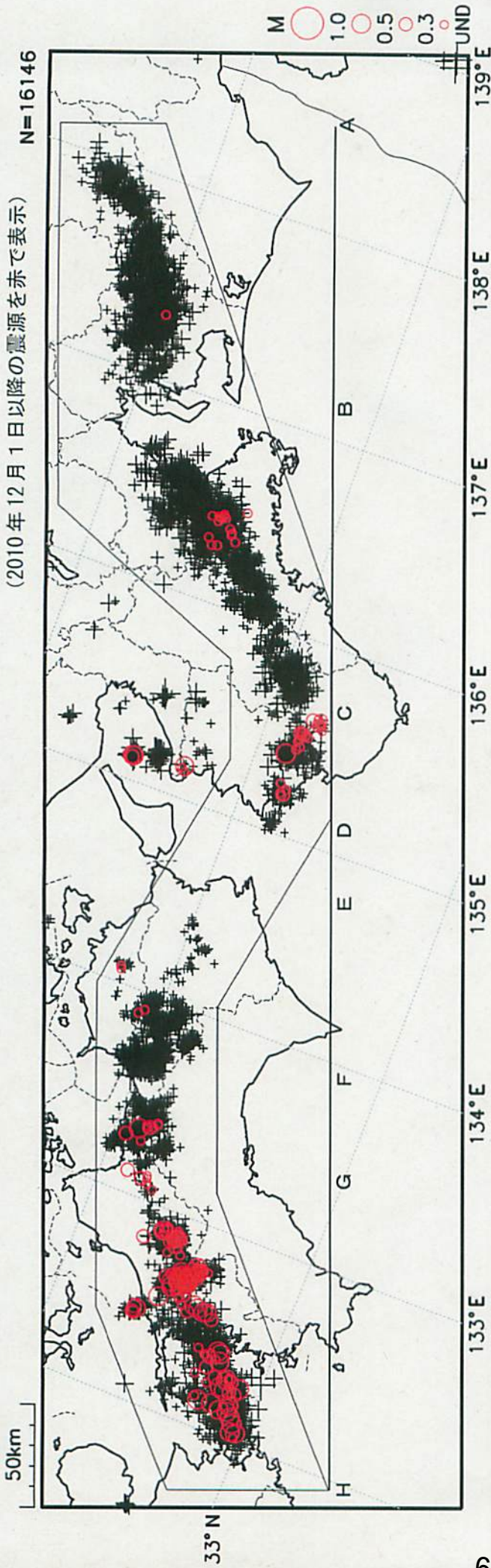


※東海地域のM2.4以上の地震及び南関東地域のM3.5以上の地震の発震機構を表示している。
 各震源球の上部には震源要素、下部には発震機構の断層パラメータが併記されている。
 断層パラメータが併記されていないものは、発震機構解の精度がやや劣るものである。

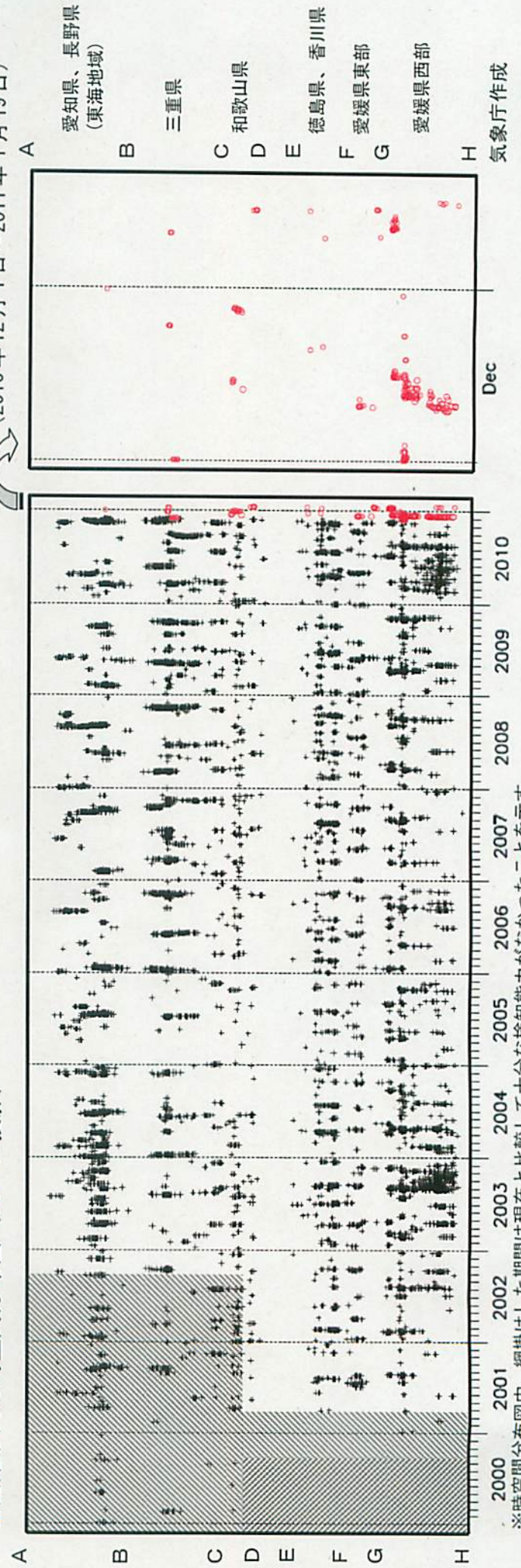
(下半球投影)
 [気象庁作成]

深部低周波地震活動 (2000年1月1日~2011年1月19日)

(2010年12月1日以降の震源を赤で表示)



上図矩形内の時空間分布図 (A-H投影)

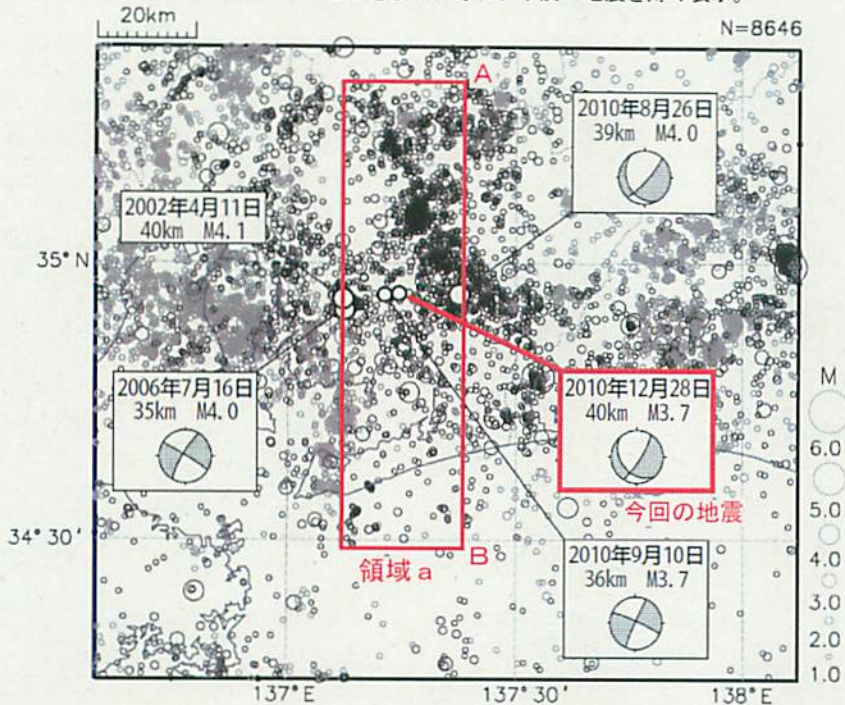


※時空間分布図中、網掛けした期間は現在と比較して十分な検知能力がなかったことを示す。

12月28日 愛知県西部の地震

震央分布図 (1997年10月1日～2011年1月15日、 $M \geq 1.0$ 、深さ0～60km)

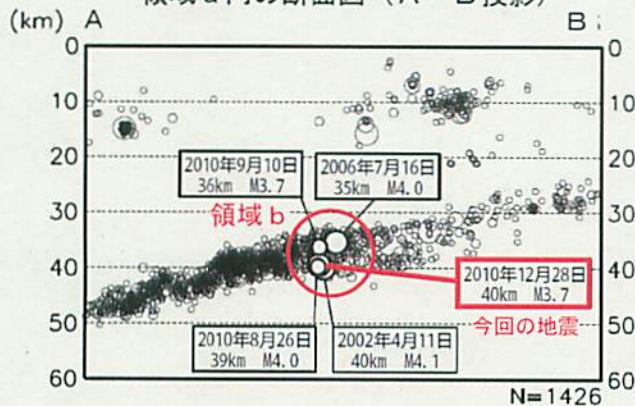
深さ25km以深の地震を濃く、それより浅い地震を薄く表示。



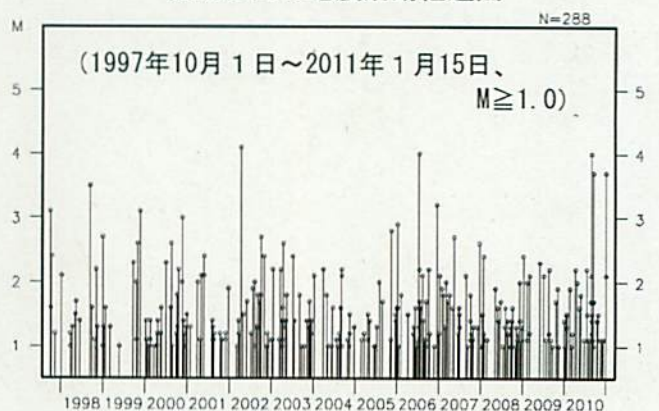
12月28日22時07分に愛知県西部の深さ40kmでM3.7の地震 (最大震度2) が発生した。この地震の発震機構は、東西方向に張力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内で発生した地震である。

1997年10月以降の活動を見ると、今回の地震の震源付近 (領域b) では、M4.0前後の地震が時々発生している。

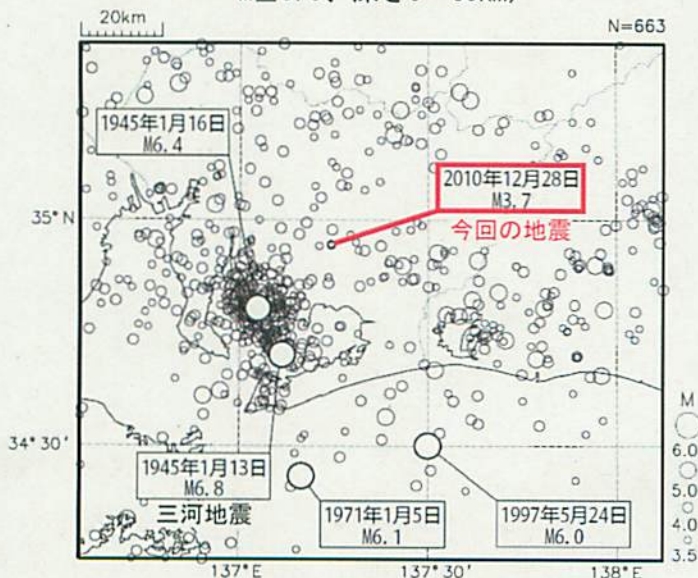
領域a内の断面図 (A-B投影)



領域b内の地震活動経過図



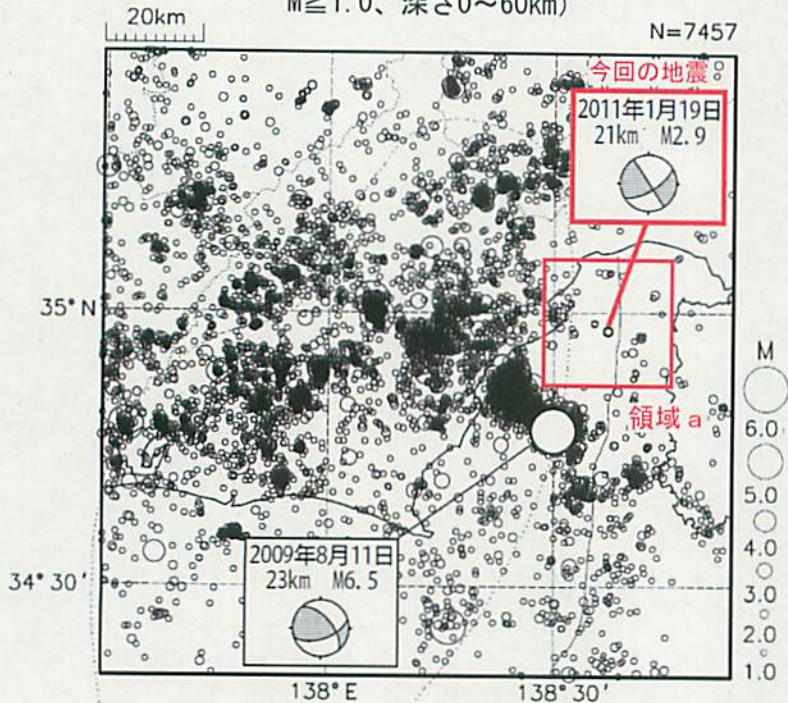
震央分布図 (1923年8月1日～2011年1月15日、 $M \geq 3.5$ 、深さ0～60km)



1923年8月以降の活動を見ると、今回の地震の震央周辺では、1945年1月13日にM6.8の地震 (三河地震) が発生している。

1月19日 駿河湾の地震

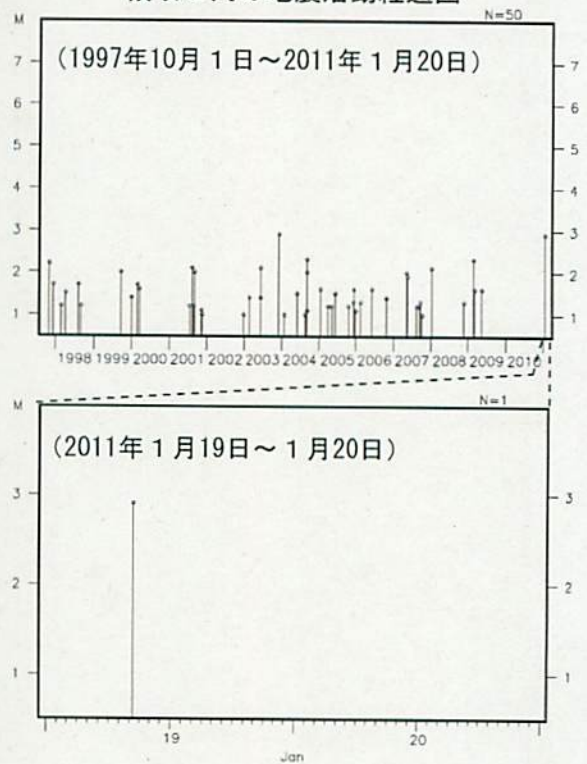
震央分布図 (1997年10月1日～2011年1月20日、
M \geq 1.0、深さ0～60km)



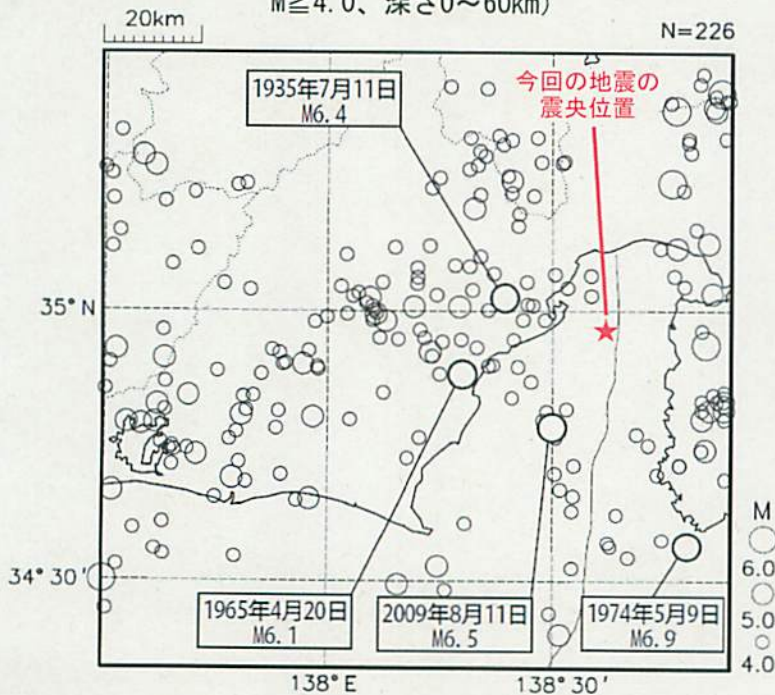
1月19日08時21分に駿河湾の深さ21kmでM2.9の地震 (最大震度1) が発生した。この地震の発震機構は、東西方向に張力軸を持つ横ずれ断層型で、フィリピン海プレート内で発生した地震である。余震は観測されていない。

2009年8月11日の駿河湾の地震 (M6.5) の余震域よりも北側で発生しており、1997年10月以降の活動を見ると、今回の地震の震央付近 (領域a) では、M3.0を超えるような地震は発生していない。

領域a内の地震活動経過図



震央分布図 (1923年8月1日～2011年1月20日、
M \geq 4.0、深さ0～60km)



1923年8月以降の活動を見ると、今回の地震の震央周辺では、1935年にはM6.4の地震が、1965年にはM6.1の地震が、2009年8月11日には駿河湾の地震 (M6.5) が発生している。

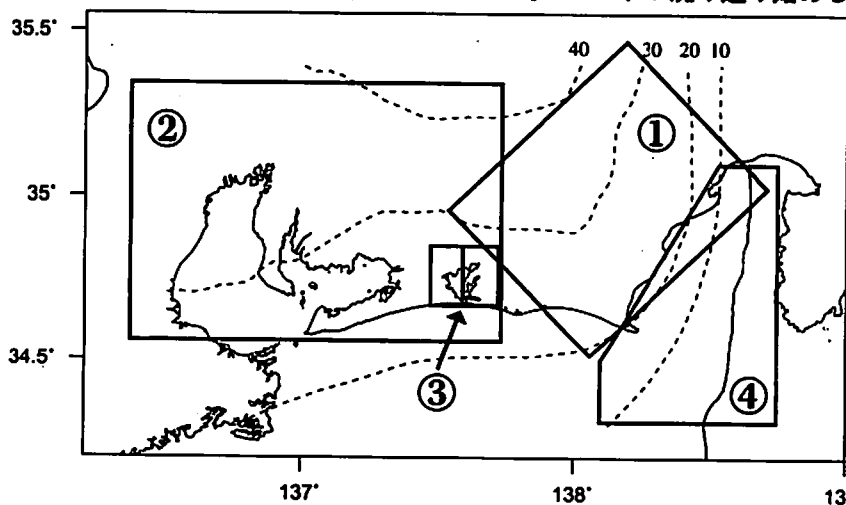
東海地域の地震活動指数 (クラスタを除いた地震回数による)

2011年1月19日 現在

	① 静岡県中西部		② 愛知県		③ 浜名湖周辺			④ 駿河湾
	地殻内	フィリ ピン海 プレート	地殻内	フィリ ピン海 プレート	フィリピン海プレート内			全域
					全域	西側	東側	
短期活動指数	7	5	4	2	2	3	2	8
短期地震回数 (平均)	10 (5.29)	9 (7.00)	14 (13.16)	9 (14.15)	2 (6.16)	1 (2.46)	1 (3.70)	13 (6.06)
中期活動指数	8	8	5	4	0	1	1	8
中期地震回数 (平均)	26 (15.87)	33 (21.00)	43 (39.48)	41 (42.44)	3 (12.32)	1 (4.93)	2 (7.39)	28 (12.12)

- * Mしきい値： 静岡県中西部、愛知県、浜名湖周辺：M≥1.1、駿河湾：M≥1.4
- * クラスタ除去： 震央距離が Δr 以内、発生時間差が Δt 以内の地震をグループ化し、最大地震で代表させる。
 静岡県中西部、愛知県、浜名湖周辺： $\Delta r=3\text{km}$ 、 $\Delta t=7\text{日}$
 駿河湾： $\Delta r=10\text{km}$ 、 $\Delta t=10\text{日}$
- * 対象期間： 静岡県中西部、愛知県：短期30日間、中期90日間
 浜名湖周辺、駿河湾：短期90日間、中期180日間
- * 基準期間： おおむね長期的スロースリップ（ゆっくり滑り）発生前の地震活動を基準とする。
 静岡県中西部、愛知県：1997年－2001年（5年間）、
 浜名湖周辺：1998年－2000年（3年間）、駿河湾：1991年－2000年（10年間）

- [各領域の説明] ① 静岡県中西部：プレート間が強く「くっついている」と考えられている領域（固着域）。
 ② 愛知県：フィリピン海プレートが沈み込んでいく先の領域。
 ③ 浜名湖周辺：固着域の縁。長期的スロースリップ（ゆっくり滑り）が発生する場所であり、同期して地震活動が変化すると考えられている領域。
 ④ 駿河湾：フィリピン海プレートが沈み込み始める領域。



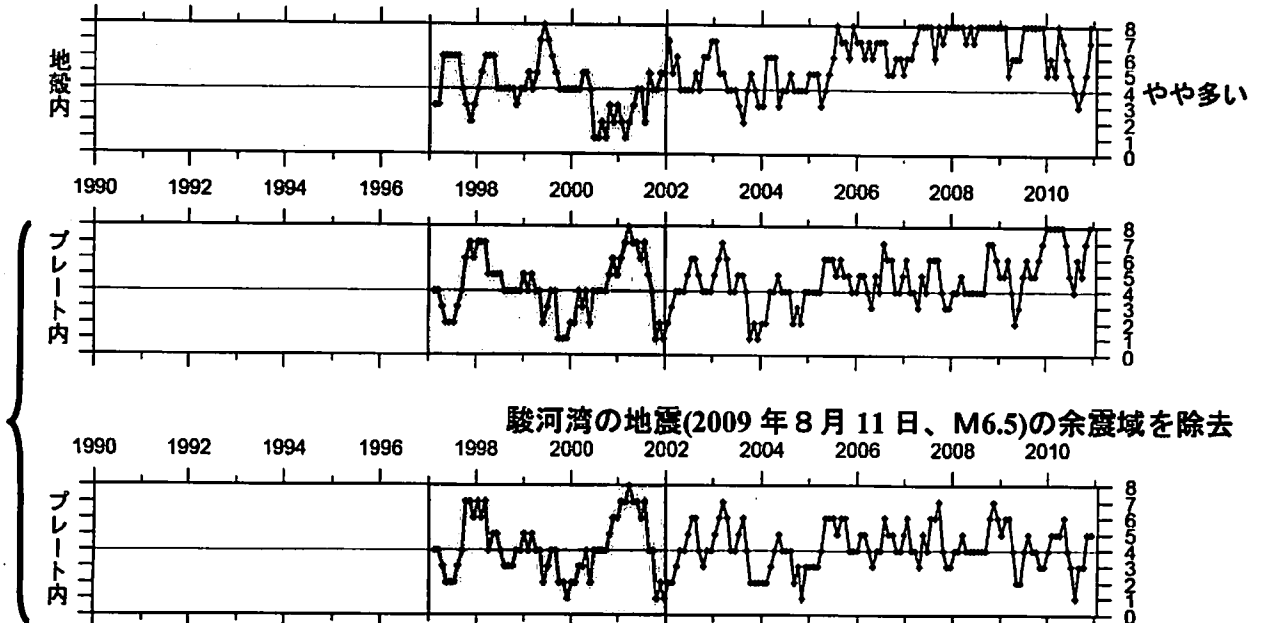
* プレート境界の等深線を破線で示す。

指数	確率 (%)	地震数
8	1	多い
7	4	やや多い
6	10	
5	15	ほぼ平常
4	40	
3	15	やや少ない
2	10	
1	4	少ない
0	1	

地震活動指数の推移 (中期活動指数)

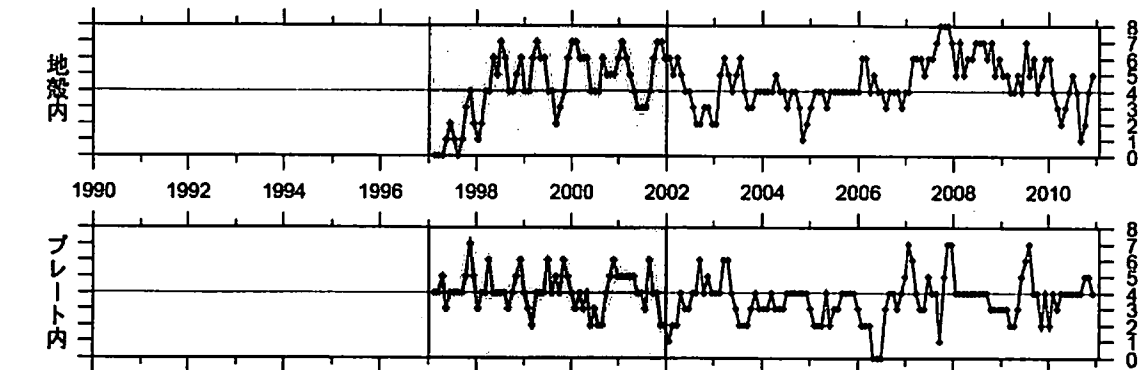
① 静岡県中西部 (対象期間: 90日)

1997/1/1~2011/1/19 M ≥ 1.1



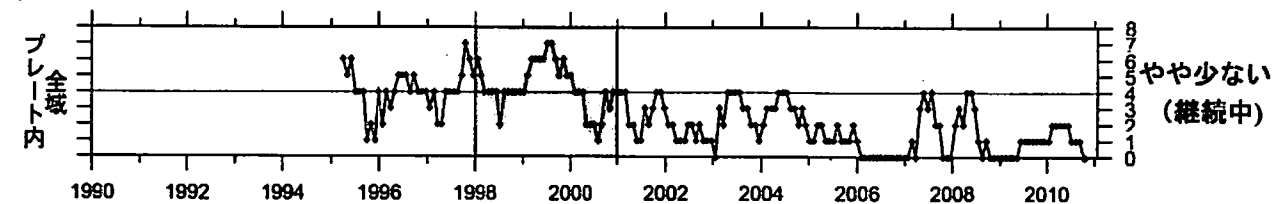
② 愛知県 (対象期間: 90日)

1997/1/1~2011/1/19 M ≥ 1.1



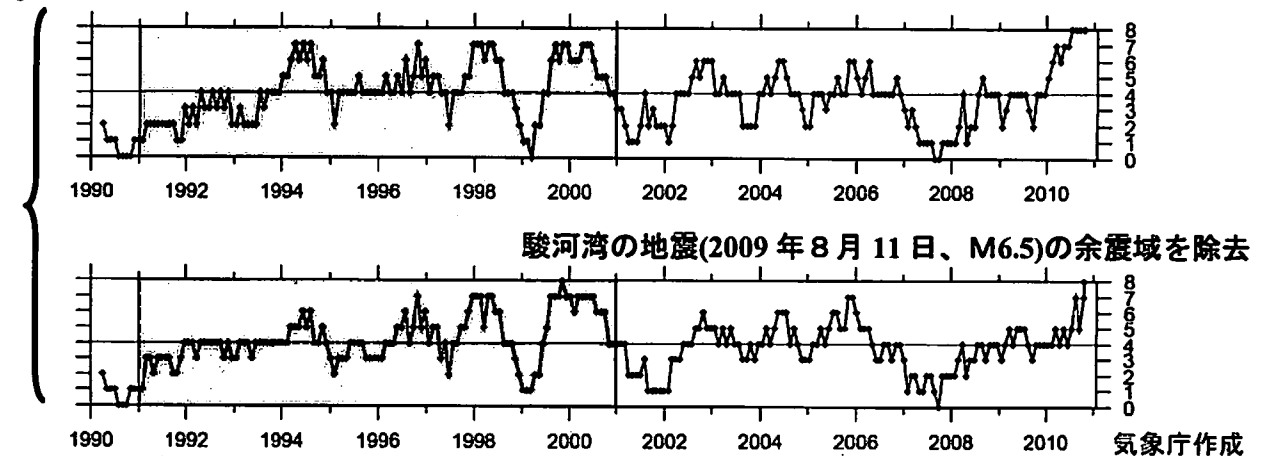
③ 浜名湖周辺 (対象期間: 180日)

1995/1/1~2011/1/19 M ≥ 1.1



④ 駿河湾 (対象期間: 180日)

1990/1/1~2011/1/19 M ≥ 1.4



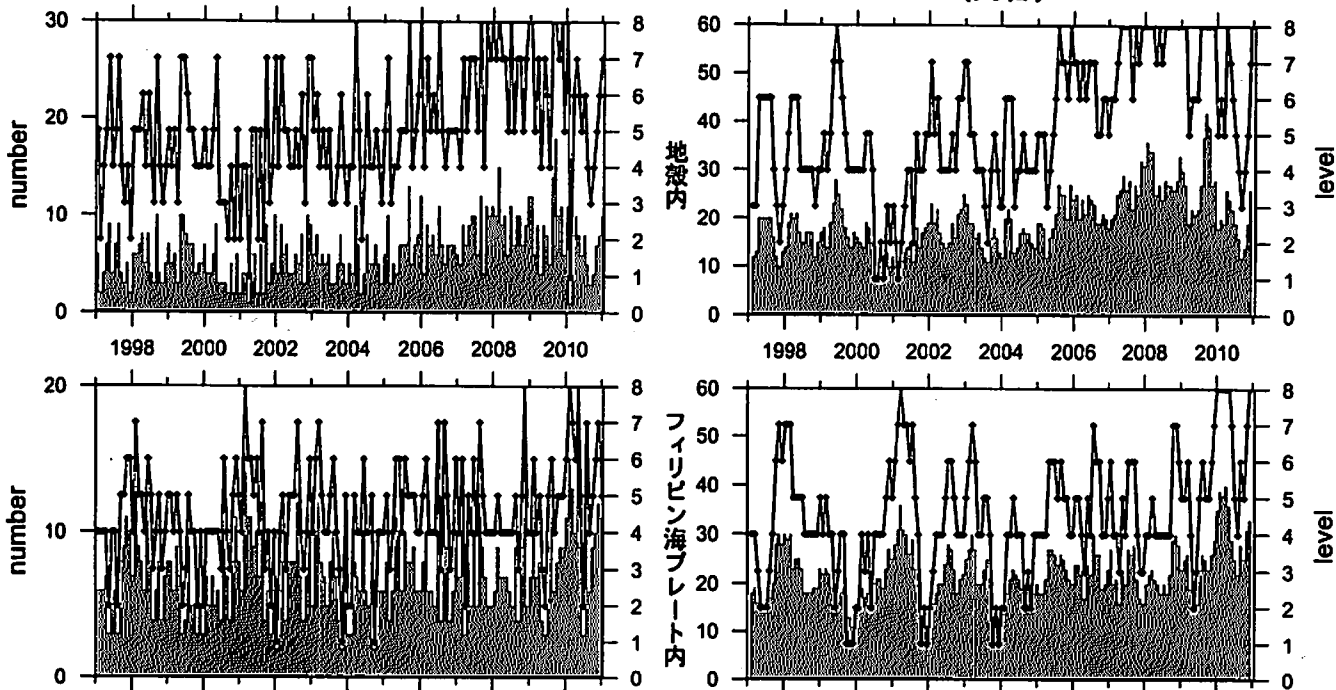
□ : 基準期間 / : 地震活動指数 (0-8)

気象庁作成

地震活動指数の推移

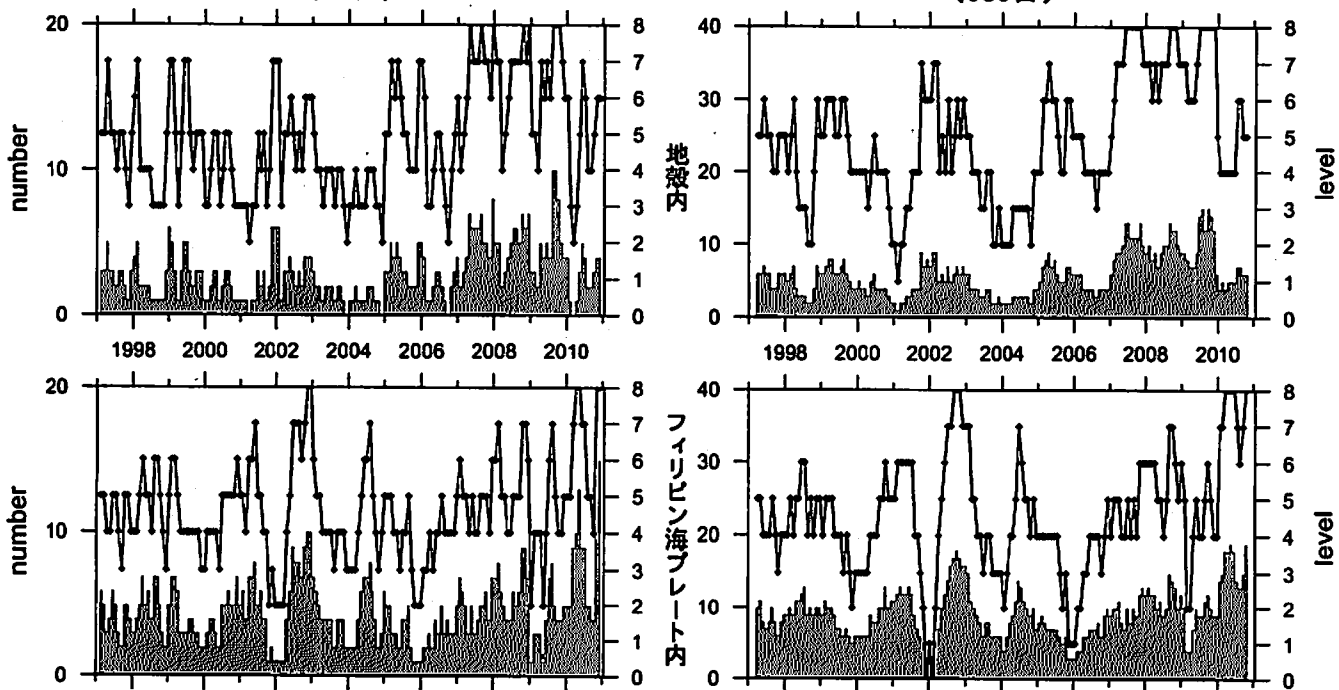
① 静岡県中西部

(30日) 1997/1/1~2011/1/19 M \geq 1.1 (90日)



地殻内は高い(7から8)。フィリピン海プレート内も高い(5から8)。

(90日) 1997/1/1~2011/1/19 M \geq 2.0 (180日)



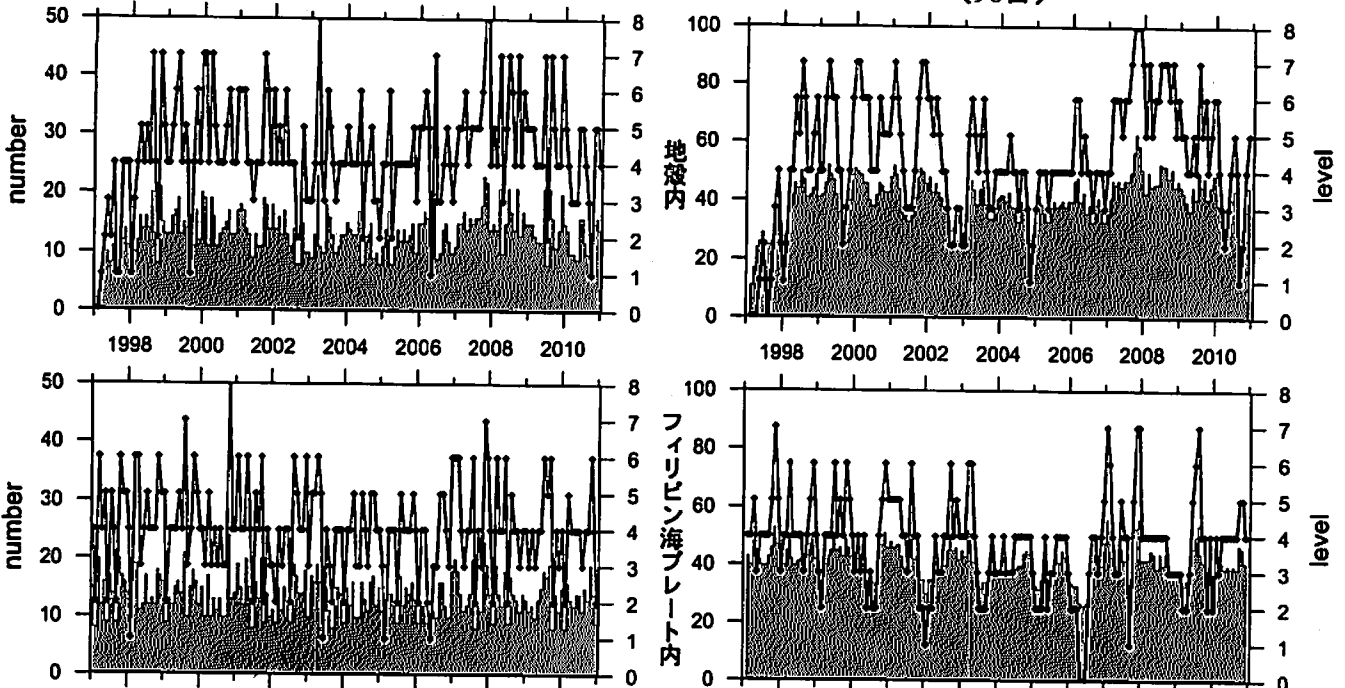
地殻内はやや高い(5から6)。
フィリピン海プレート内は高い(8)。

／ : 地震活動指数 (0-8)
■ : 地震回数 (クラスタを除く)

地震活動指数の推移

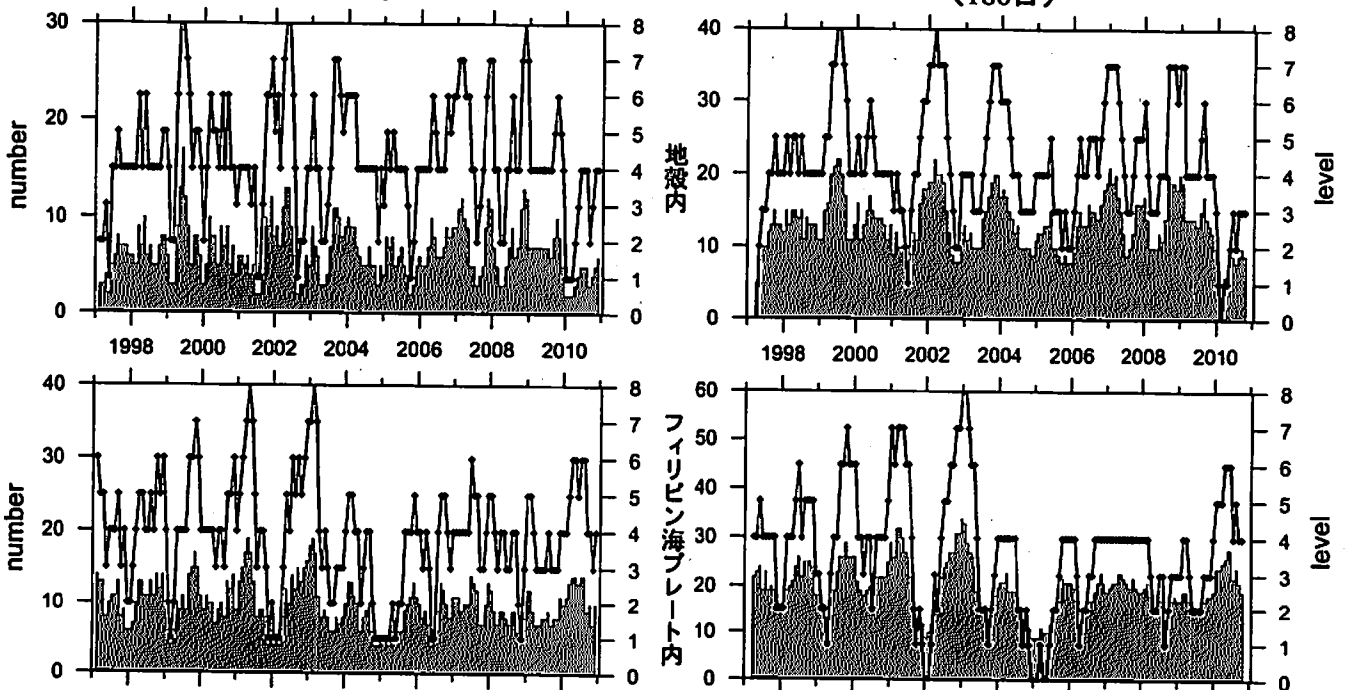
② 愛知県

(30日) 1997/1/1~2011/1/19 M ≥ 1.1 (90日)



地殻内はほぼ平常(4から5)。フィリピン海プレート内はやや低い(4から2)。

(90日) 1997/1/1~2011/1/19 M ≥ 2.0 (180日)



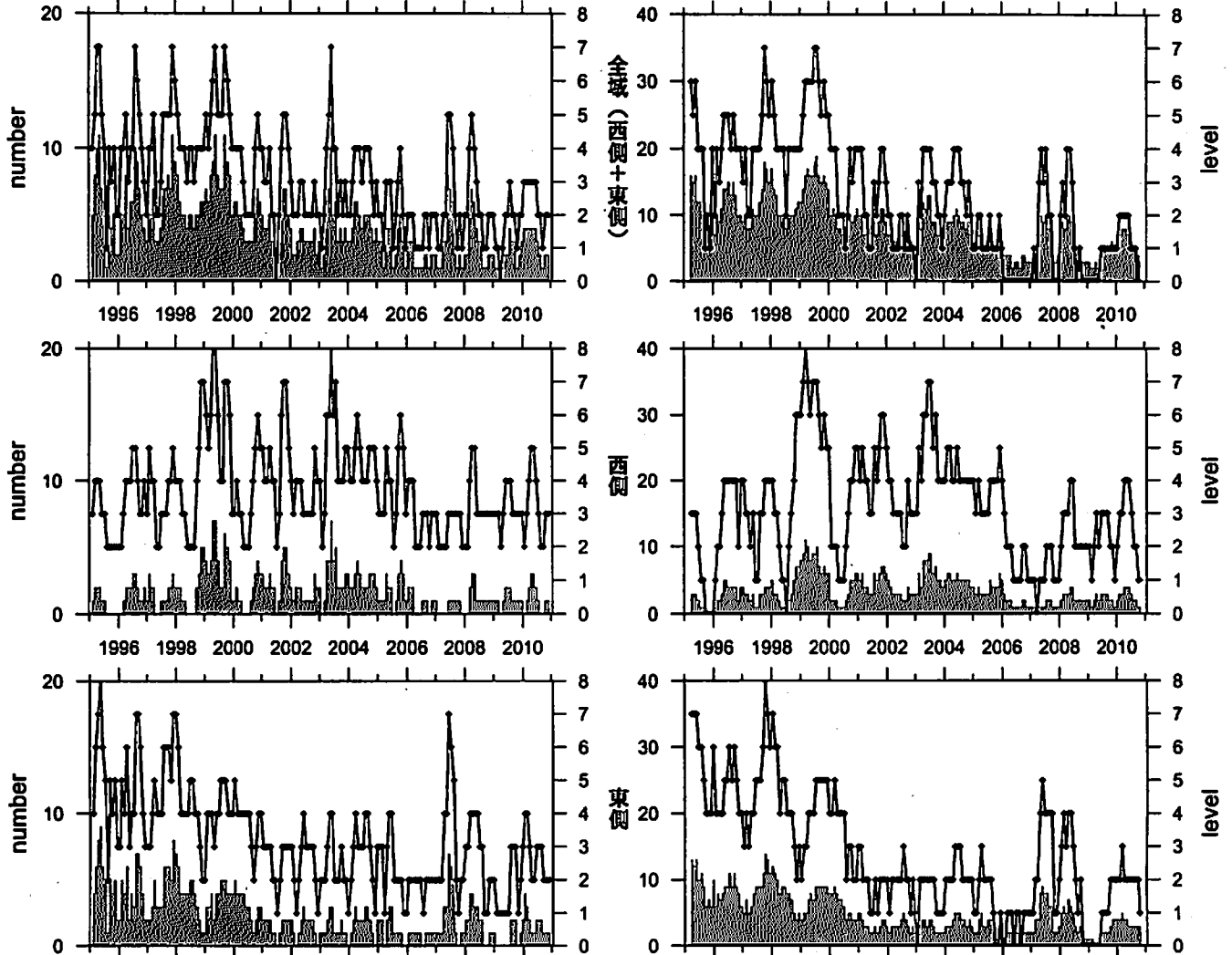
地殻内はほぼ平常(4から3)。
フィリピン海プレート内もほぼ平常(4)。

／ : 地震活動指数 (0-8)
■ : 地震回数 (クラスタを除く)

地震活動指数の推移

③ 浜名湖周辺（フィリピン海プレート内）

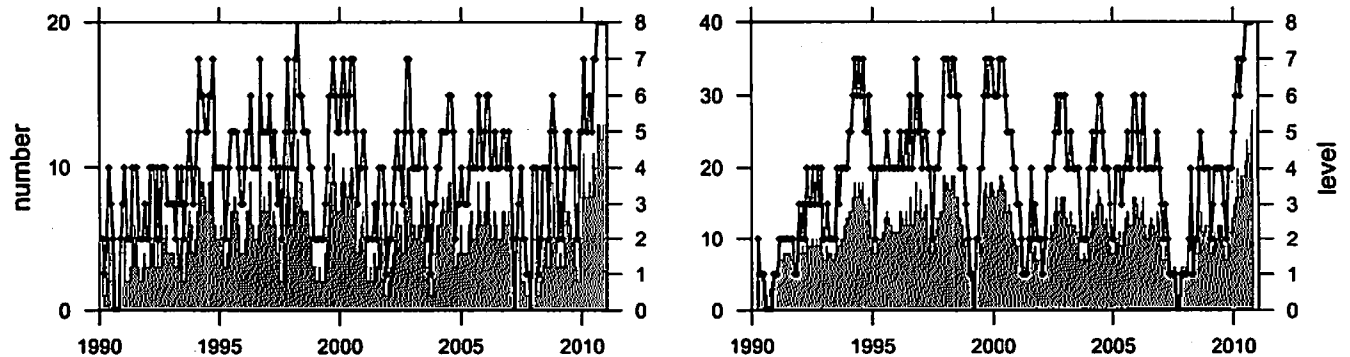
(90日) 1995/1/1-2011/1/19 M ≥ 1.1 (180日)



フィリピン海プレート内の地震活動は低い(3から0)。

④ 駿河湾

(90日) 1990/1/1-2011/1/19 M ≥ 1.4 (180日)



地震活動は高い(8)。

— : 地震活動指数 (0-8)
 ■ : 地震回数 (クラスタを除く)

静穏化・活発化領域の検出（東海地方、地殻内）

抽出した地震
 東海地方、地殻内で発生した
 M 1.1 以上の地震
 ● : 全期間の地震
 ○ : 解析対象期間内に発生した地震

クラスタ除去（デクラスタ）
 震央距離 3.0 km 以内、発生時刻 7.0 日以内
 の地震をグループ化し、最大地震で代表させる

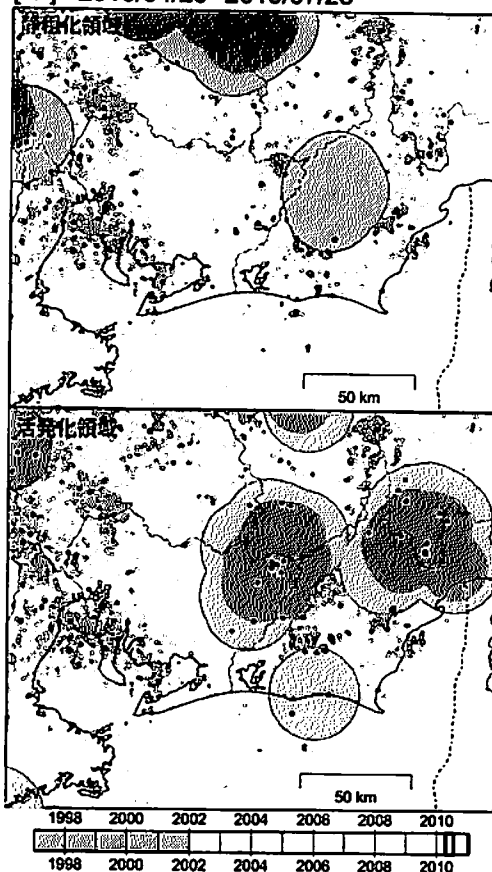
図の注釈

静穏化
 ● : 半径 15.0 km 以内でレベル 0
 ○ : 半径 20.0 km 以内でレベル 0

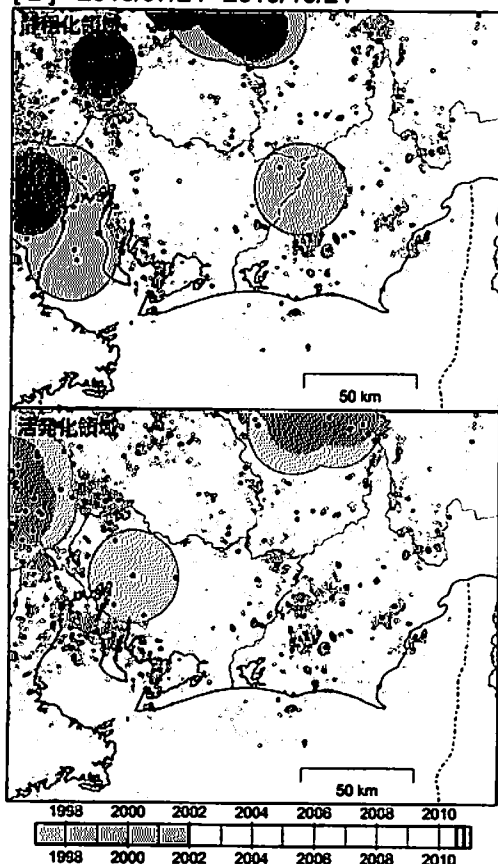
活発化
 ● : 半径 15.0 km 以内でレベル 8
 ○ : 半径 20.0 km 以内でレベル 8

タイムバー
 全体：検出領域中心として解析に用いたデータの期間
 ■ : 基準期間
 □ : 解析対象期間

[1] 2010/04/25-2010/07/23



[2] 2010/07/24-2010/10/21



[3] 2010/10/22-2011/01/19



想定震源域周辺では、今期(最新の[3])は静岡県中西部から愛知県東部で活発化領域が検出されている。静穏化領域は検出されていない。 気象庁作成

静穏化・活発化領域の検出 (東海地方、プレート内)

抽出した地震
 東海地方、プレート内で発生した
 M 1.1 以上の地震
 ○ : 全期間の地震
 ● : 解析対象期間内に発生した地震

クラスタ除去 (デクラスタ)
 震央距離 3.0 km 以内、発生時刻 7.0 日以内
 の地震をグループ化し、最大地震で代表させる

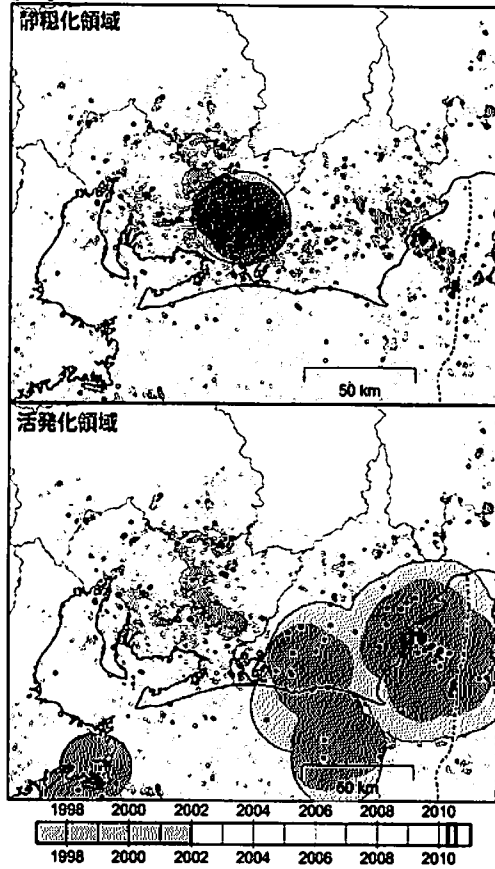
図の注釈

静穏化
 ● : 半径 15.0 km 以内でレベル 0
 ○ : 半径 20.0 km 以内でレベル 0

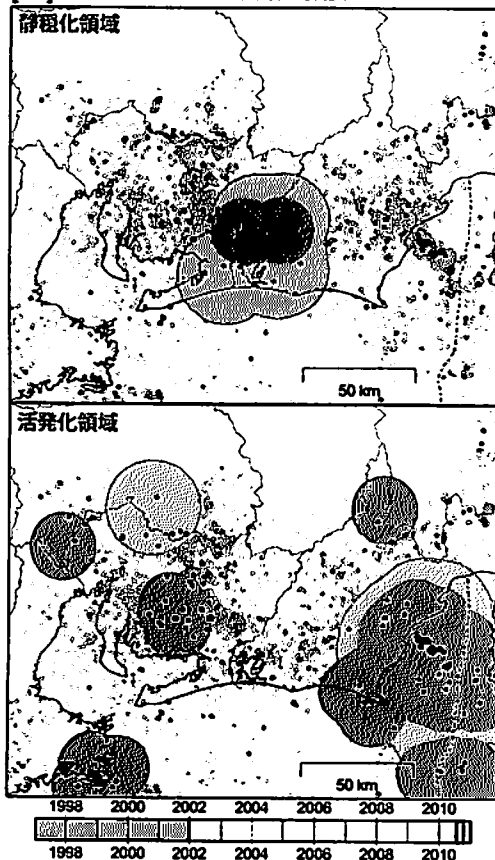
活発化
 ● : 半径 15.0 km 以内でレベル 8
 ○ : 半径 20.0 km 以内でレベル 8

タイムバー
 全体 : 検出領域中心として解析に用いたデータの期間
 ■ : 基準期間
 □ : 解析対象期間

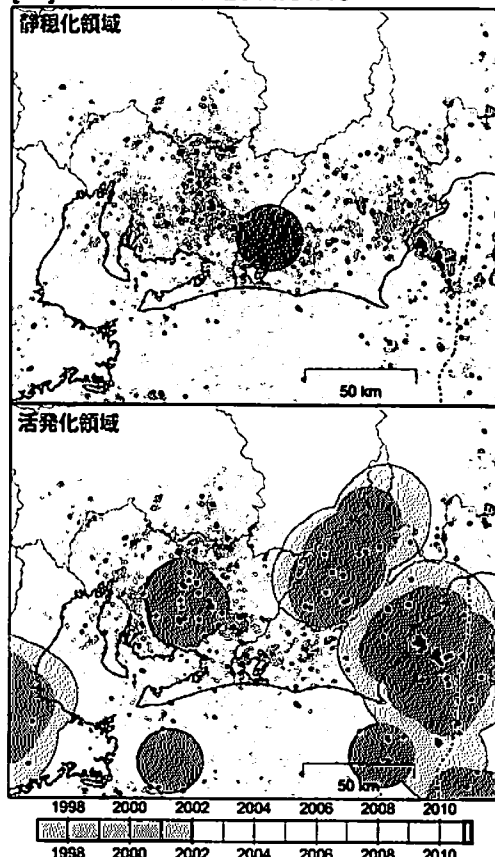
[1] 2010/04/25-2010/07/23



[2] 2010/07/24-2010/10/21



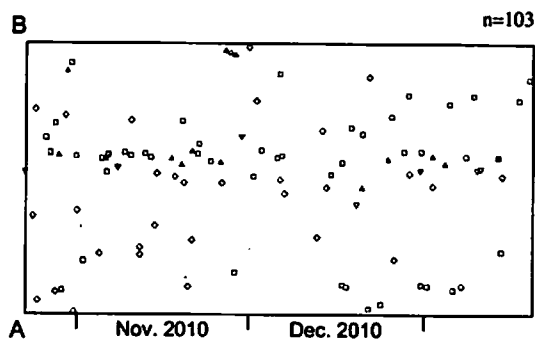
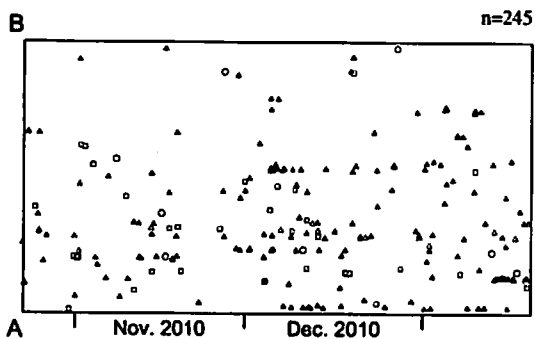
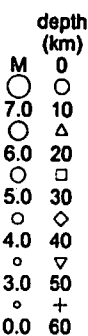
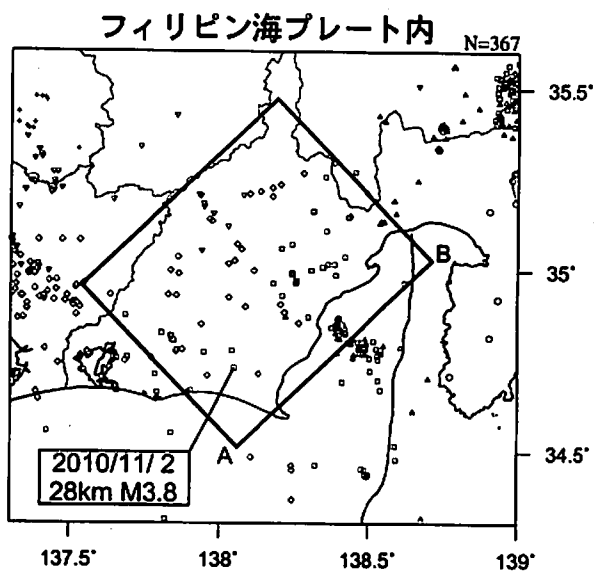
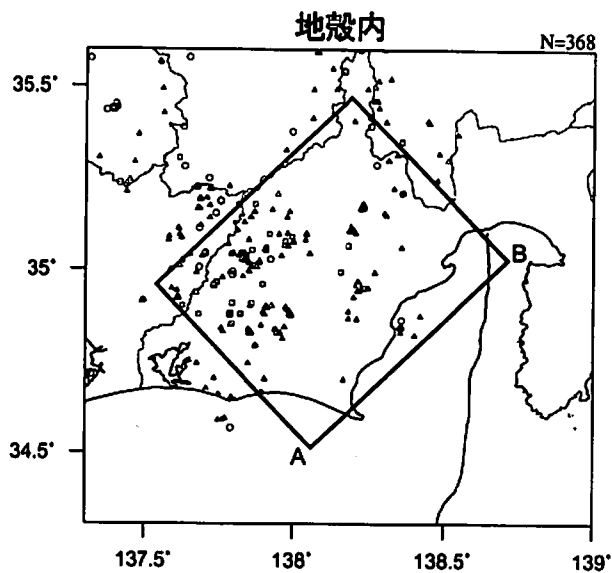
[3] 2010/10/22-2011/01/19



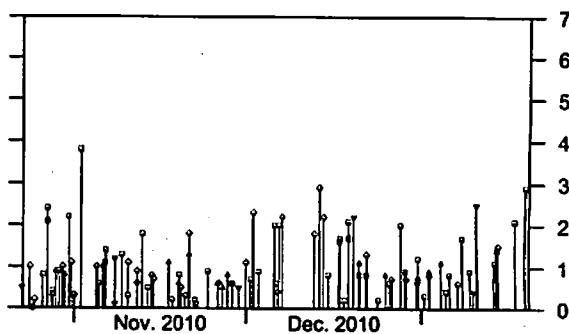
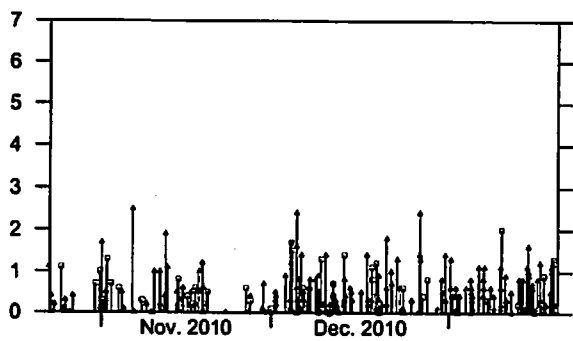
想定震源域周辺では、今期(最新の[3])は静岡県中部、駿河湾で活発化領域が検出されている。また、静岡県西部から愛知県東部で静穏化領域が検出されている。

気象庁作成

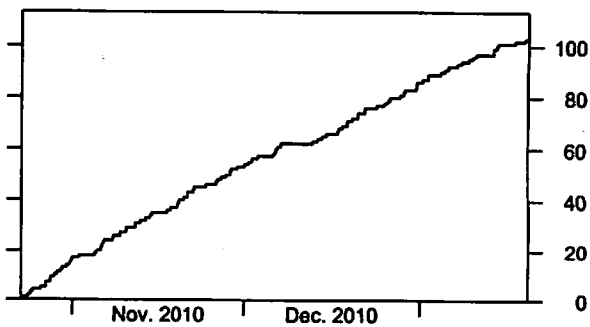
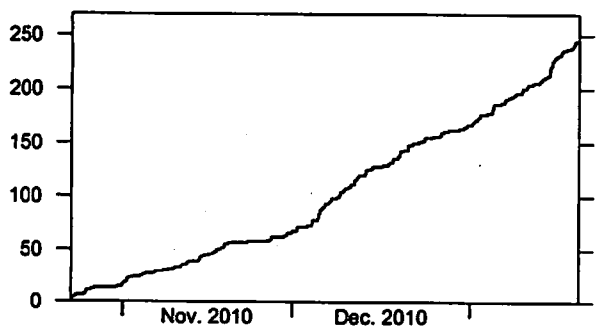
静岡県中西部 (最近90日)
 2010/10/22~2011/1/19 M ≥ 0.0 0 ≤ 深さ(km) ≤ 60



時空間分布図 (A-B方向)



地震活動経過図 (規模別)

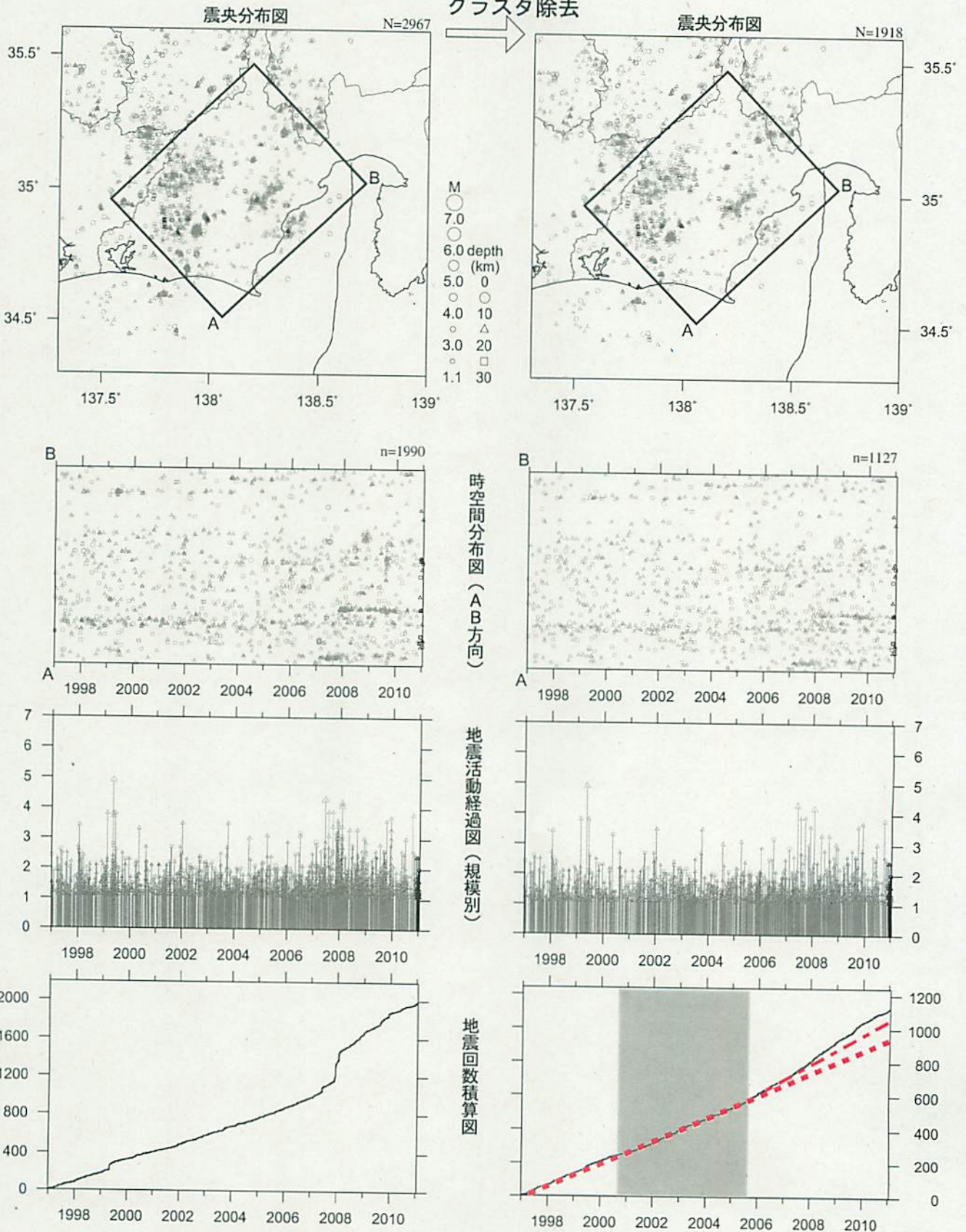


地震回数積算図

* 吹き出しはM≥3.0

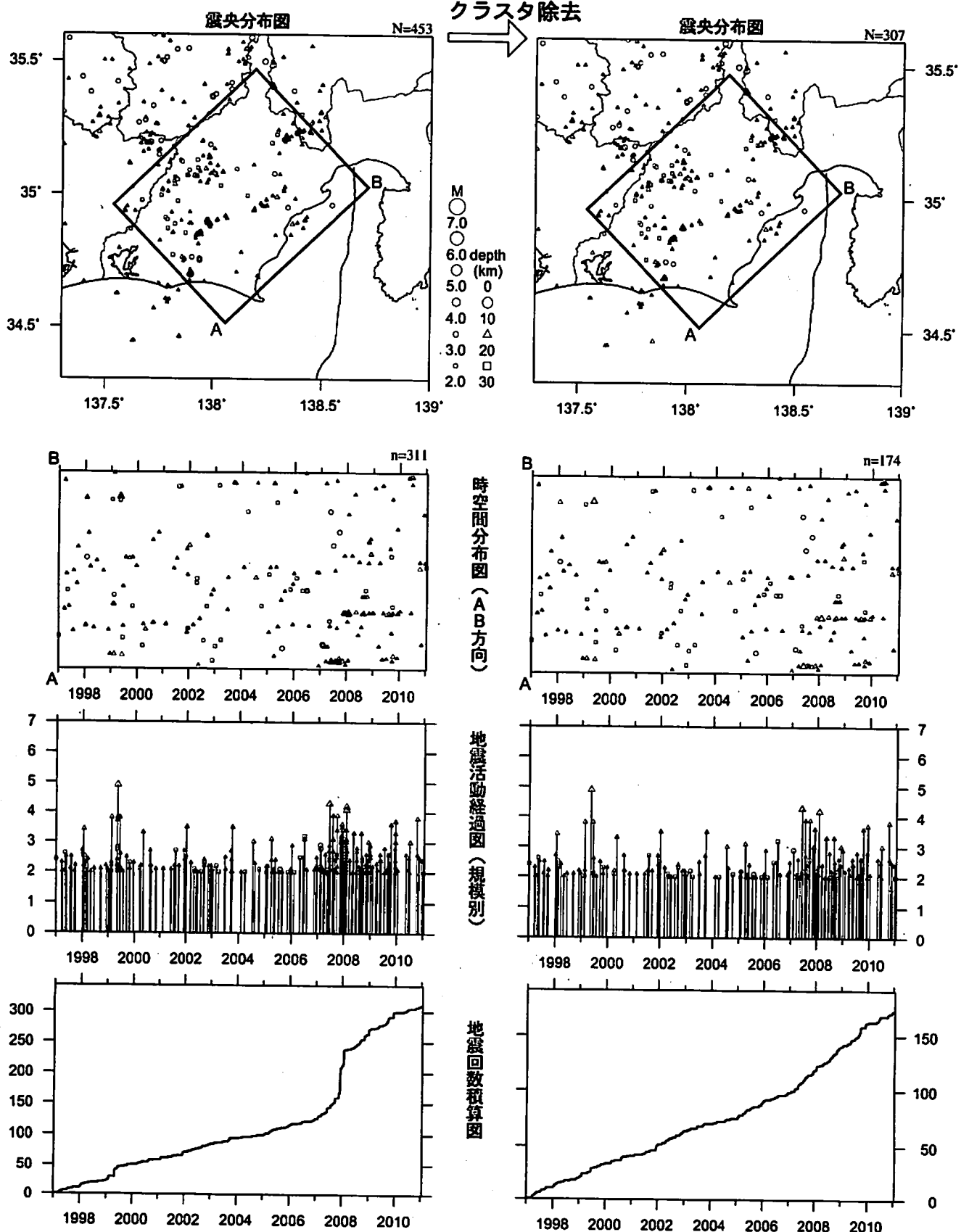
静岡県中西部（地殻内）
1997/1/1~2011/1/19 M \geq 1.1

クラスタ除去



クラスタ除去後の地震回数積算図（右下図）を見ると、2000年半ばまでは傾きが急でやや活発、その後2005年半ばまでは傾きが緩やかでやや低調、2005年半ば以降はやや活発、という傾向が見られる。この地震活動変化は、概ね長期的スロースリップの進行(右下図網掛け領域)・停滞の時期に対応している。2007年後半以降はさらに活発な傾向が見られていた。今年の春頃からは一時的にほぼ平常な状態に推移していたが、現在の地震活動指数は再び高い状態である。

静岡県中西部（地殻内）
1997/1/1~2011/1/19 M \geq 2.0

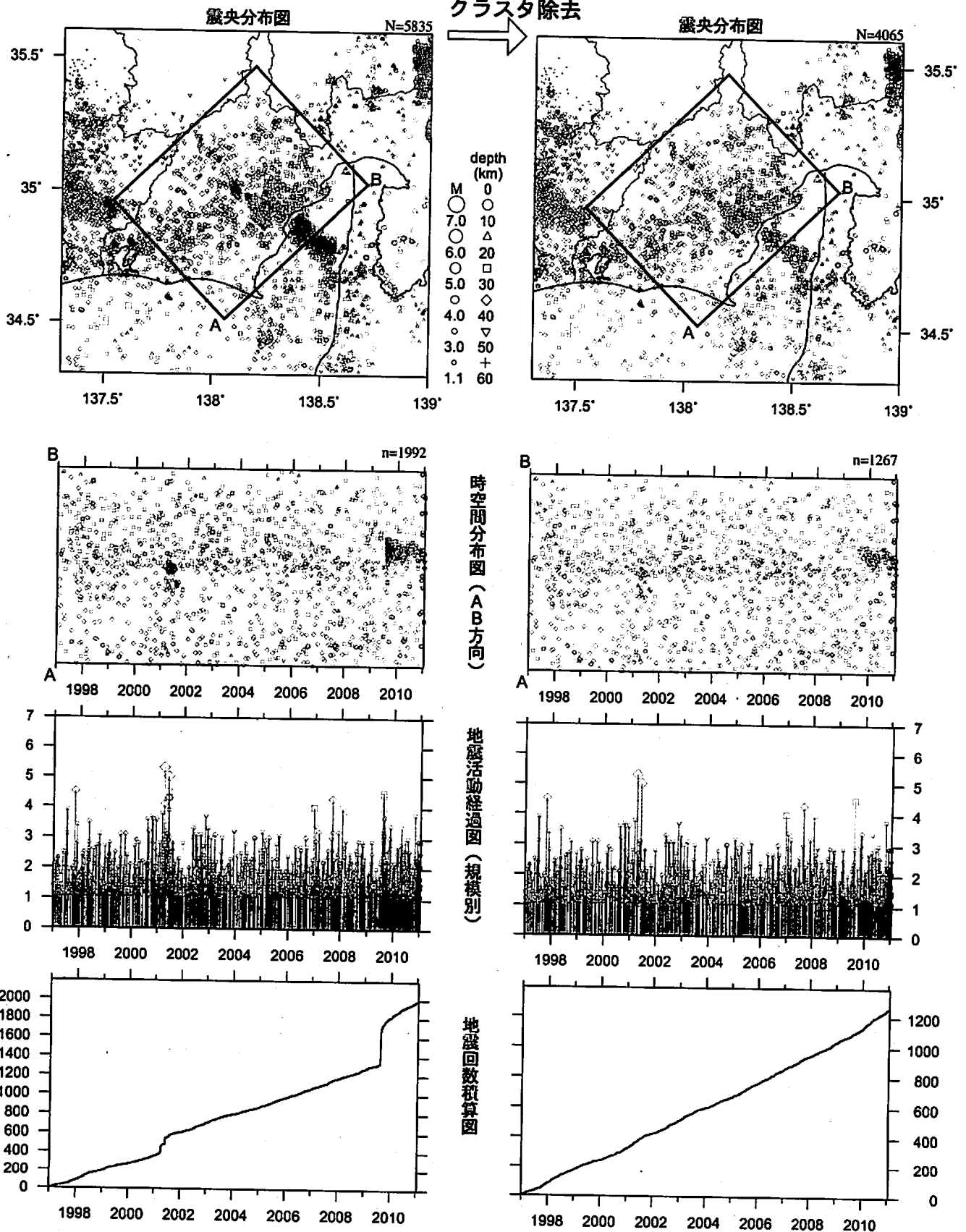


活動指数はやや高い状態を示しているが、クラスタ除去後の地震回数積算図(右下図)からは顕著な変化は見られない。

静岡県中西部（フィリピン海プレート内）

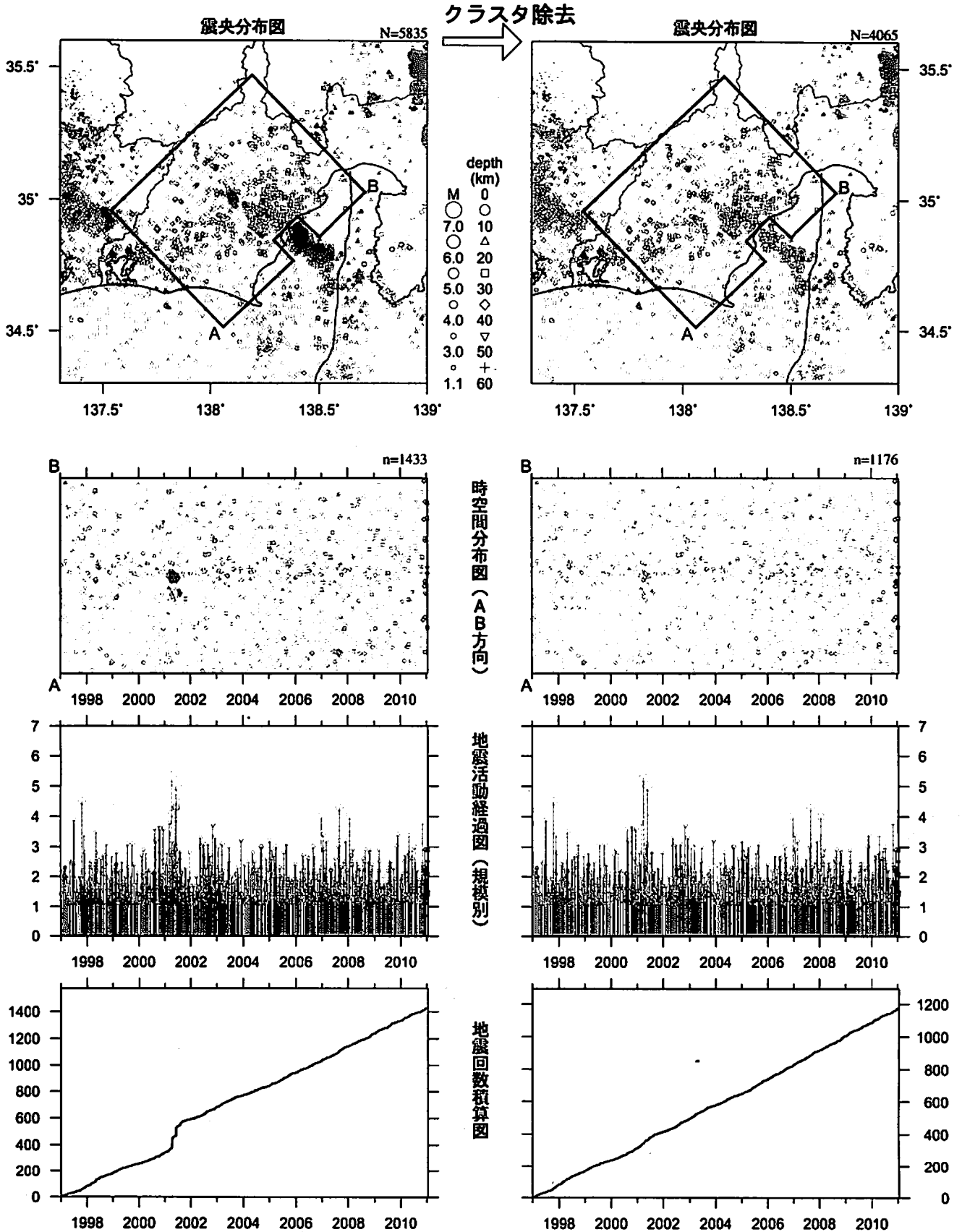
1997/1/1-2011/1/19 M \geq 1.1

クラスタ除去

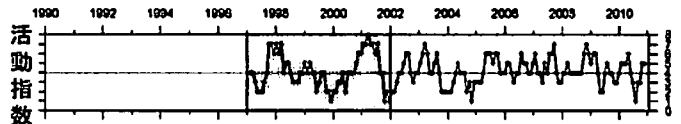


中期活動指数は高い状態を示しており、クラスタ除去後の地震回数積算図(右下図)からも2009年後半からやや活発になっている様子が見られる。これは、2009年8月11日に発生した駿河湾の地震(M6.5)の余震活動が適切にデクラスタされていないためである。

駿河湾の地震(2009年8月11日、M6.5)の余震域を除去
 静岡県中西部(フィリピン海プレート内)
 1997/1/1~2011/1/19 M \geq 1.1



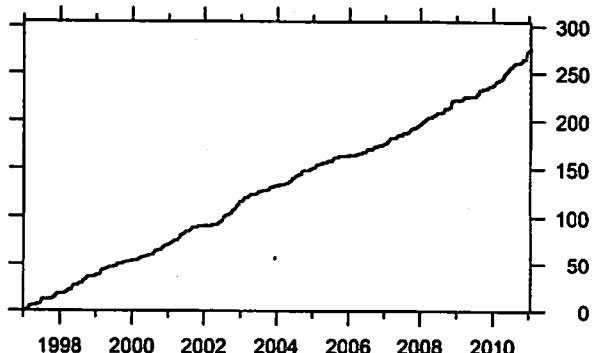
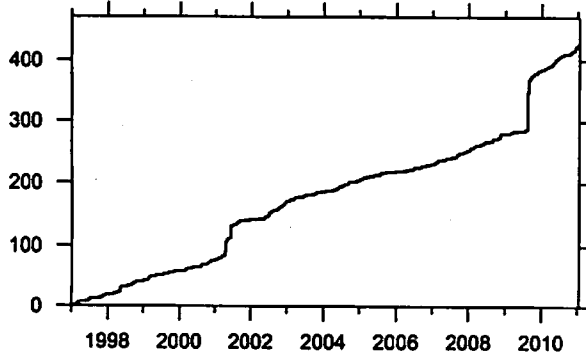
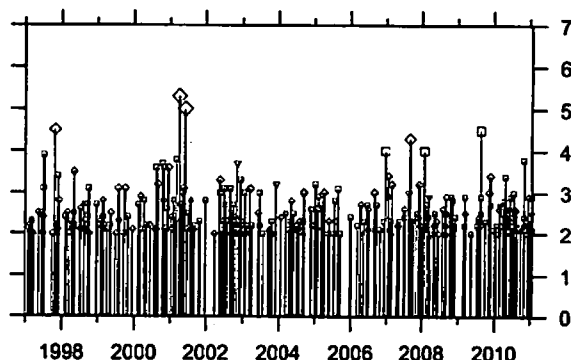
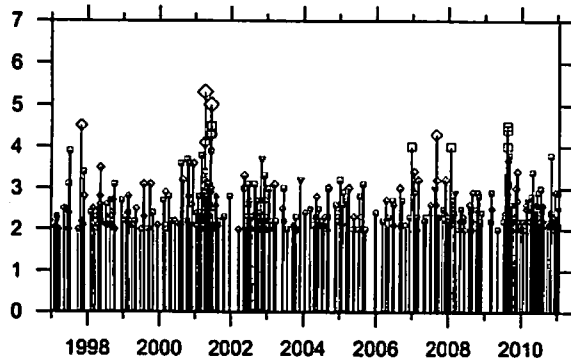
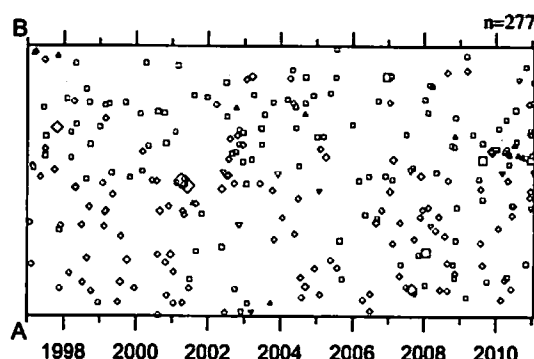
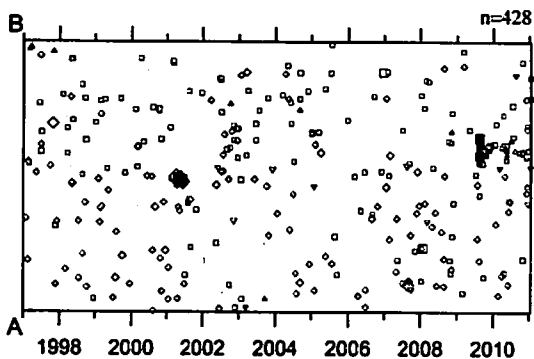
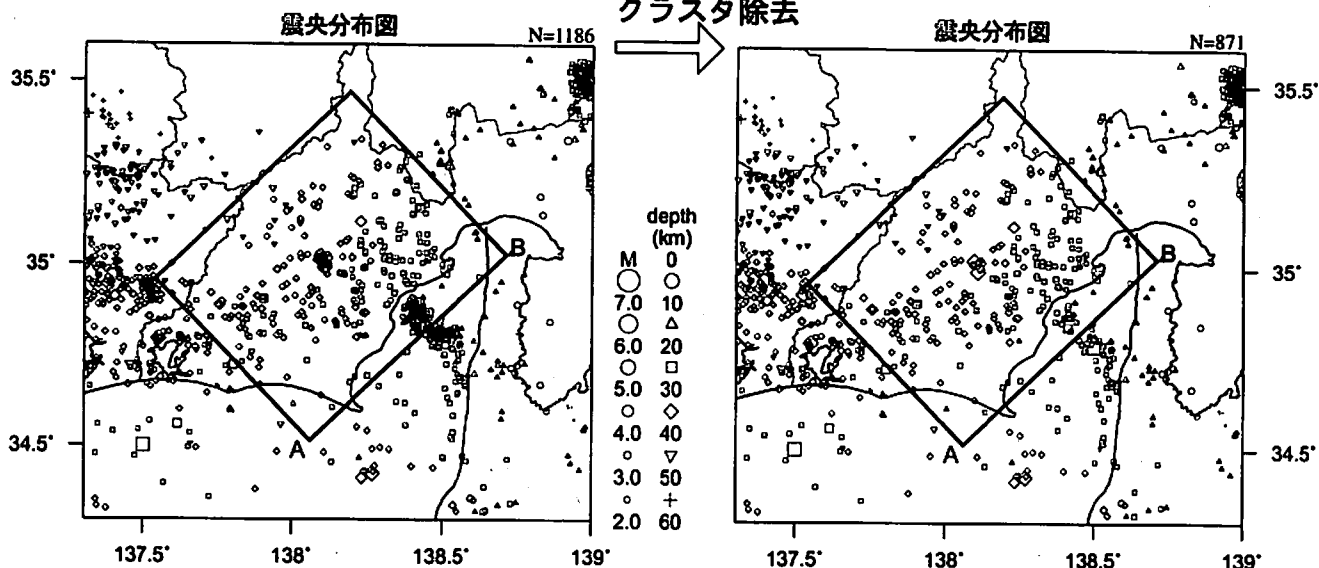
駿河湾の地震(2009年8月11日、M6.5)の余震域を除去した領域で見ると、地震活動はほぼ平常な状態で推移している。



静岡県中西部（フィリピン海プレート内）

1997/1/1~2011/1/19 M \geq 2.0

クラスタ除去



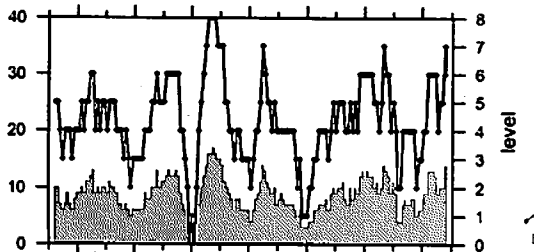
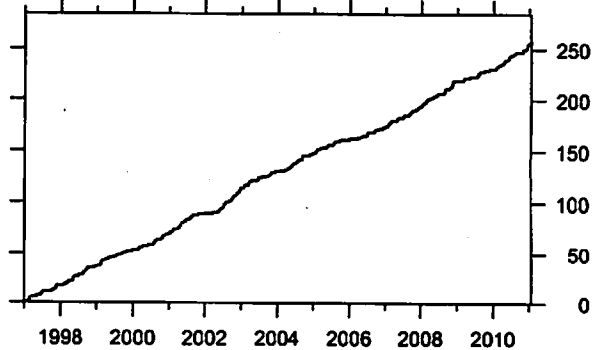
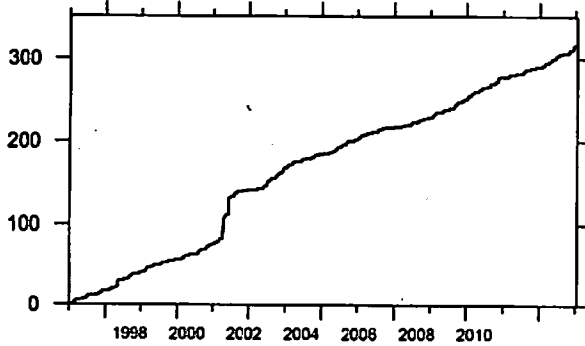
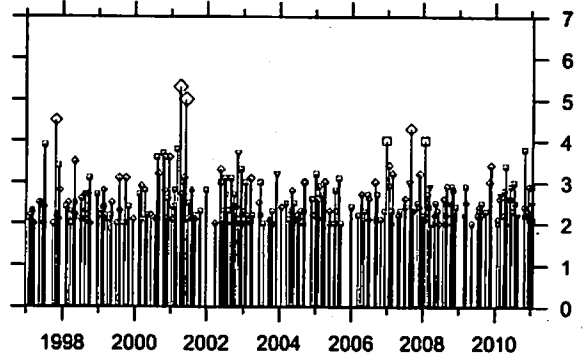
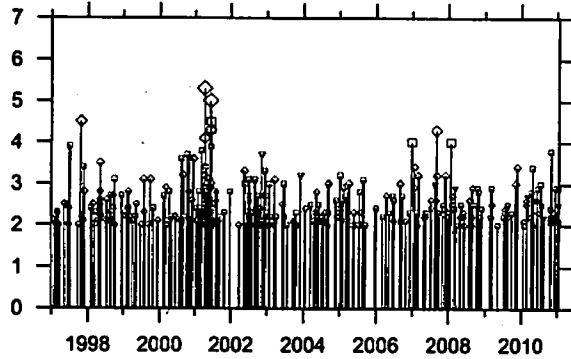
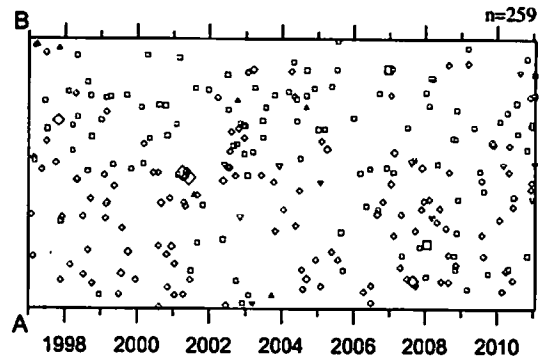
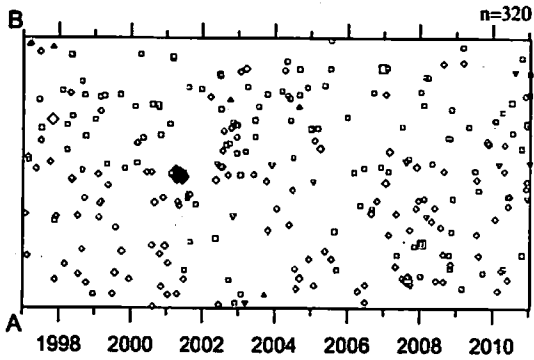
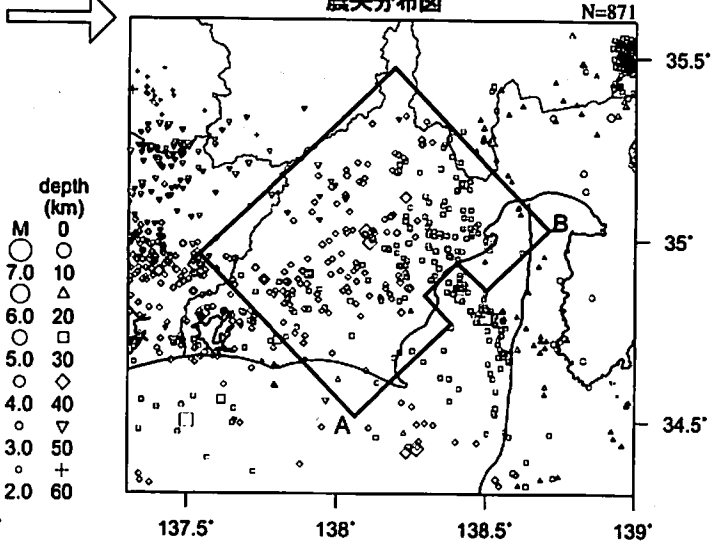
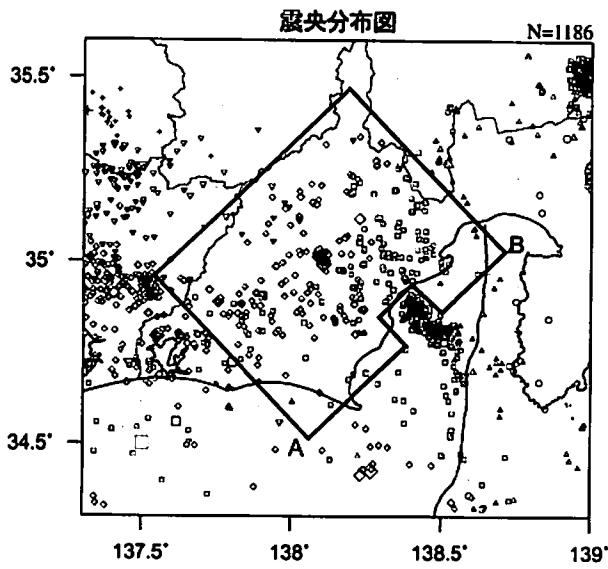
活動指数は高い状態を示しているが、クラスタ除去後の地震回数積算図(右下図)からも2010年以降やや活発になっている様子が見られる。これは、2009年8月11日に発生した駿河湾の地震(M6.5)の余震活動が適切にデクラスタされていないためである。

駿河湾の地震 (2009年8月11日、M6.5) の余震域を除去

静岡県中西部 (フィリピン海プレート内)

1997/1/1-2011/1/19 M \geq 2.0

クラスタ除去



活動指数

駿河湾の地震(2009年8月11日、M6.5)の余震域を除去した領域で見ると、地震活動指数は現在やや高い状態を示しているものの、クラスタ除去後の地震回数積算図(右下図)からは顕著な変化は見られない。

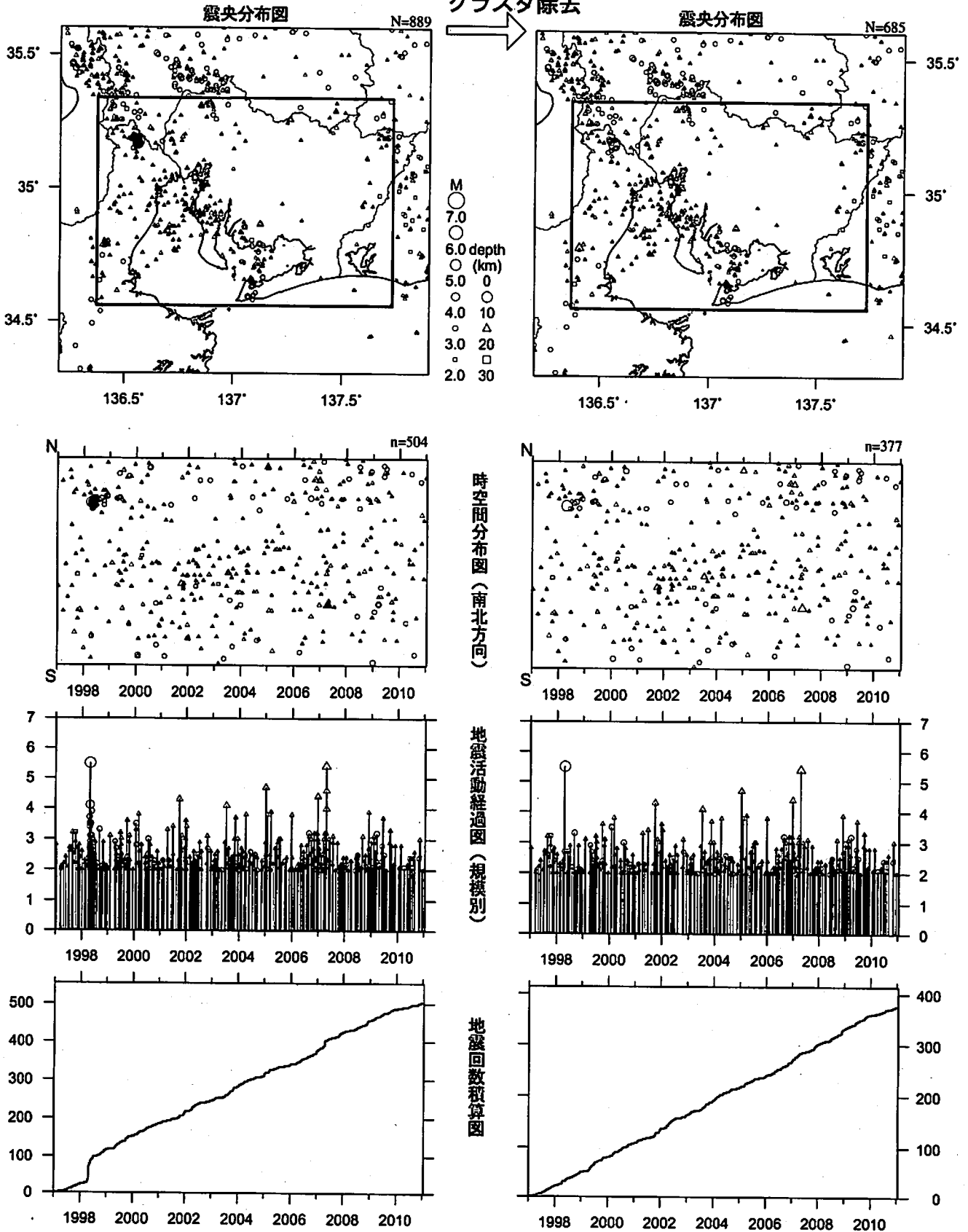
○ : 地震活動指数 (0-8)
 □ : 地震回数 (クラスタを除く)

気象庁作成

愛知県 (地殻内)

1997/1/1~2011/1/19 M \geq 2.0

クラスタ除去

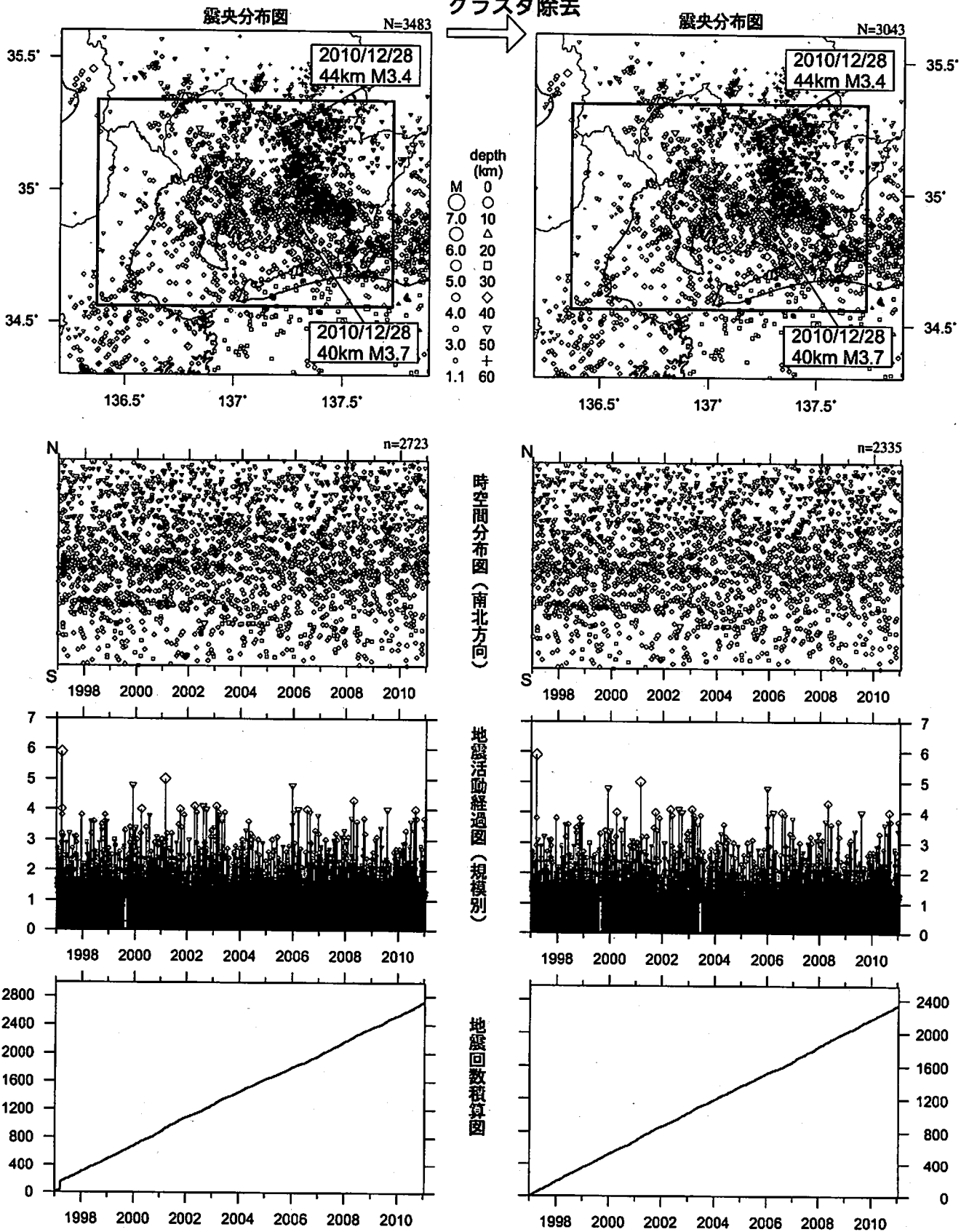


活動指数はほぼ平常な状態を示しているが、クラスタ除去後の地震回数積算図(右下図)からは2009年終わり頃から地震活動がやや静穏な状態になっているように見える。

愛知県 (フィリピン海プレート内)

1997/1/1~2011/1/19 M \geq 1.1

クラスタ除去

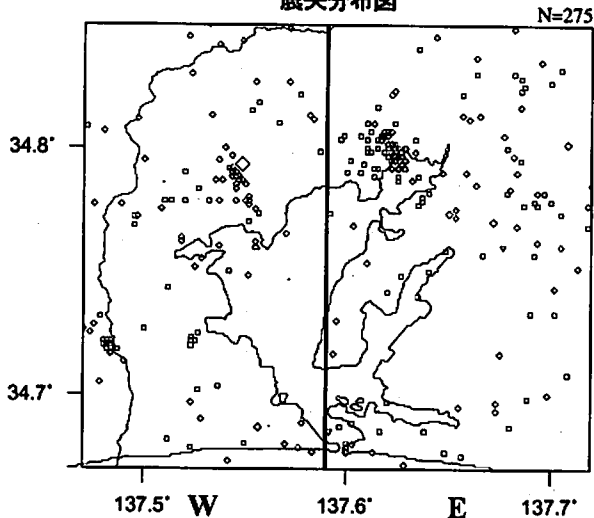


活動指数はやや低い状態を示しているが、クラスタ除去後の地震回数積算図(右下図)からは顕著な変化は見られない。

浜名湖周辺（フィリピン海プレート内）

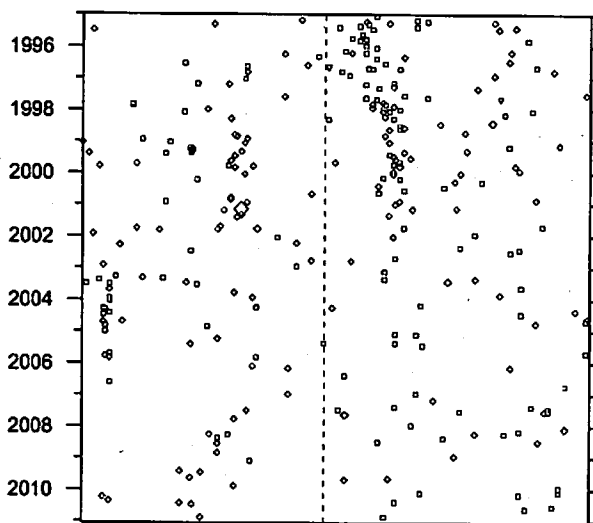
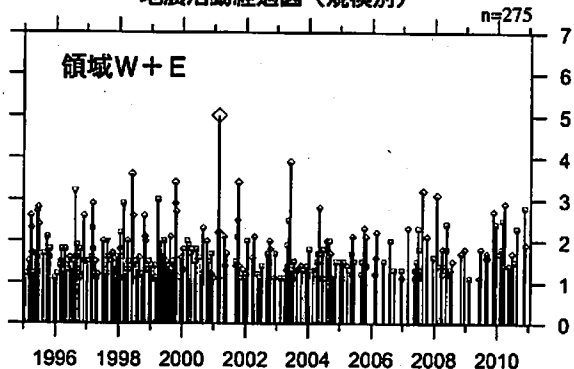
1995/1/1~2011/1/19 M \geq 1.1 *クラスタ除去したデータ

震央分布図



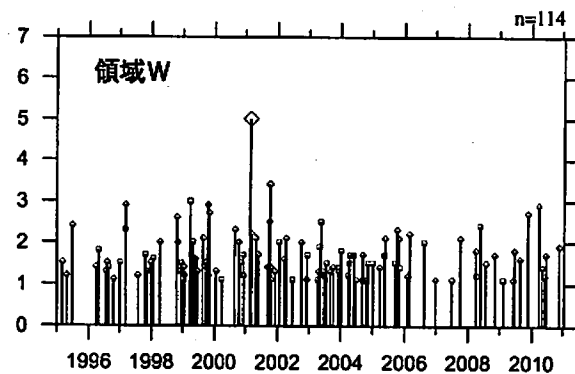
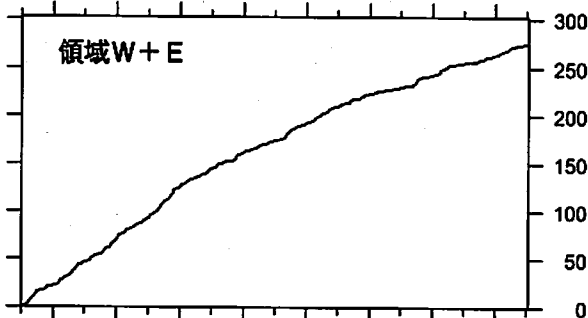
depth (km)
 M
 7.0 ○
 6.0 ○
 5.0 ○
 4.0 ○
 3.0 ○
 1.1 +

地震活動経過図 (規模別)



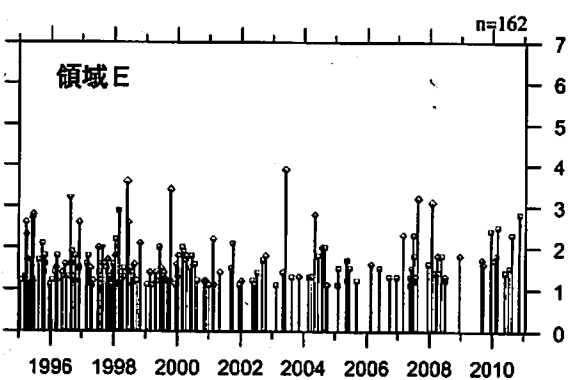
時空間分布図 (東西方向)

地震回数積算図

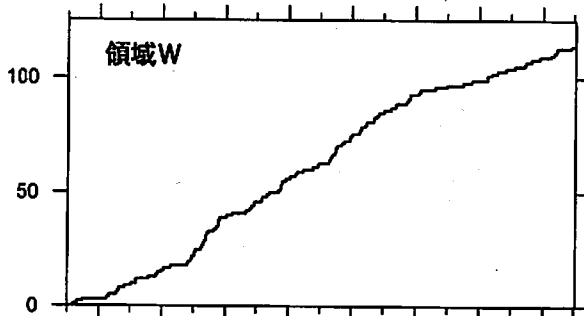


1996 1998 2000 2002 2004 2006 2008 2010

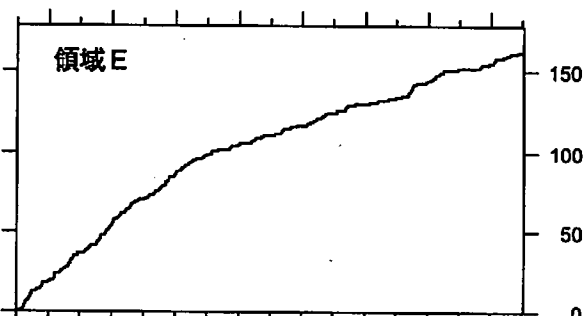
地震活動経過図 (規模別)



1996 1998 2000 2002 2004 2006 2008 2010



地震回数積算図



[東側] 地震回数積算図 (右下図) を見ると、地震活動は2000年以降やや低調であったが、2007年半ば以降回復。その後、2008年半ば以降は再びやや低調。

[西側] 地震回数積算図 (左下図) を見ると、2006年以降やや低調。

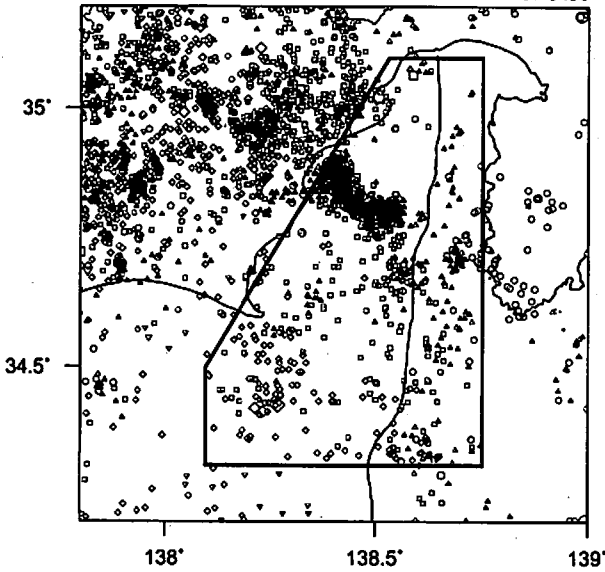
気象庁作成

駿河湾

1990/1/1~2011/1/19 M ≥ 1.4

震央分布図

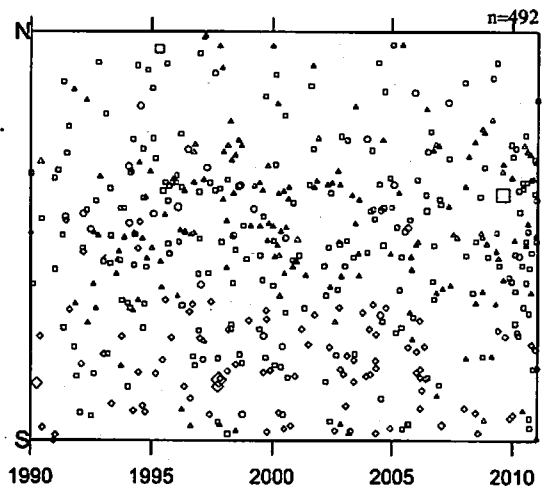
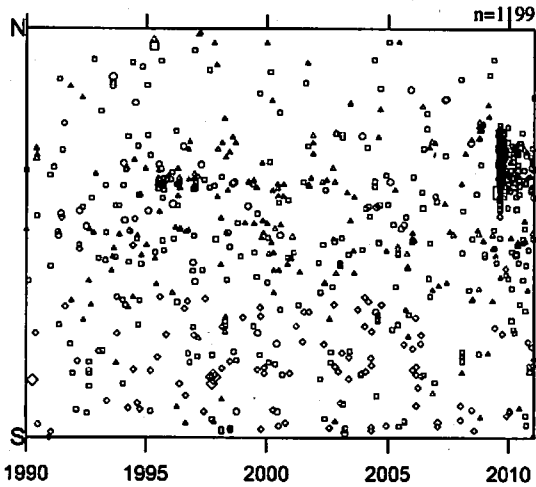
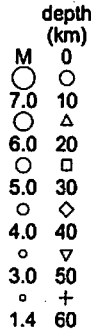
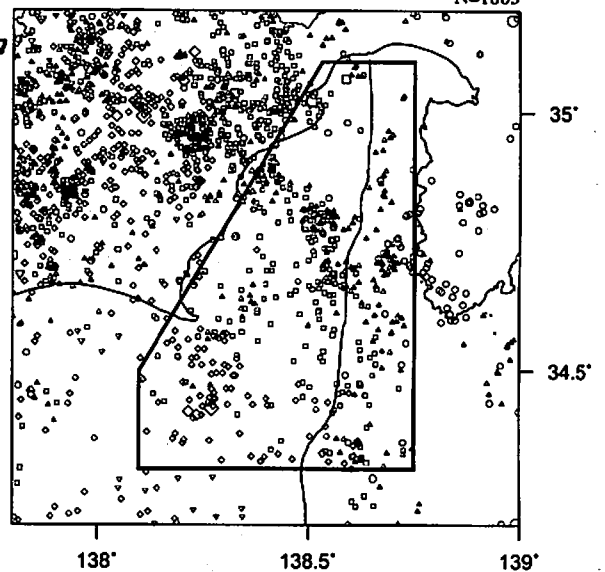
N=3431



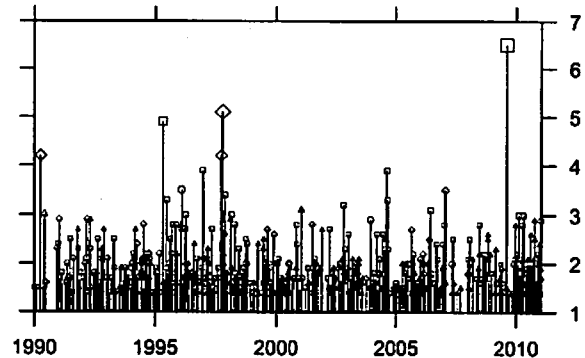
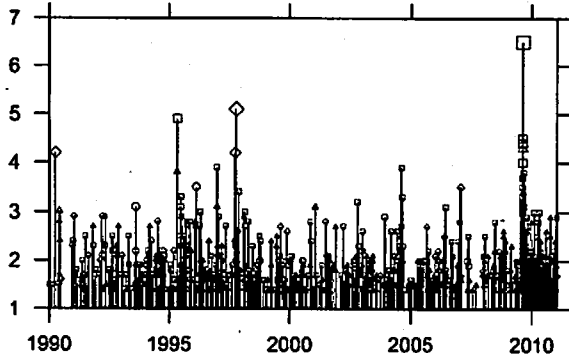
震央分布図

N=1803

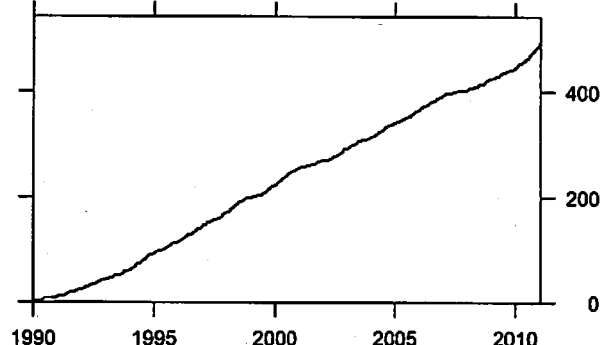
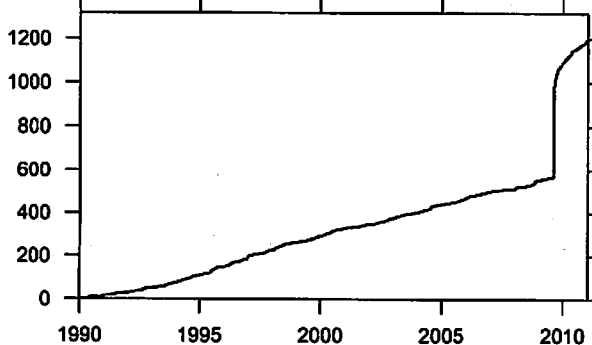
クラスタ除去
→



時空間分布図 (南北方向)



地震活動経過図 (規模別)



地震回数積算図

活動指数は高い状態を示しているが、クラスタ除去後の地震回数積算図(右下図)からも2010年頃からやや活発になっている様子が見られる。これは、2009年8月11日に発生した駿河湾の地震(M6.5)の余震活動が適切にデクラスタされていないためである。

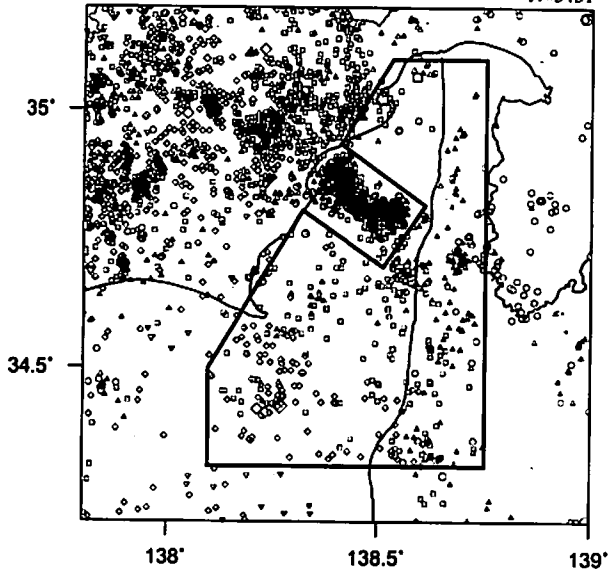
駿河湾の地震(2009年8月11日、M6.5)の余震域を除去

駿河湾

1990/1/1-2011/1/19 M ≥ 1.4

震央分布図

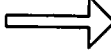
N=3431



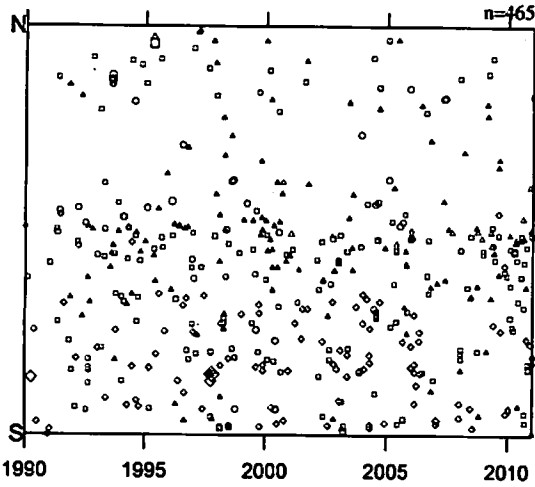
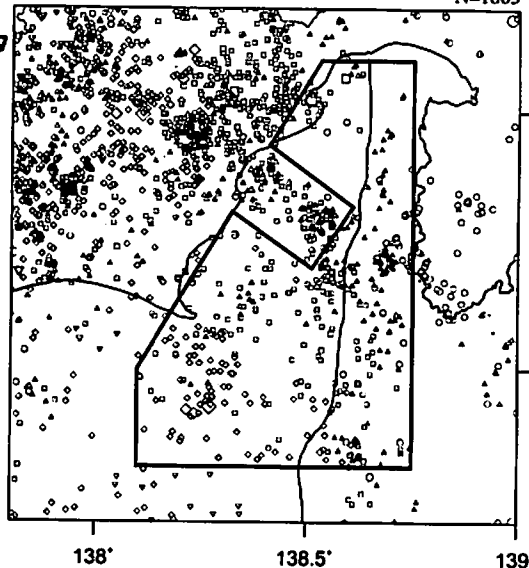
震央分布図

N=1803

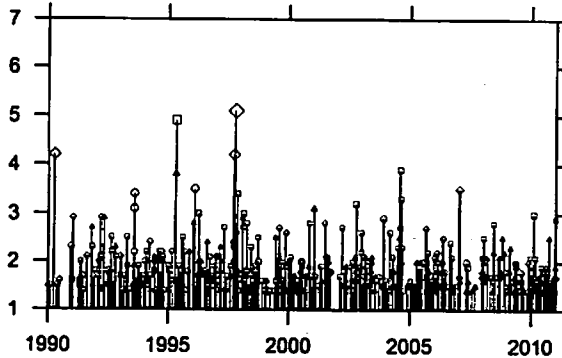
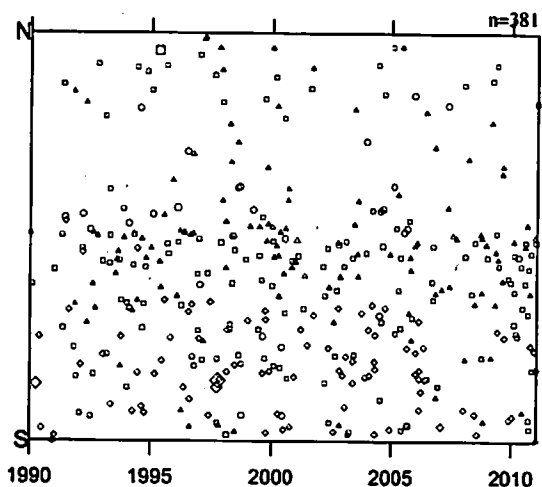
クラスタ除去



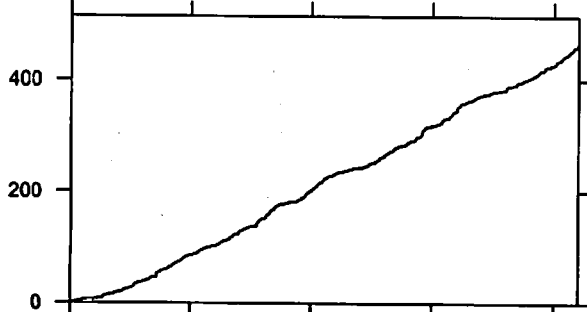
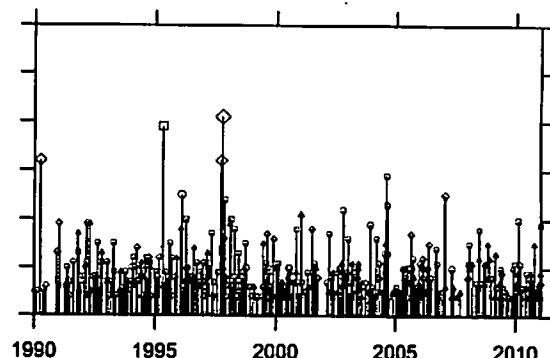
depth (km)
 M 0 ○
 7.0 ○
 6.0 ○
 5.0 ○
 4.0 ○
 3.0 ○
 1.4 ○
 0 △
 10 □
 20 ◇
 30 ◇
 40 ◇
 50 △
 60 +



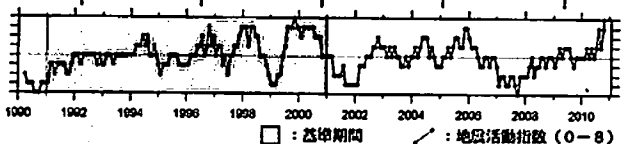
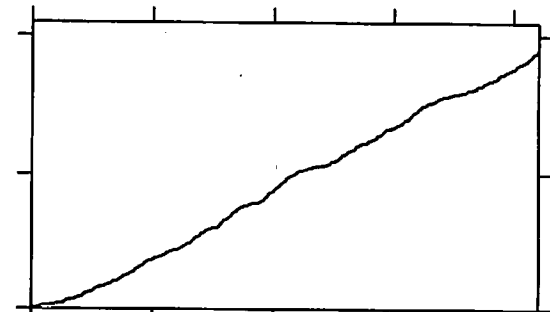
時空間分布図(南北方向)



地震活動経過図(規模別)



地震回数積算図



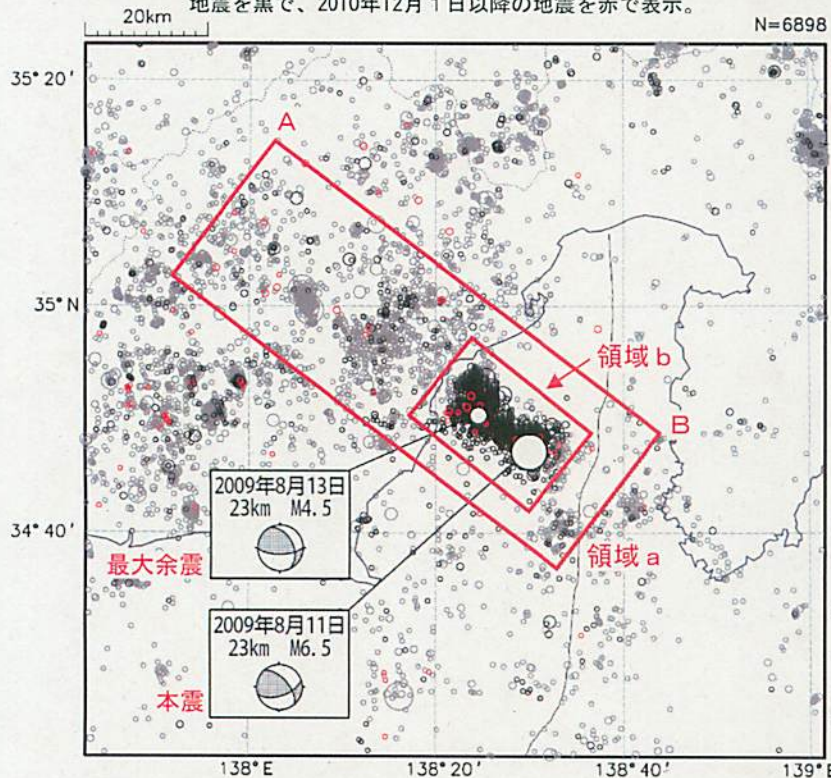
気象庁作成

駿河湾の地震(2009年8月11日、M6.5)の余震域を除去した領域で見ても、地震活動指数は2010年中頃からやや高い状態を示しており、クラスタ除去後の地震回数積算図(右下図)からもそのような傾向が見られる。このような傾向は、例えば、2005年頃などにも見られる。

2009年8月11日 駿河湾の地震の余震域の地震活動

震央分布図 (1997年10月1日~2011年1月19日、
M \geq 1.0、深さ0~60km)

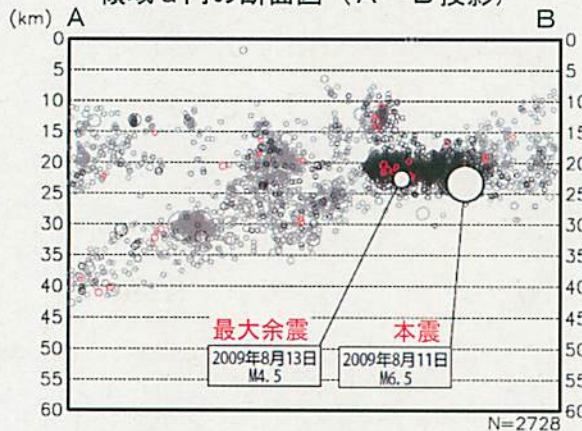
2009年8月10日以前の地震を灰色で、2009年8月11日~2010年11月30日までの地震を黒で、2010年12月1日以降の地震を赤で表示。



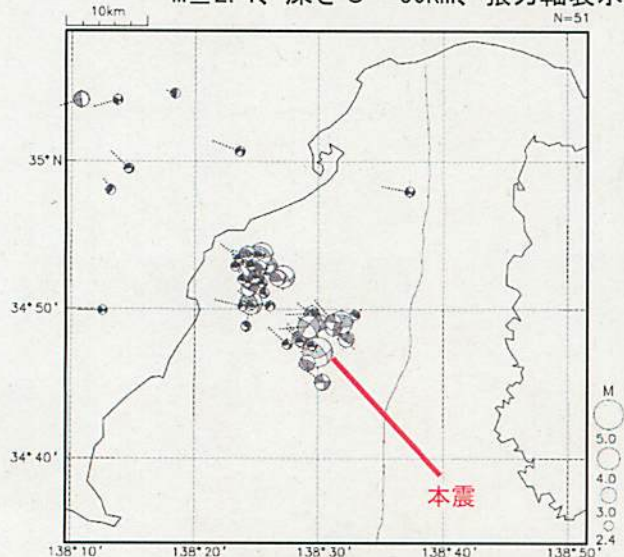
2009年8月11日に駿河湾で発生したM6.5の地震(最大震度6弱)の余震活動は順調に減衰している。

2009年8月11日の地震のおおよその余震域(領域b)では、2010年10月16日を最後に、震度1以上を観測する地震は発生していない。

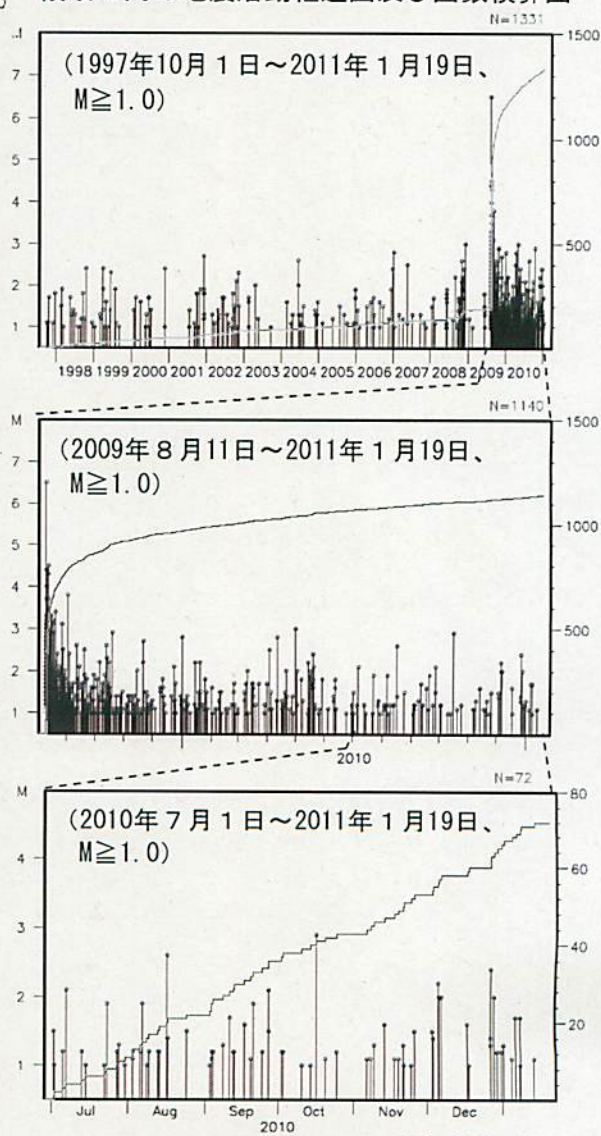
領域 a 内の断面図 (A-B 投影)



発震機構の分布図 (2009年8月11日~2011年1月19日、
M \geq 2.4、深さ0~60km、張力軸表示)



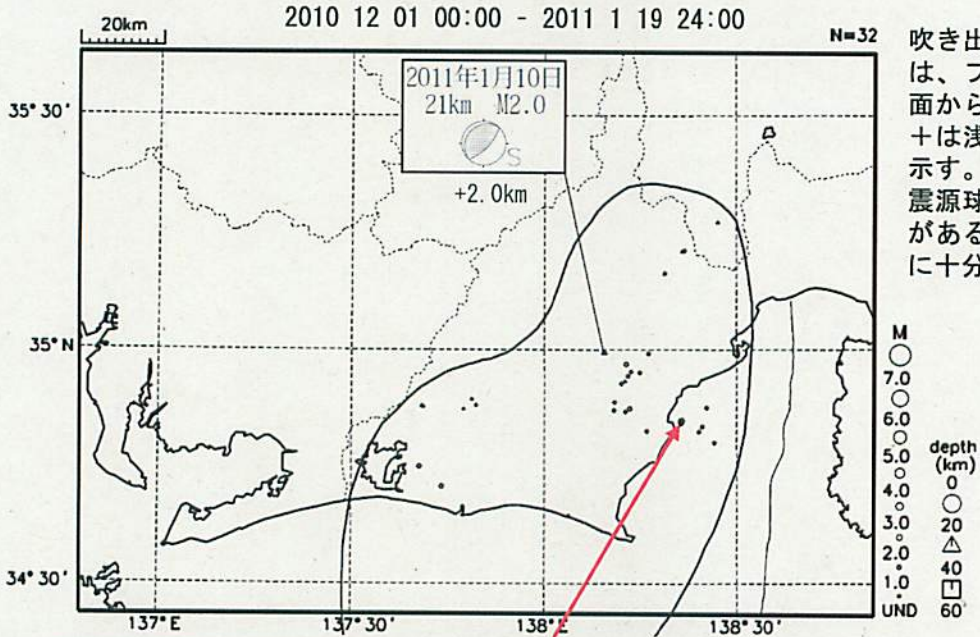
領域 b 内の地震活動経過図及び回数積算図



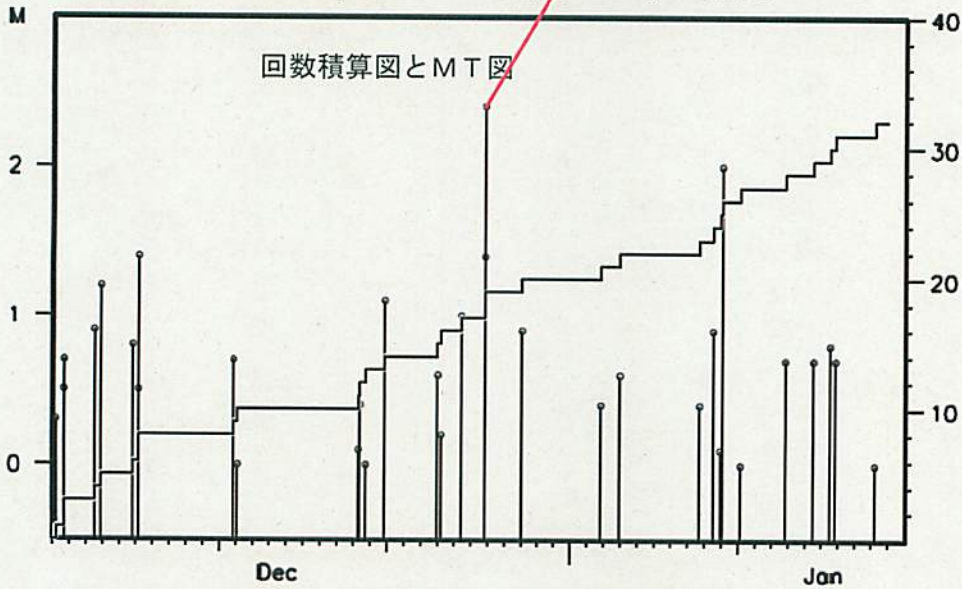
プレート境界とその周辺の地震活動(最近の活動状況)

(Hirose et al. (2008)によるフィリピン海スラブ上面深さの±3kmの地震を抽出)

プレート境界とその周辺の地震の震央分布 (最近1ヶ月半、Mすべて)

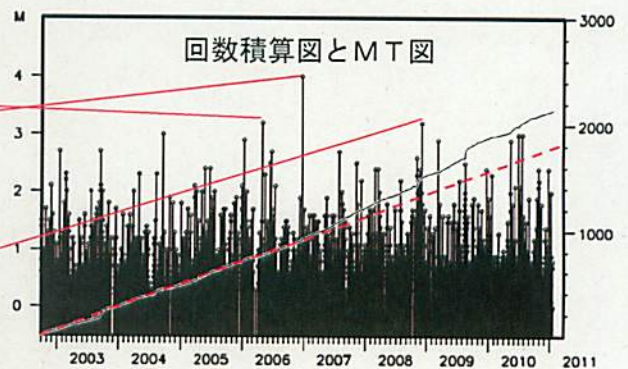
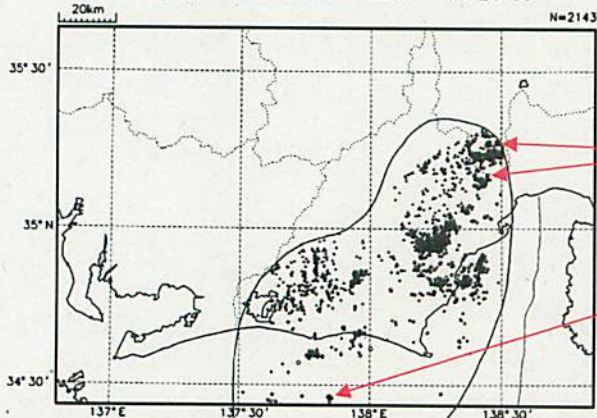


吹き出しの傍に書かれた値は、フィリピン海スラブ上面からの鉛直方向の距離。+は浅く、-は深いことを示す。また、吹き出し図中、震源球右下隣りにSの表示があるものは、発震機構解に十分な精度がない。



プレート境界とその周辺の地震の震央分布 (2002年10月以降、Mすべて)

2002 10 01 00:00 - 2011 1 19 24:00



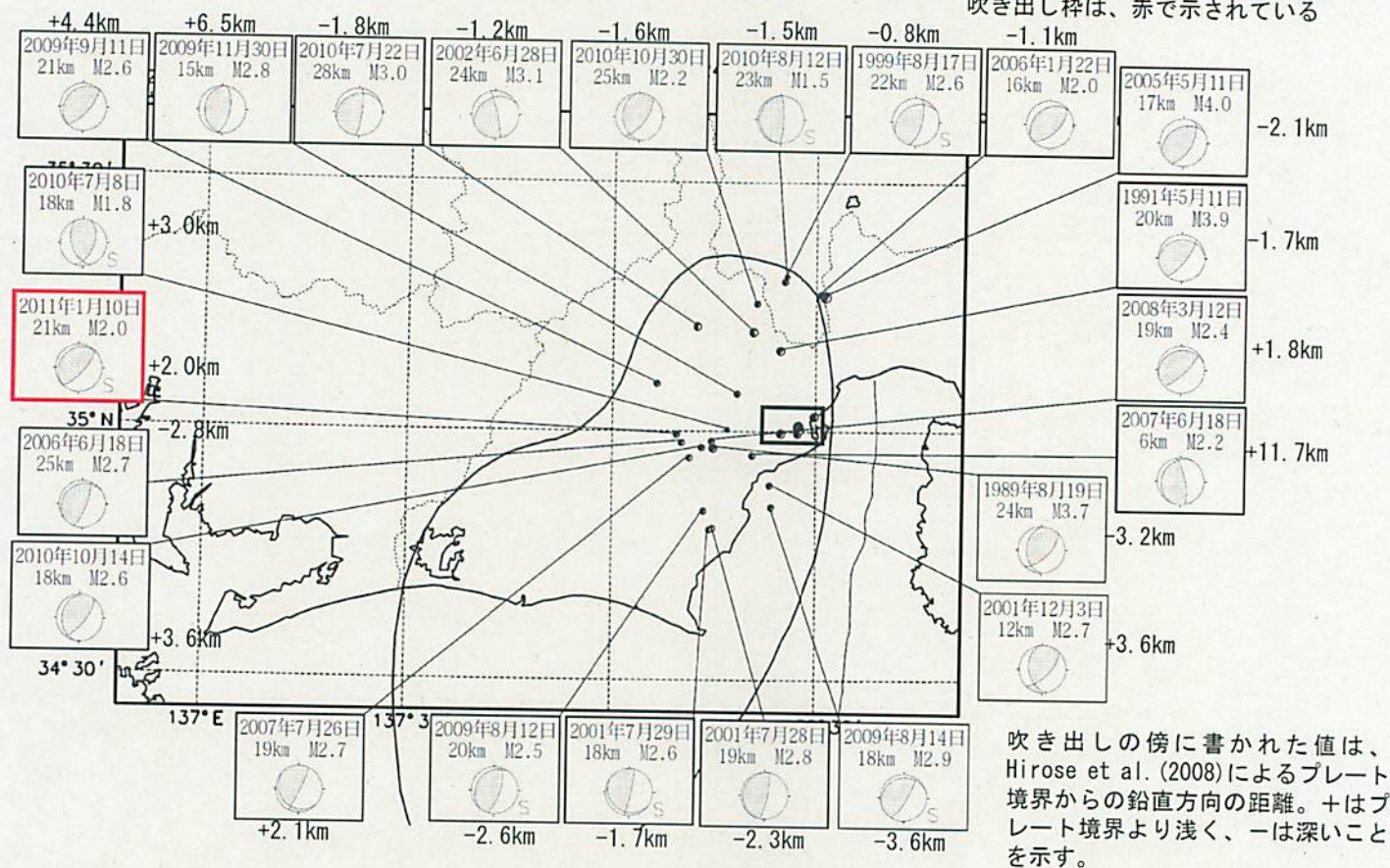
2002年10月以降(Mすべて)で見ると、東海地域のプレート境界とその周辺の地震活動は、2007年中頃あたりからやや活発に見える。なお、2009年8月11日以降は、駿河湾の地震(M6.5)の余震活動の一部を抽出している。M3を超える地震については、その震央を矢印で示しているが、これらの地震の発震機構解は想定東海地震のものとは類似の型ではない。

気象庁作成

想定東海地震の発震機構解と類似の型の地震

1987年9月1日～2011年1月19日

2010年12月以降に発生した地震の吹き出し枠は、赤で示されている

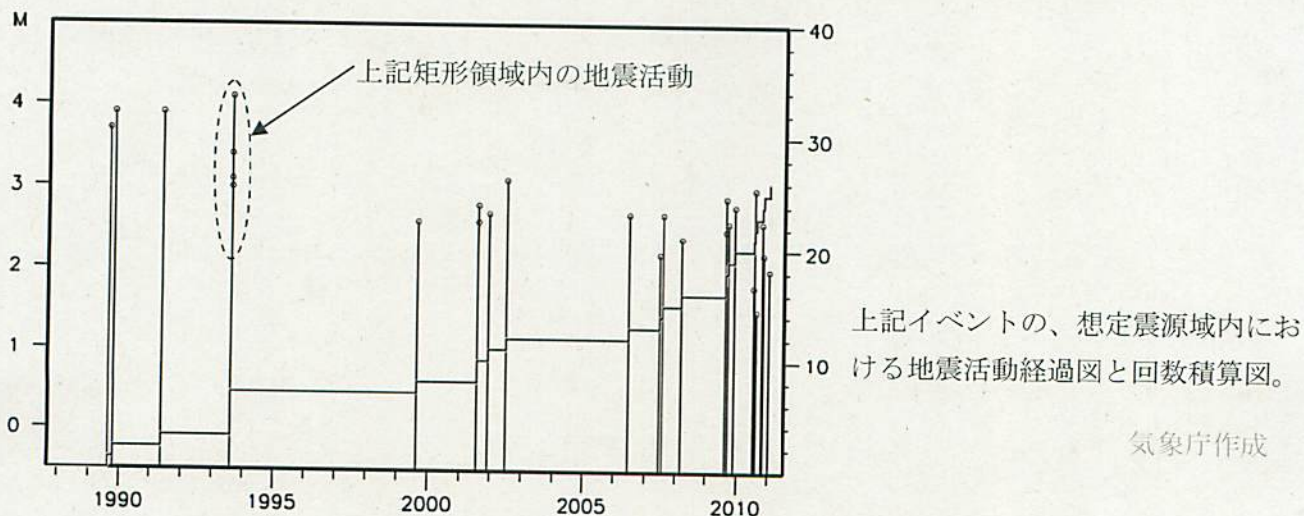


想定東海地震の発震機構解と類似の型の地震を抽出した。抽出条件は、P軸の傾斜角が45度以下、かつP軸の方位角が65度以上145度以下、かつT軸の傾斜角が45度以上、かつN軸の傾斜角が30度以下とした。

図中、矩形領域内では、1989年10月および1993年8月に、5個の深さ0km～9kmの上記条件を満たす地震が観測されているが、吹き出しには示していない。

プレート境界で発生したと疑われる地震の他、明らかに地殻内で発生したと推定される地震も含まれている。また、2009年までに発生した地震については、Nakamura et al. (2008)の3次元速度構造で震源とメカニズム解を再精査し、いくつかの地震は候補から削除されている。

なお、吹き出し図中、震源球右下隣りにSの表示があるものは、発震機構解に十分な精度がない。



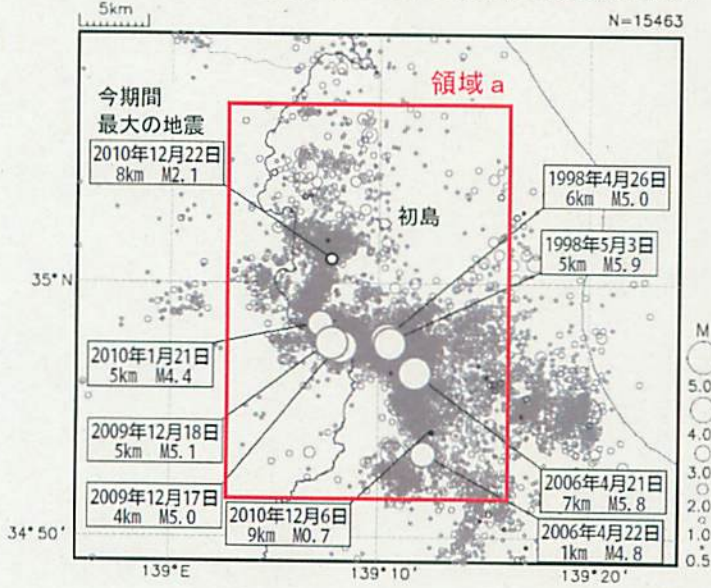
12月～1月 伊豆半島東方沖の活動

12月下旬から1月にかけて、伊豆半島の体積歪計（東伊豆奈良本）及び傾斜計（伊東、岡、徳永、吉田）では、目立った歪変化は観測されていない。なお、12月22日に父島近海の地震による変化が見られる。

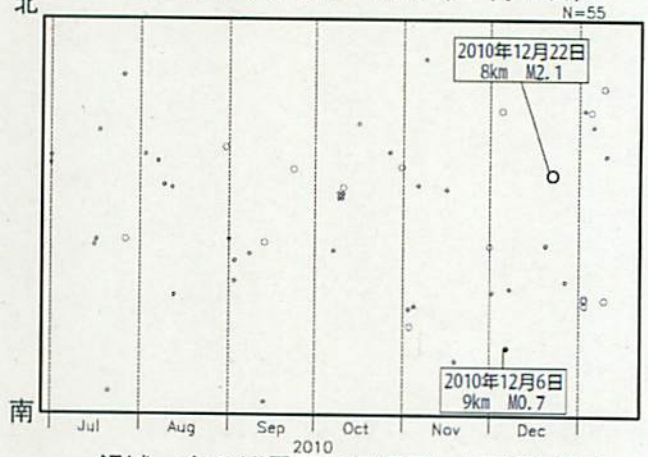
12月6日から7日にかけて、M0.7を最大とする12個の地震が観測されたが、これ以外に特に目立った地震活動はなかった。2010年12月以降、領域a内で発生し震度1以上を観測した地震はなかった。この期間の最大の地震は、12月22日20時00分に発生したM2.1の地震（震度1以上を観測した地点なし）であった。

震央分布図（1997年10月1日～2011年1月19日、 $M \geq 0.5$ 、深さ0～20km）

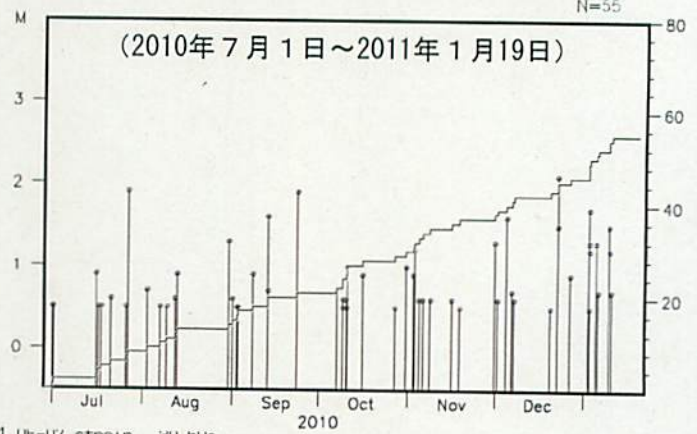
2010年11月までの地震を薄く、2010年12月以降の地震を濃く表示。



領域a内の時空間分布図（南北投影）
（2010年7月1日～2011年1月19日）



領域a内の地震活動経過図、回数積算図



東伊豆地域の体積歪計・傾斜計の記録
（2010年12月1日～2011年1月20日）

※ 防) は独立行政法人防災科学技術研究所の観測点

体積歪・傾斜 (気圧・潮汐補正; 時間値)

2010/12/01 00:00 - 2011/01/21 00:00

東伊豆奈良本LIP
-1.500000E-08/DAY

防)伊東傾NS

防)伊東傾EW

防)岡傾NS

防)岡傾EW

防)徳永傾NS

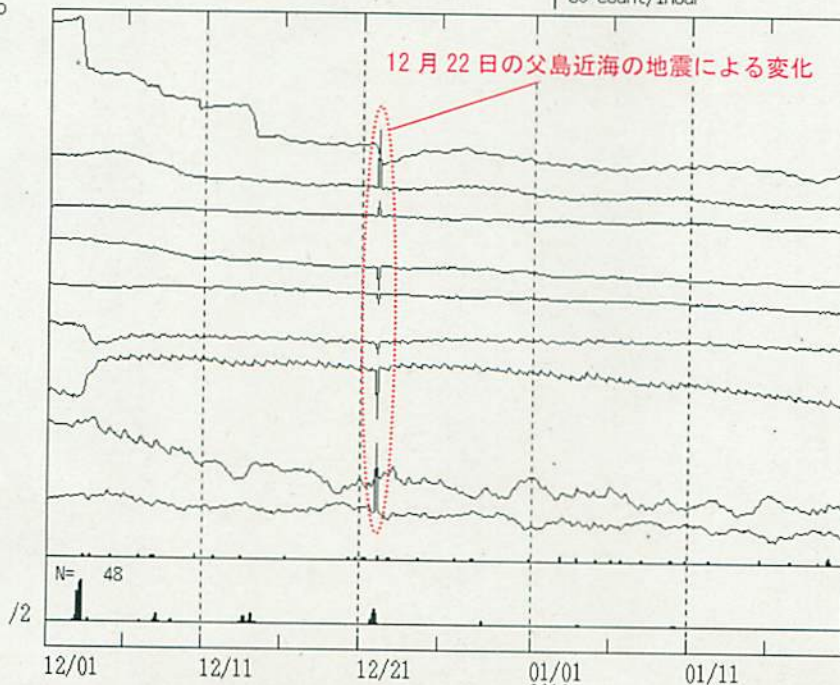
防)徳永傾EW

防)吉田傾NS

防)吉田傾EW

鎌田地震回数

網代雨



2009年12月の活動領域



防)は独立行政法人防災科学技術研究所の観測点である。

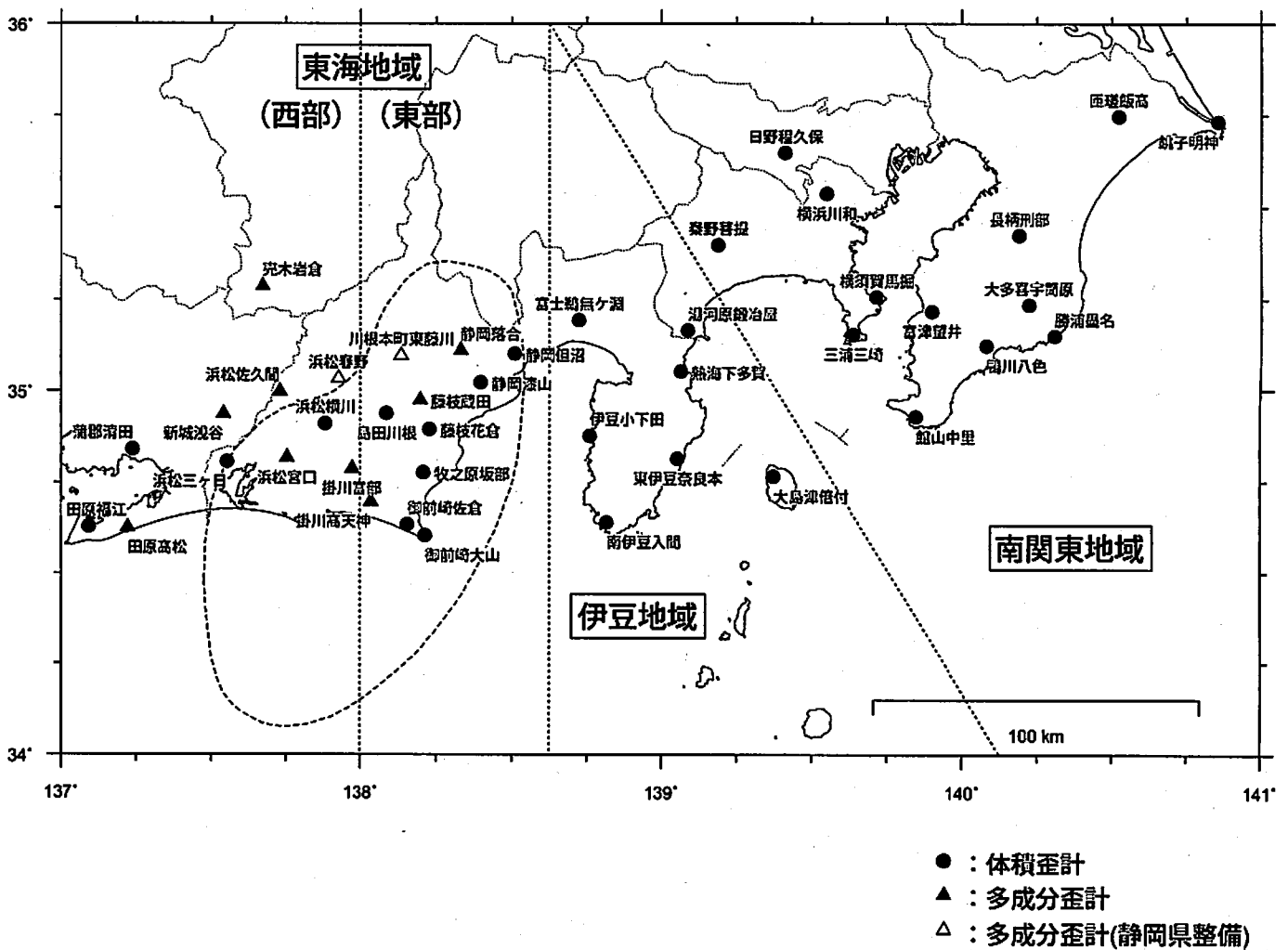
気象庁作成

歪計による観測結果 (2010年7月1日～2011年1月20日)

短期的ゆっくり滑りに起因すると見られる次の地殻変動が歪計観測網で観測された。

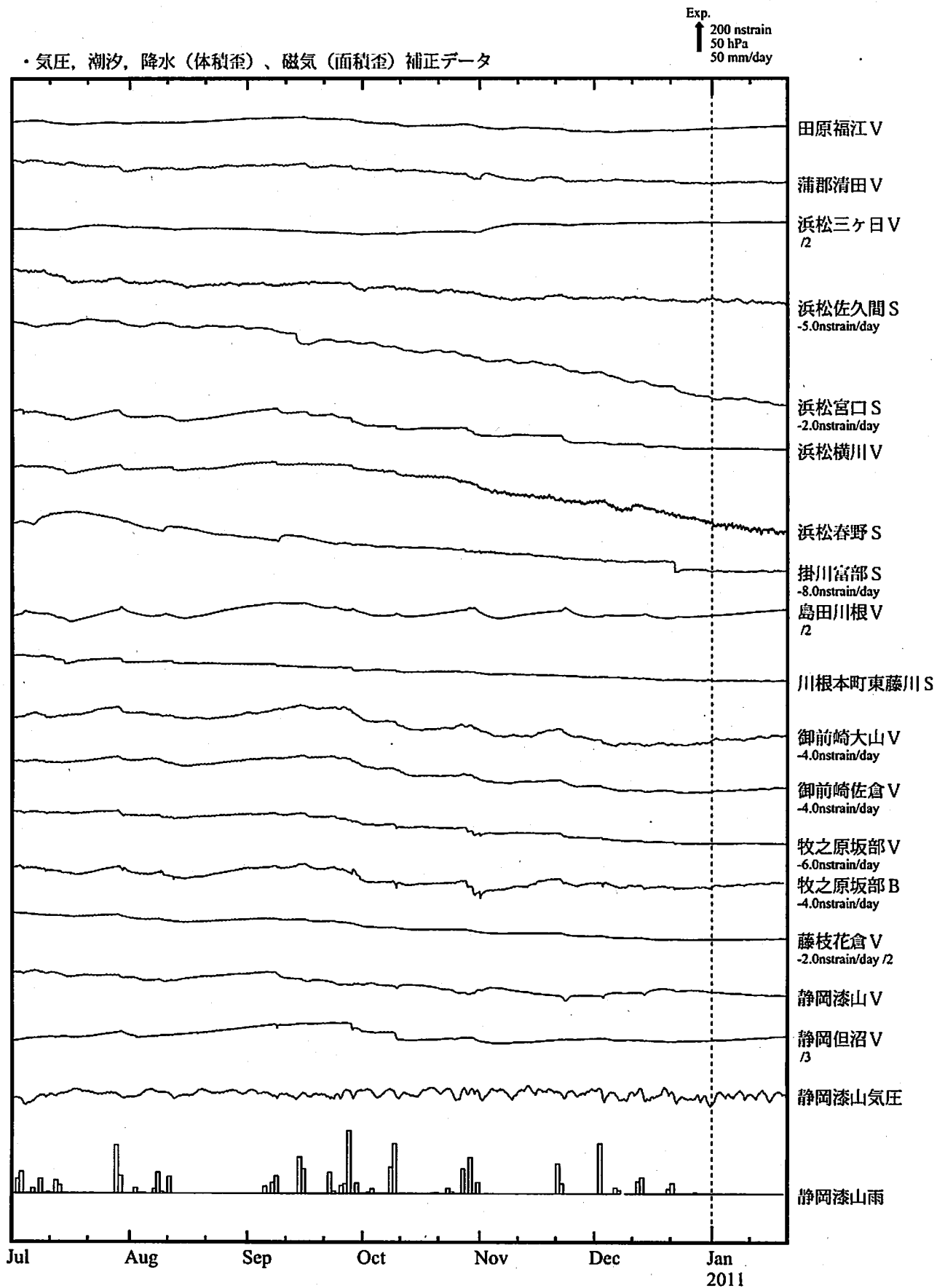
SSE1 : 2010年11月13日頃から22日頃にかけて観測された(第296回判定会委員打合せ会資料参照)。

歪計の配置図

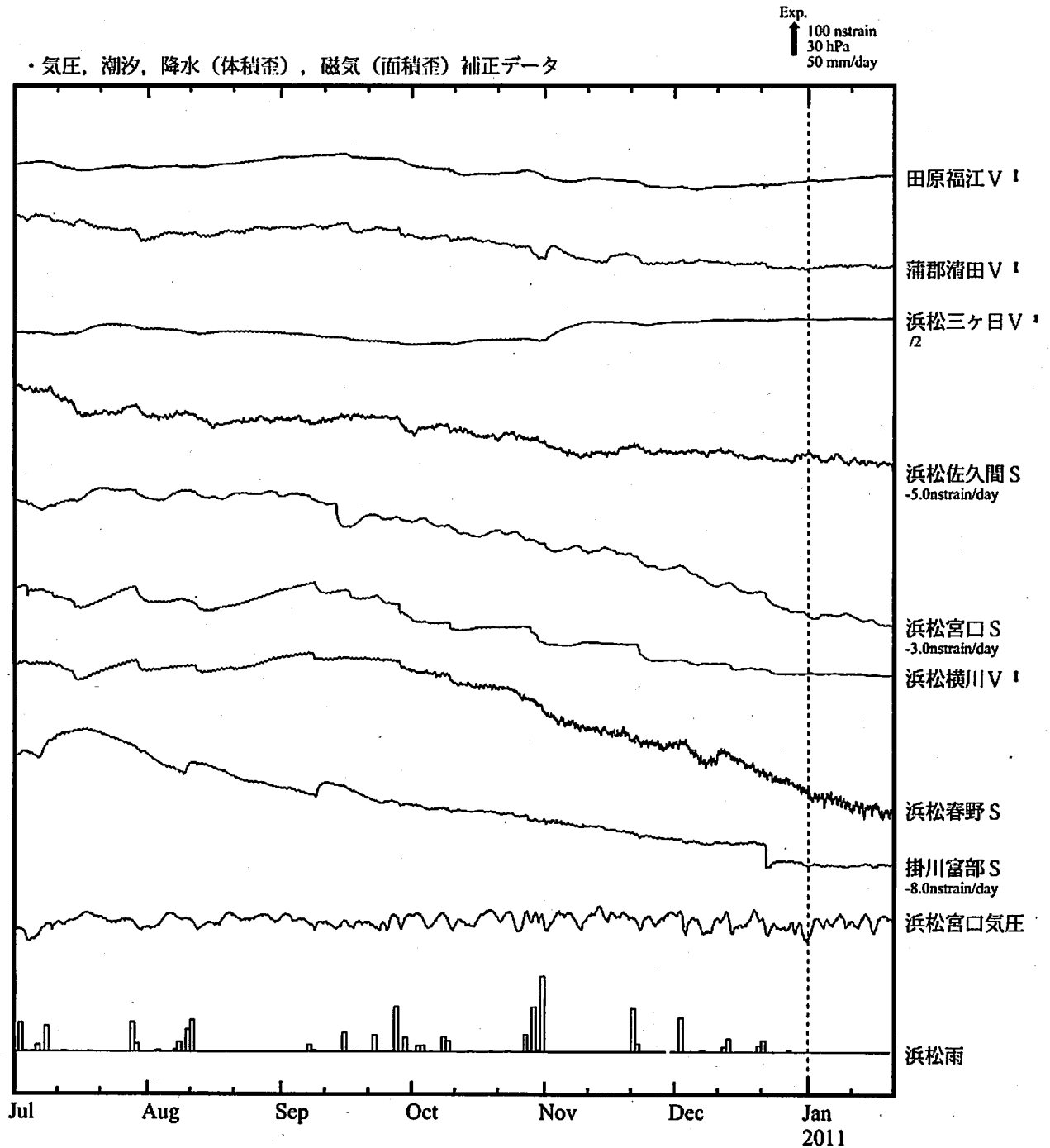


気象庁作成

地殻体積歪変化 時間値 (東海地域)



地殻体積歪変化 時間値 (東海地域 (西部))



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の変化の幅(ノイズレベル)を示す。
※記号Vは体積歪を、Sは多成分歪計で観測した線歪より計算した面積歪を示す。

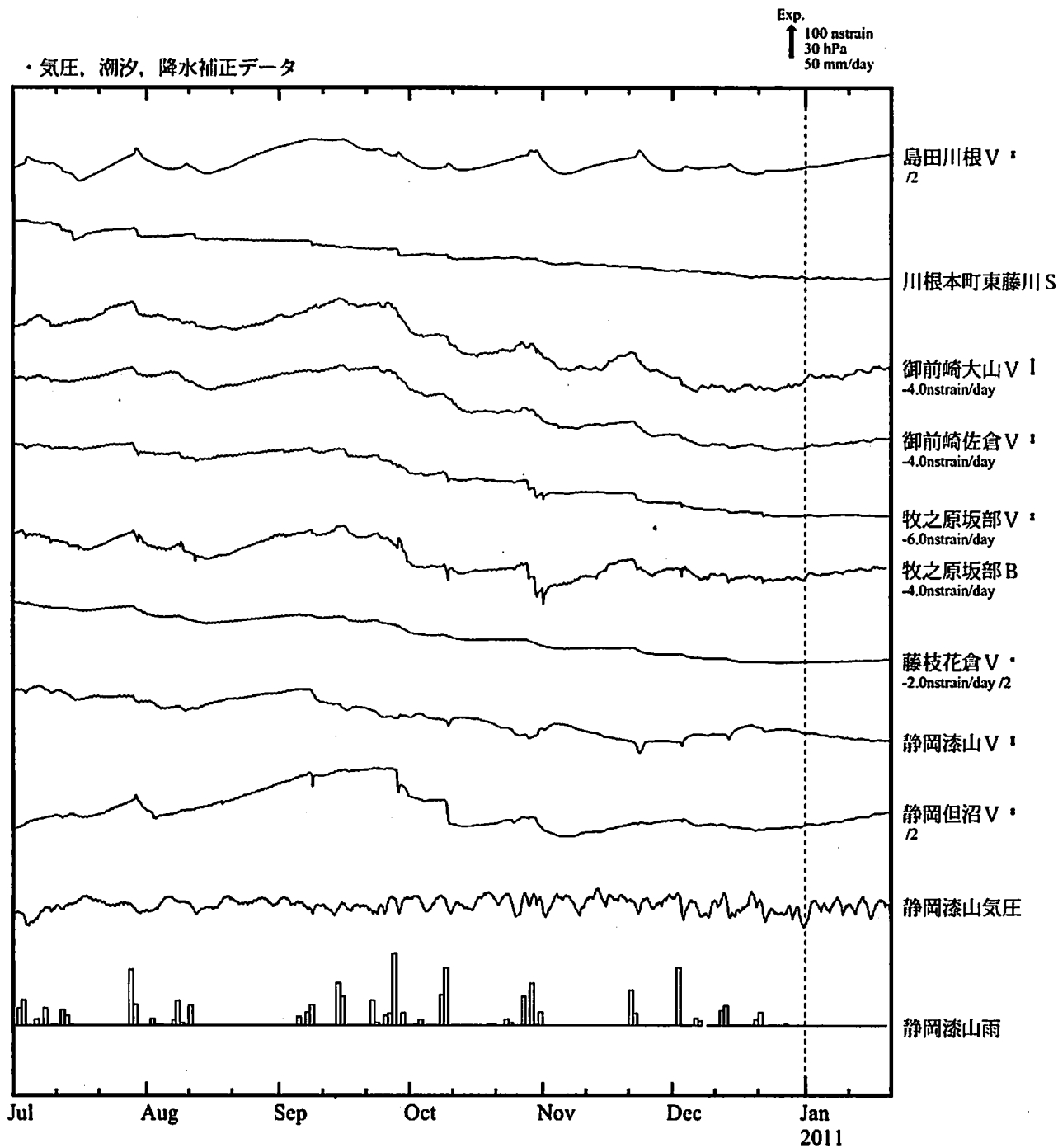
・特記事項なし。

表示観測点の名称

- C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化
- L : 局所的な変化
- S : 例年見られる変化
- M : 調整

田原福江	たはらふくえ
蒲郡清田	がまごおりせいだ
浜松三ヶ日	はまつみっかび
浜松佐久間	はまつさくま
浜松宮口	はまつみやぐち
浜松横川	はまつよこかわ
浜松春野	はまつはるの
掛川富部	かけがわとんべ

地殻体積歪変化 時間値 (東海地域 (東部))



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の变化の幅(ノイズレベル)を示す。
 ※記号Vは体積歪を、Sは多成分歪計で観測した線歪より計算した面積歪を示す。

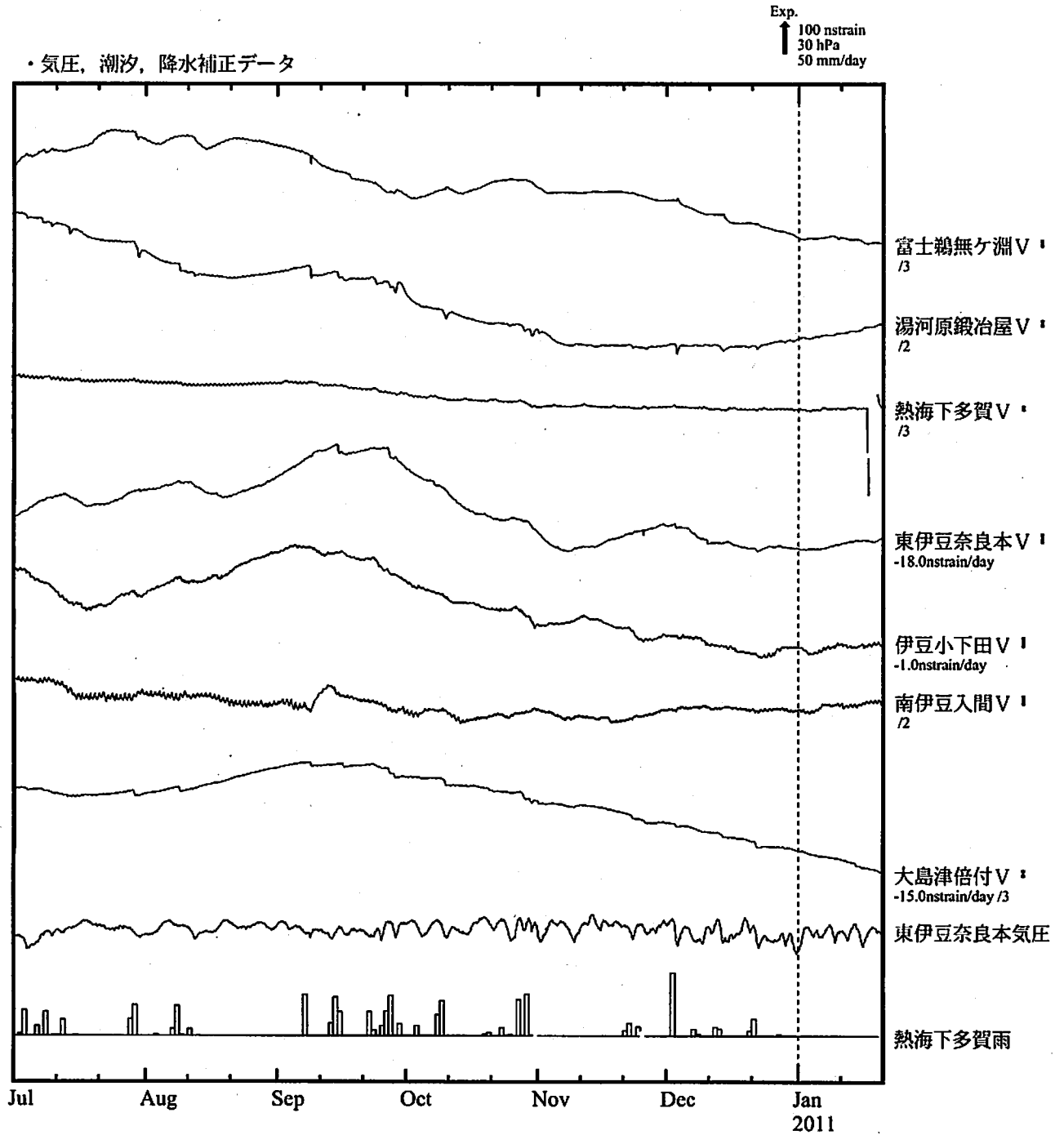
・特記事項なし。

- C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化
- L : 局所的な変化
- S : 例年見られる変化
- M : 調整

表示観測点の名称

島田川根	しまだかわね
川根本町東藤川	かわねほんちょう
	ひがしふじかわ
御前崎大山	おまえざきおおやま
御前崎佐倉	おまえざきさくら
牧之原坂部	まきのはらさかべ
藤枝花倉	ふじえだはなくら
静岡漆山	しずおかうるしやま
静岡但沼	しずおかただぬま

地殻体積歪変化 時間値 (伊豆地域)



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の変化の幅(ノイズレベル)を示す。

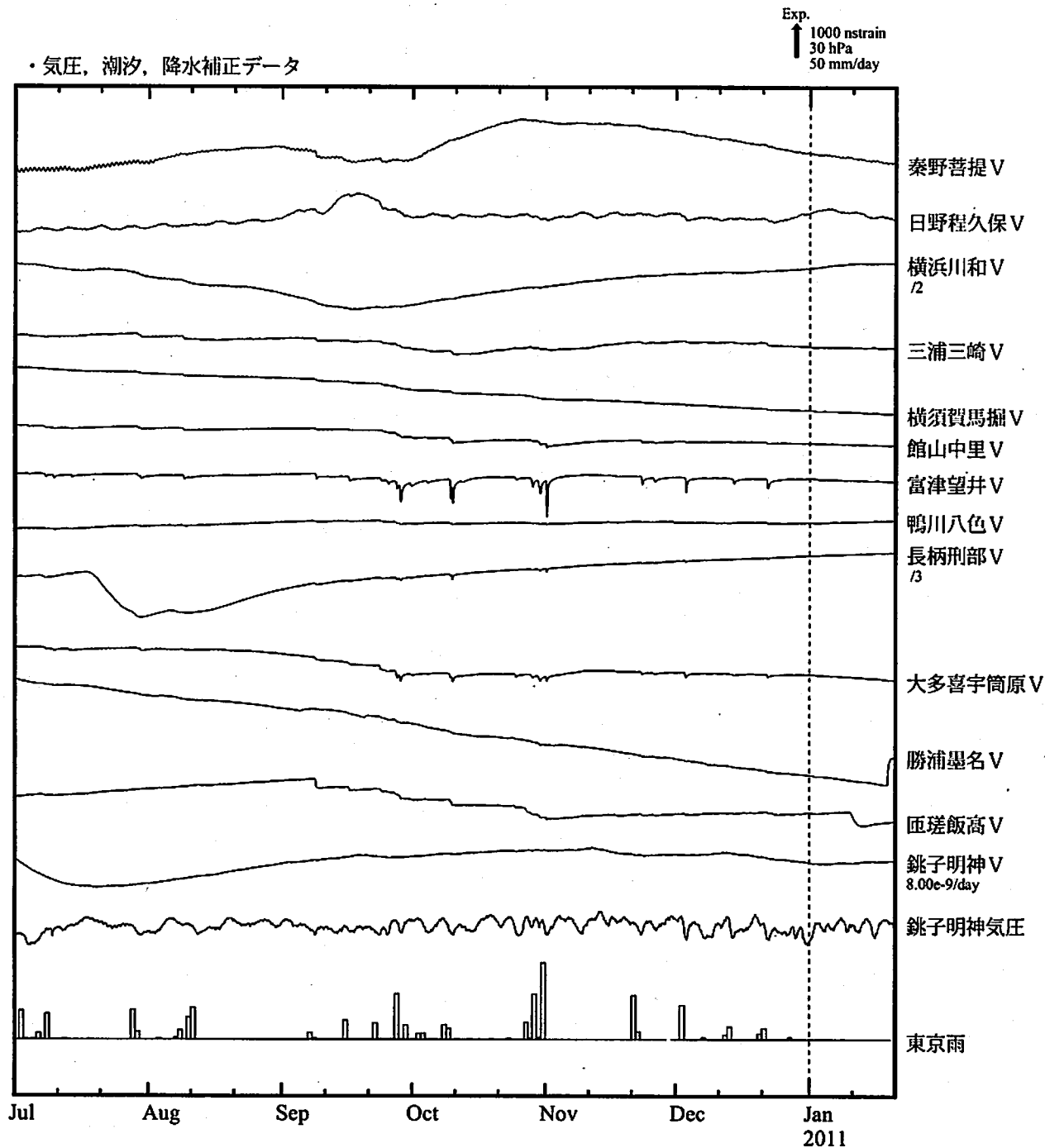
・特記事項なし。

- C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化
- L : 局所的な変化
- S : 例年見られる変化
- M : 調整

表示観測点の名称

富士鶴無ヶ淵	ふじうないがふち
湯河原鍛冶屋	ゆがわらかじや
熱海下多賀	あたみしもたが
東伊豆奈良本	ひがしいずならもと
伊豆小下田	いずこしもだ
南伊豆入間	みなみいずいるま
大島津倍付	おおしまつばいつき

地殻体積歪変化 時間値 (南関東地域)



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の変化の幅(ノイズレベル)を示す。

・特記事項なし。

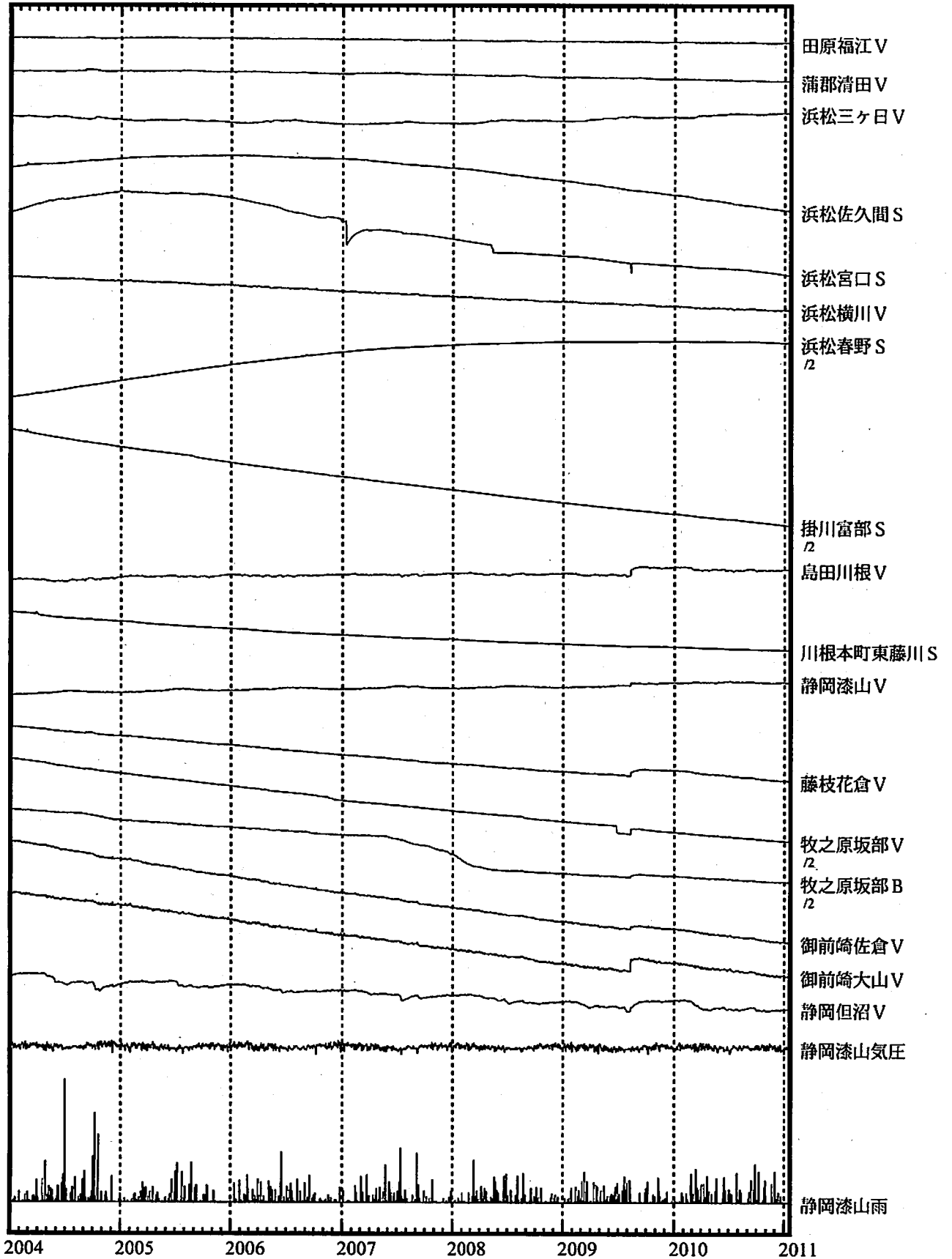
- C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化
- L : 局所的な変化
- S : 例年見られる変化
- M : 調整

表示観測点の名称

秦野菩提	はだのぼだい
日野程久保	ひのほどくぼ
横浜川和	よこはまかわわ
三浦三崎	みうらみさき
横須賀馬堀	よこすかまぼり
館山中里	たてやまなかざと
富津望井	ふつつもちい
鴨川八色	かものがわやいろ
長柄刑部	ながらおさかべ
大多喜宇筒原	おおたきうとうばら
勝浦墨名	かつうらとな
匝瑳飯高	そうさいいだか
銚子明神	ちようしみようじん

地殻岩石歪変化 日平均値 (東海地域)

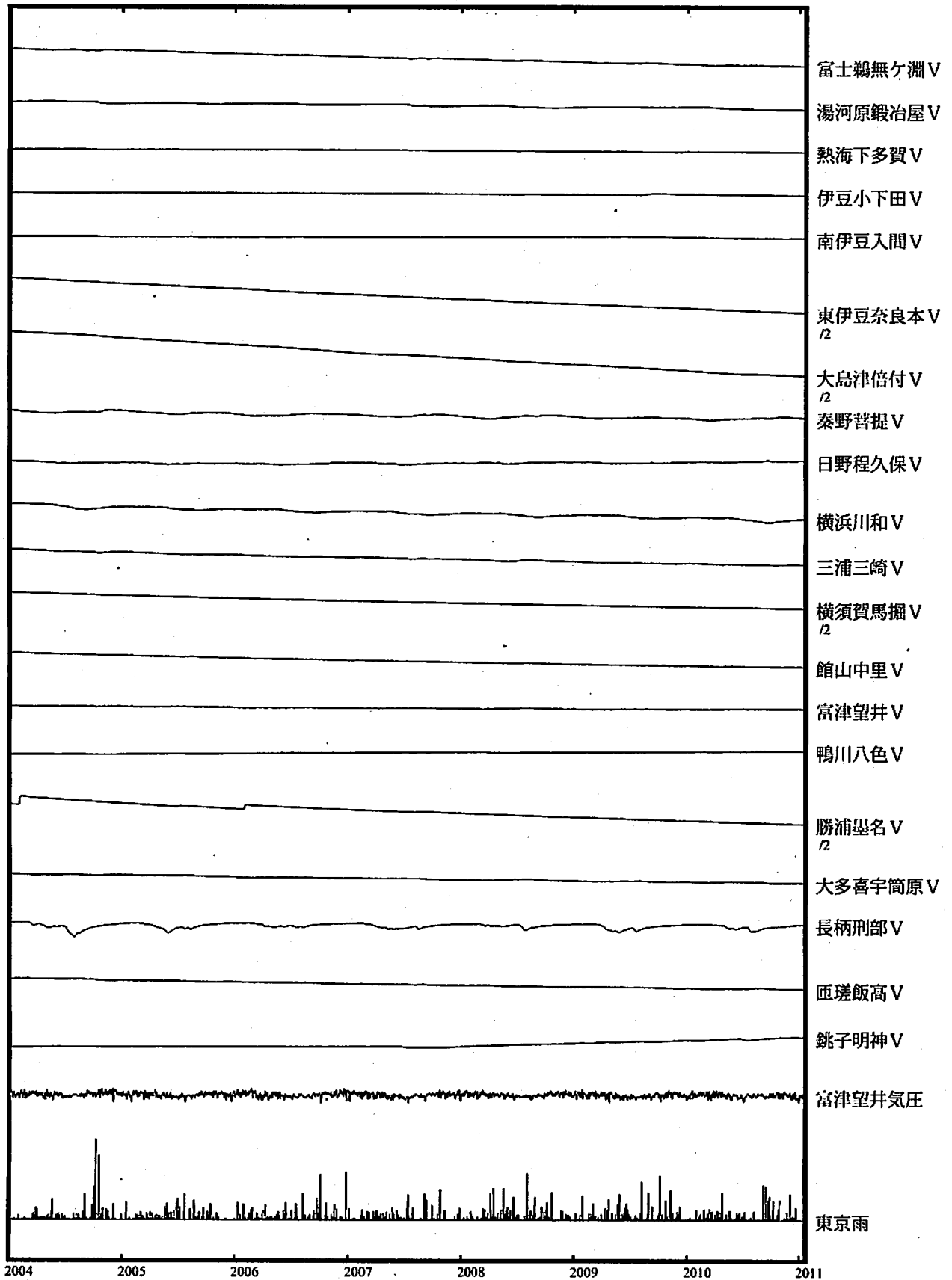
↑ 5000 nstrain
100 hPa
100 mm



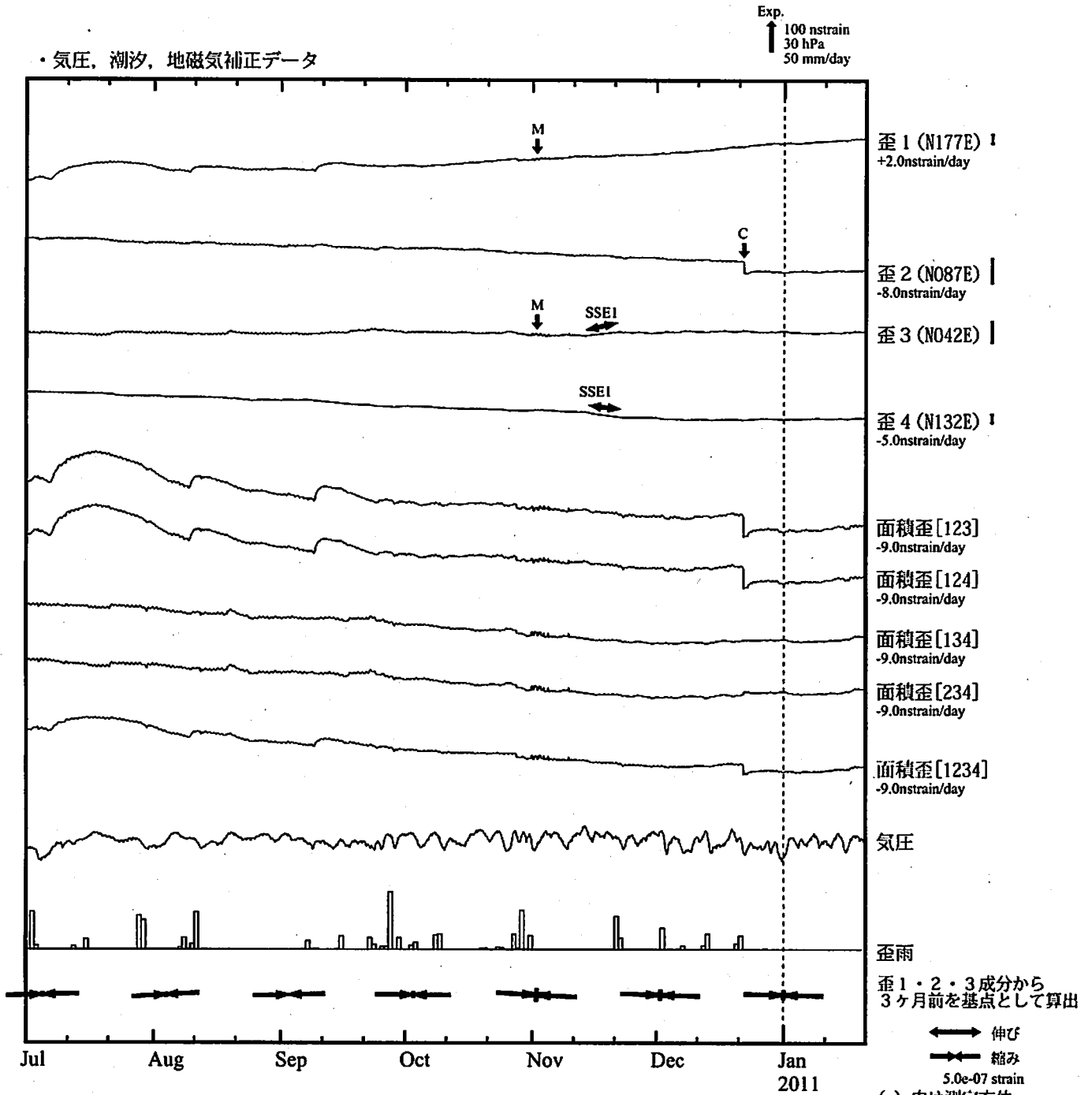
*面積歪は、東海道沖（紀伊半島南東沖）の地震および駿河湾の地震に伴うコサイスマミックなステップを除外して計算している。

地殻岩石歪変化 日平均値 (伊豆・南関東)

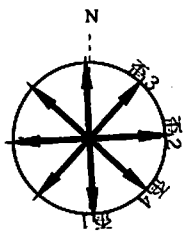
↑ 30000 nstrain
100 hPa
100 mm



掛川富部 (かけがわとんべ) 歪変化 時間値



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の変化の幅(ノイズレベル)を示す。



SSE1 : 短期的ゆっくり滑り 2010.11.13-11.22

C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化

L : 局所的な変化

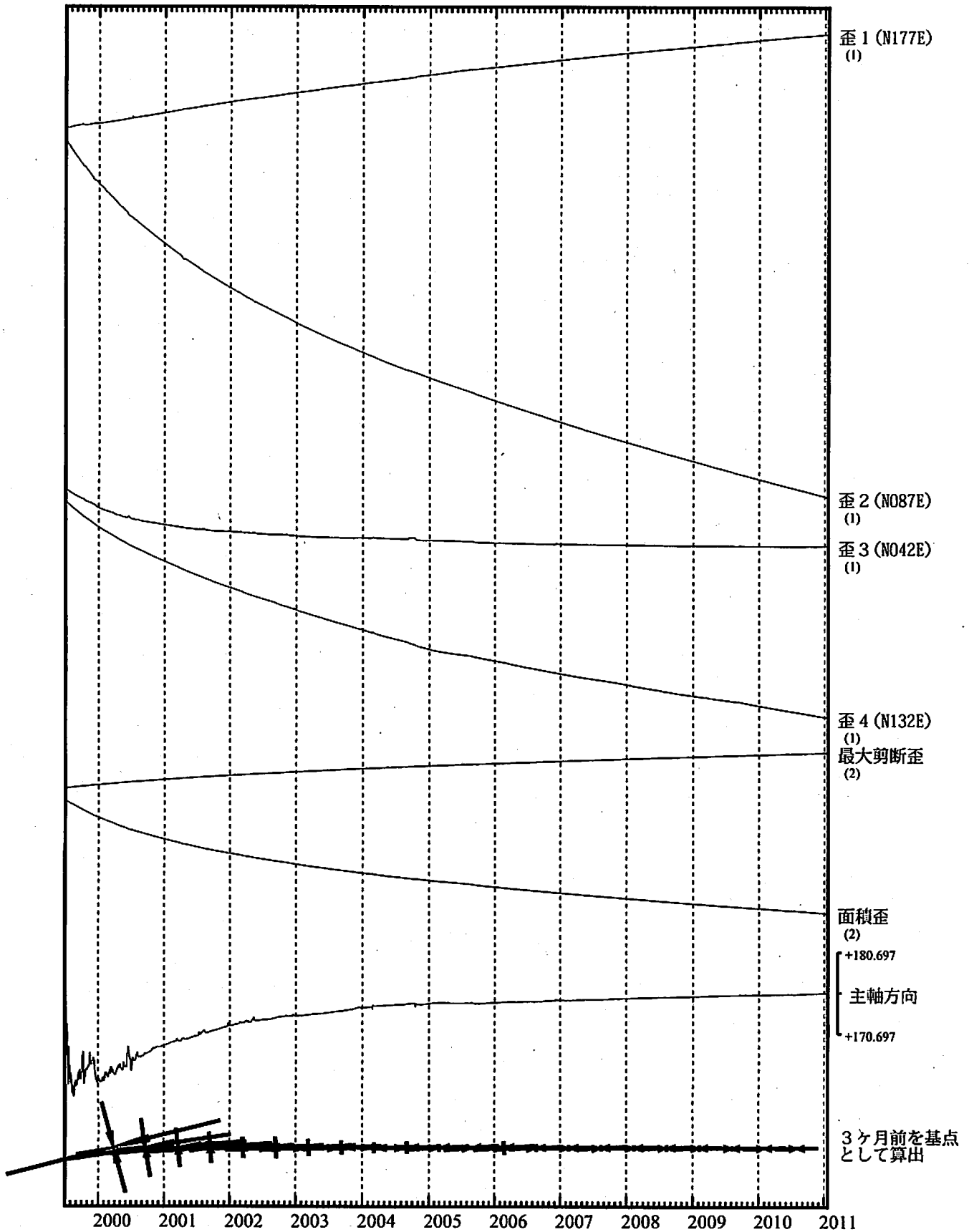
S : 例年見られる変化

M : 調整

掛川富部歪変化 日値

・最大剪断歪、面積歪および主軸方向は歪1、2、3の各方向成分から
1999年7月1日を基点として算出

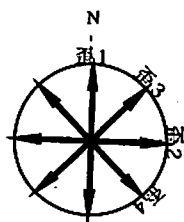
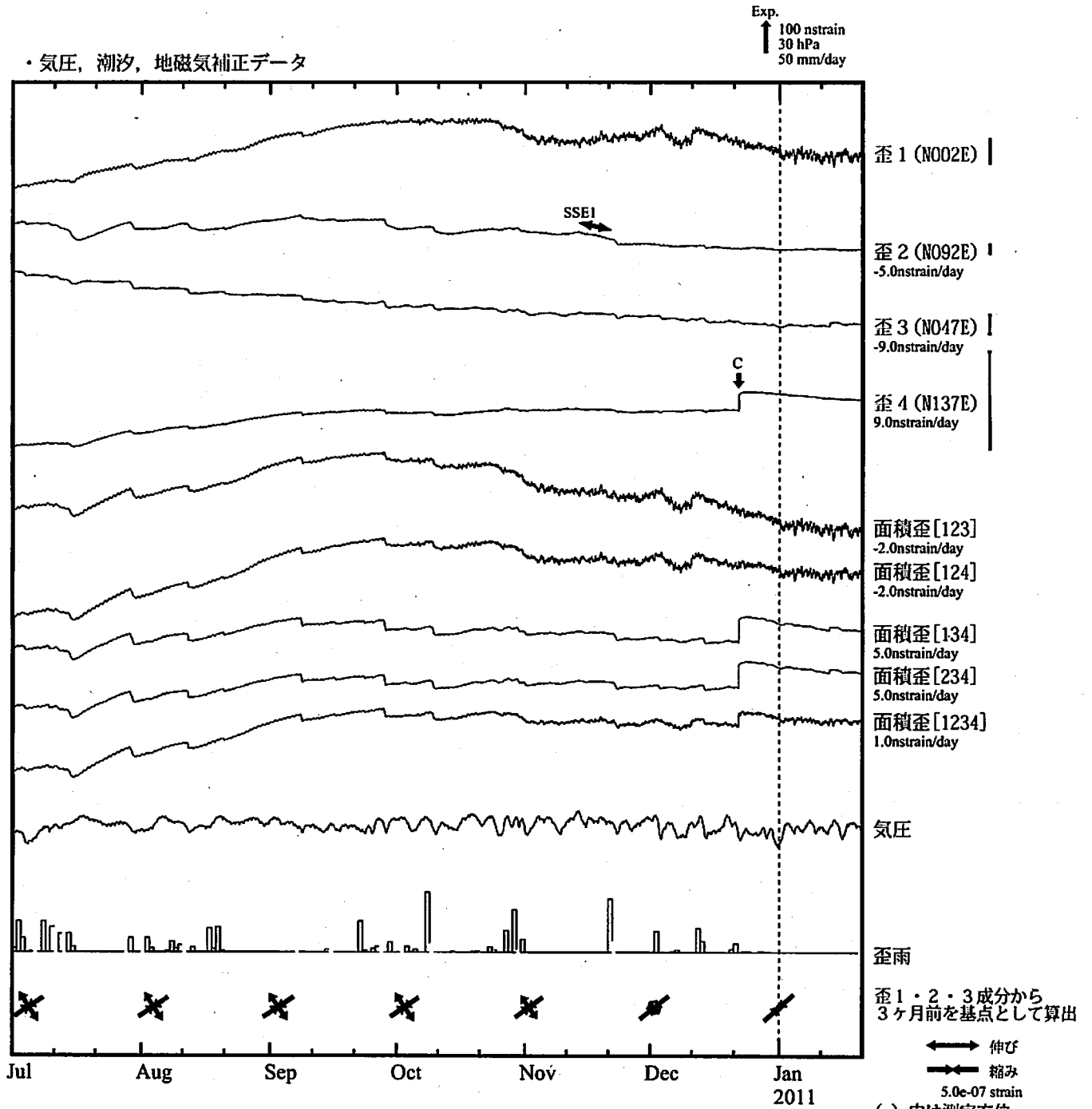
Exp.
↑ 5000 nstrain (1)
↑ 20000 nstrain (2)



*各成分の括弧付き数字はスケールの番号に対応
*最大剪断歪、面積歪および主軸方向は、東海道沖（紀伊半島南東沖）の地震および駿河湾の地震に伴うコサイスミックなステップを除去して計算している。

↑ 伸び
↓ 縮み
1.0e-06 strain

浜松春野（はまつはるの）歪変化 時間値



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の変化の幅(ノイズレベル)を示す。

SSE1 : 短期的ゆっくり滑り 2010.11.13-11.22

C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化

L : 局所的な変化

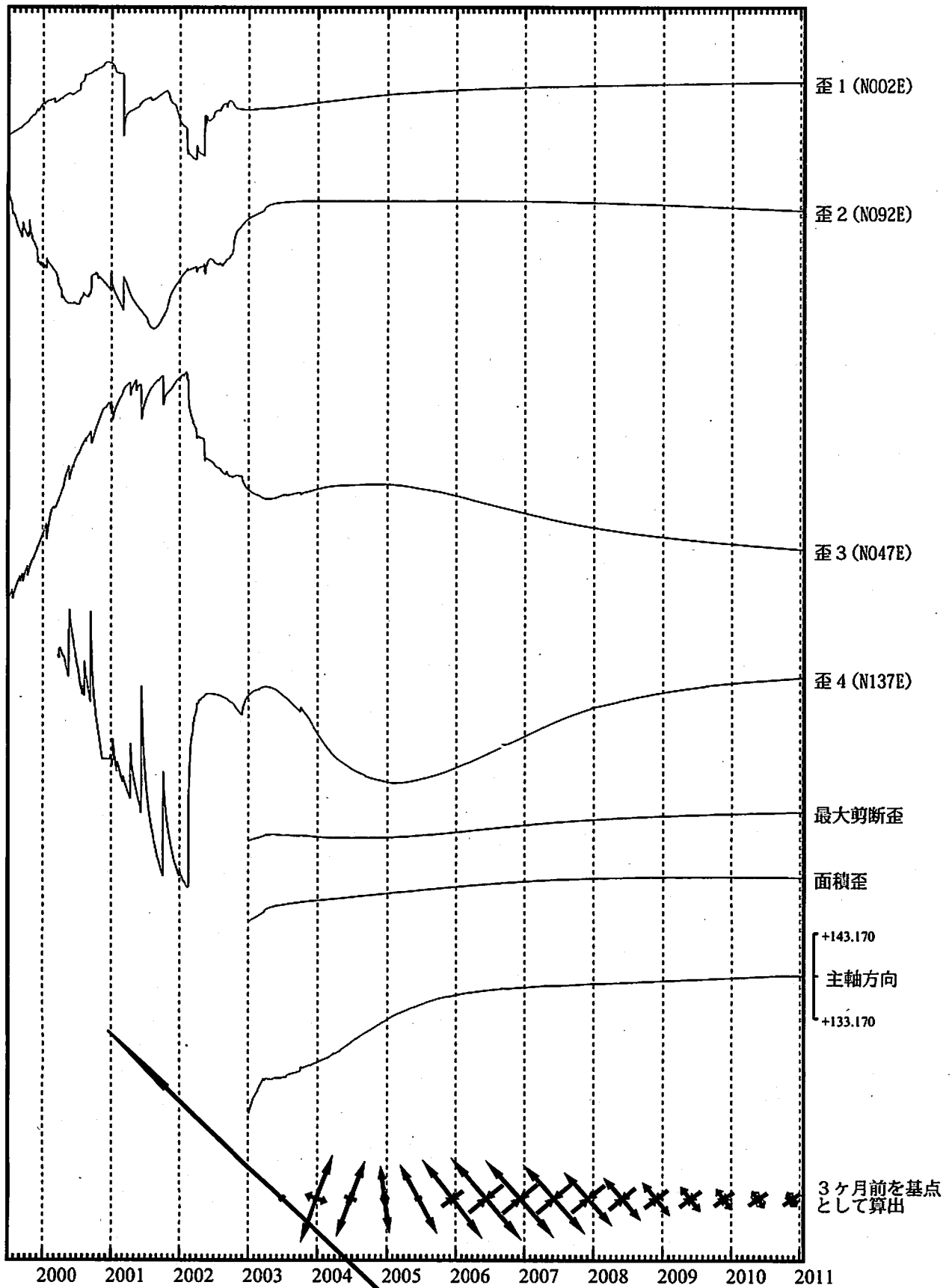
S : 例年見られる変化

M : 調整

浜松春野歪変化 日値

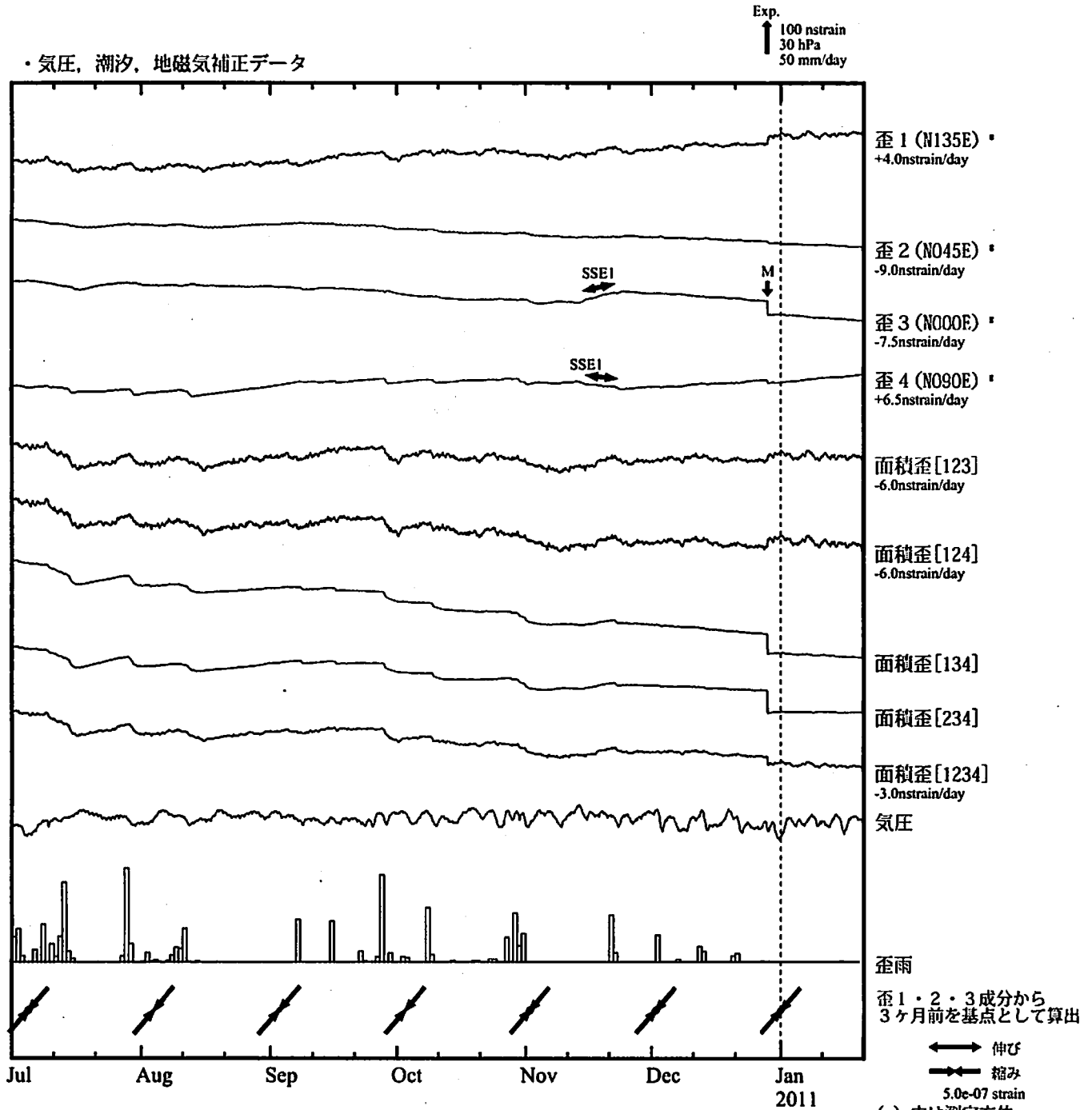
・最大剪断歪、面積歪および主軸方向は歪1、2、3の各方向成分から
2003年1月1日を基点として算出

Exp.
↑ 20000 nstrain

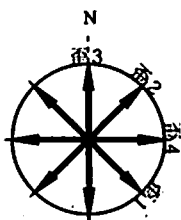


* 最大剪断歪、面積歪および主軸方向は、東海道沖（紀伊半島南東沖）の地震および駿河湾の地震に伴うコサイミックなステップを除去して計算している。

浜松佐久間（はまつさくま）歪変化 時間値



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の变化の幅(ノイズレベル)を示す。



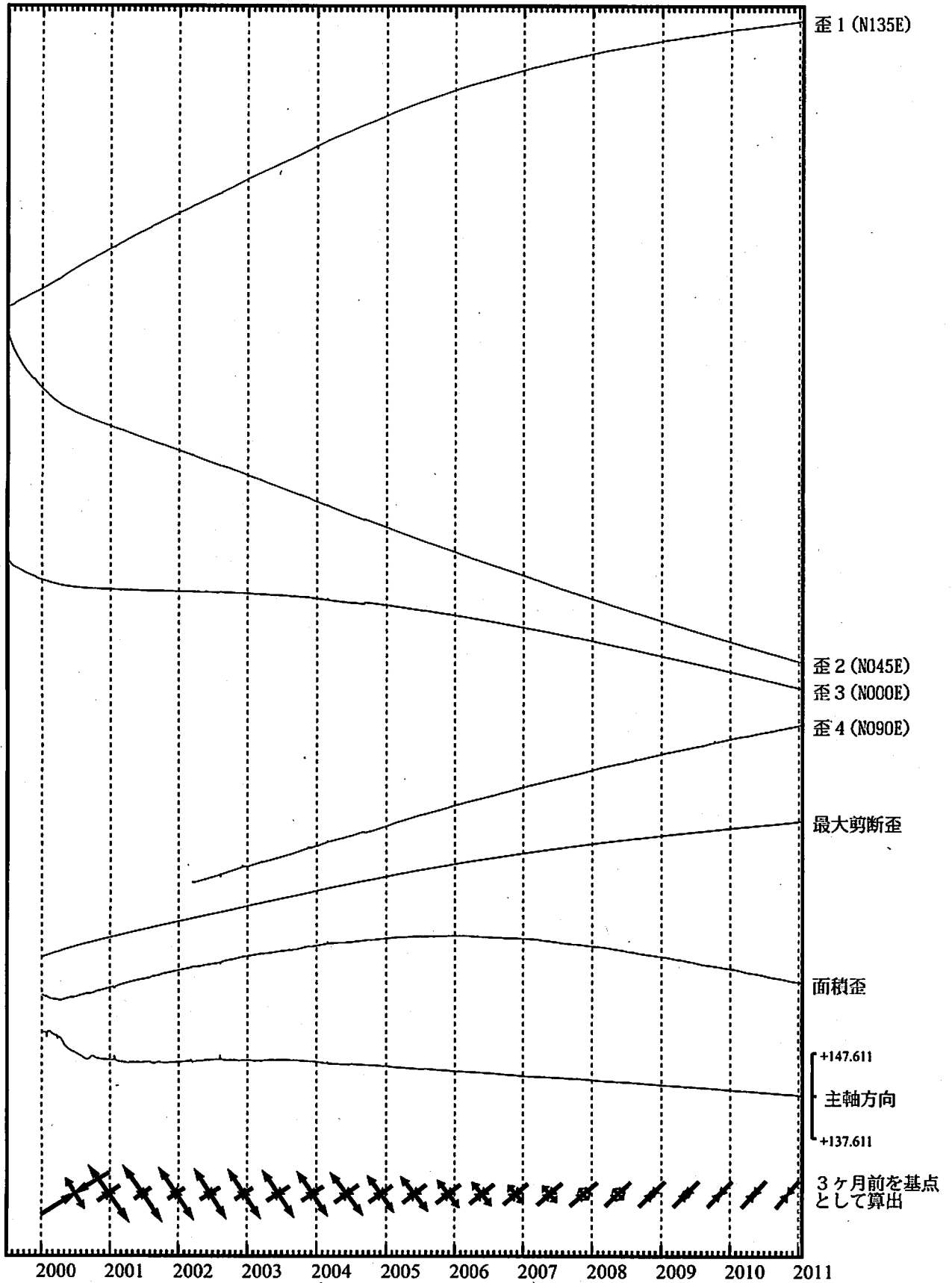
SSE1 : 短期的ゆっくり滑り 2010.11.13-11.22

- C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化
- L : 局所的な変化
- S : 例年見られる変化
- M : 調整

浜松佐久間歪変化 (日値)

・最大剪断歪、面積歪および主軸方向は歪1、2、3の各方向成分から
2000年1月1日を基点として算出

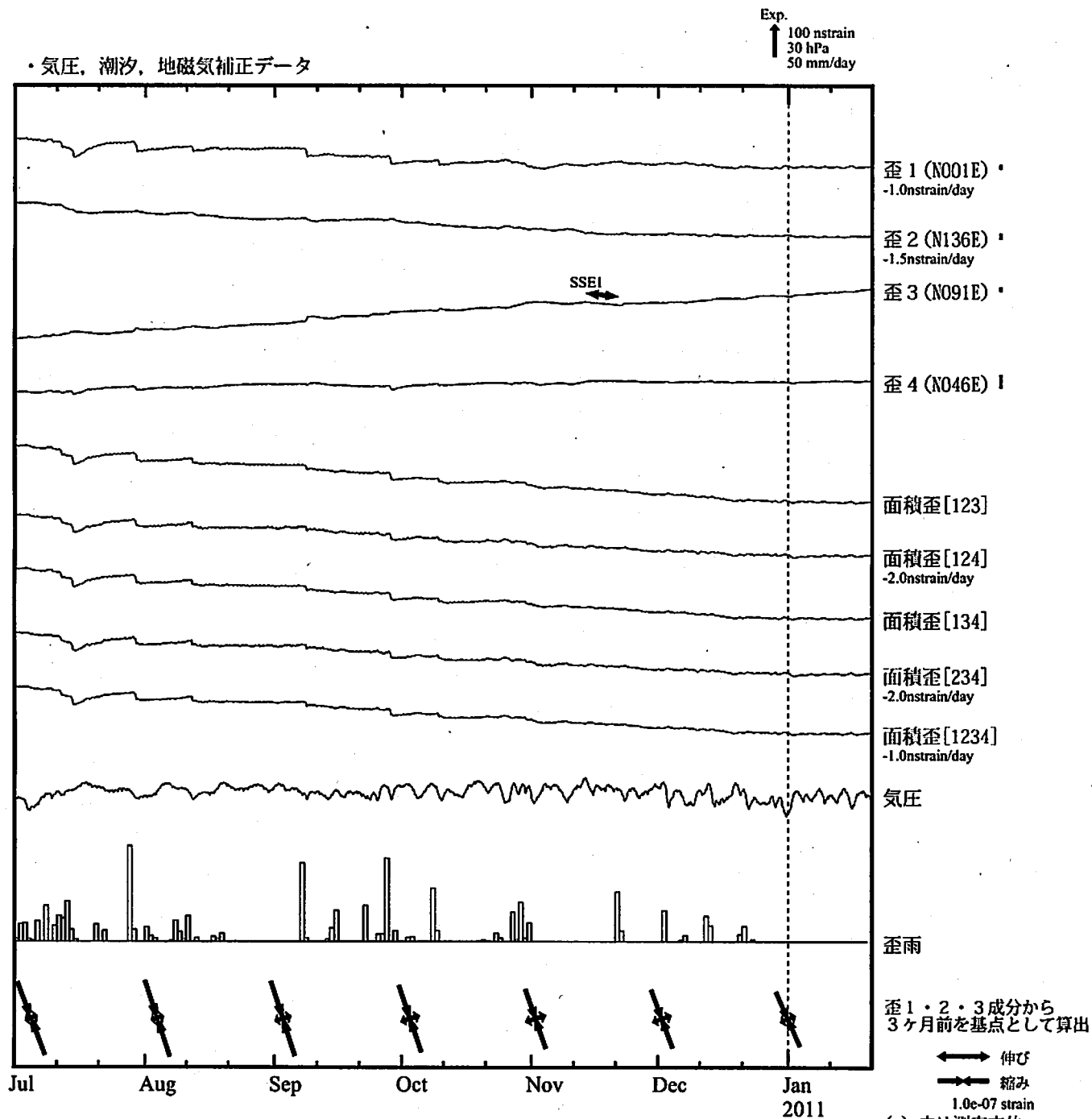
Exp.
↑ 5000 nstrain



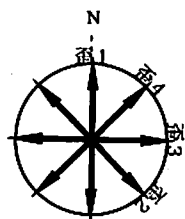
*最大剪断歪、面積歪および主軸方向は、東海道沖（紀伊半島南東沖）の地震および駿河湾の地震に伴うコサイスマミックなステップを除去して計算している。

← 伸び
- - - 縮み
1.0e-06 strain

川根本町東藤川 (かわねほんちょうひがしふじかわ) 歪変化 時間値



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の変化の幅(ノイズレベル)を示す。



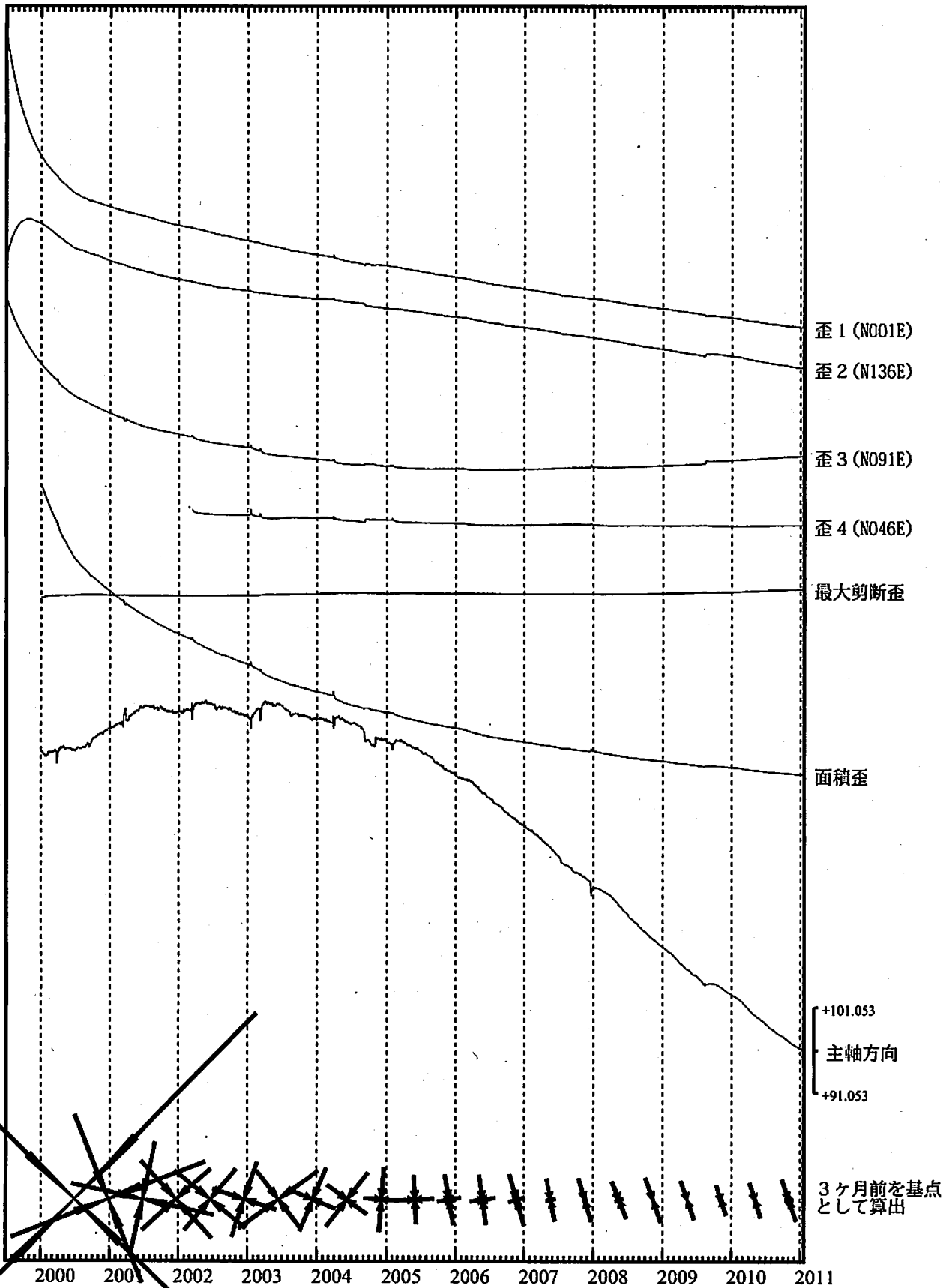
SSE1 : 短期的ゆっくり滑り 2010.11.13-11.22

- C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化
- L : 局所的な変化
- S : 例年見られる変化
- M : 調整

川根本町東藤川歪変化 日値

・最大剪断歪および面積歪は歪 1、2、3の各方向成分から
2000年1月1日を基点として算出

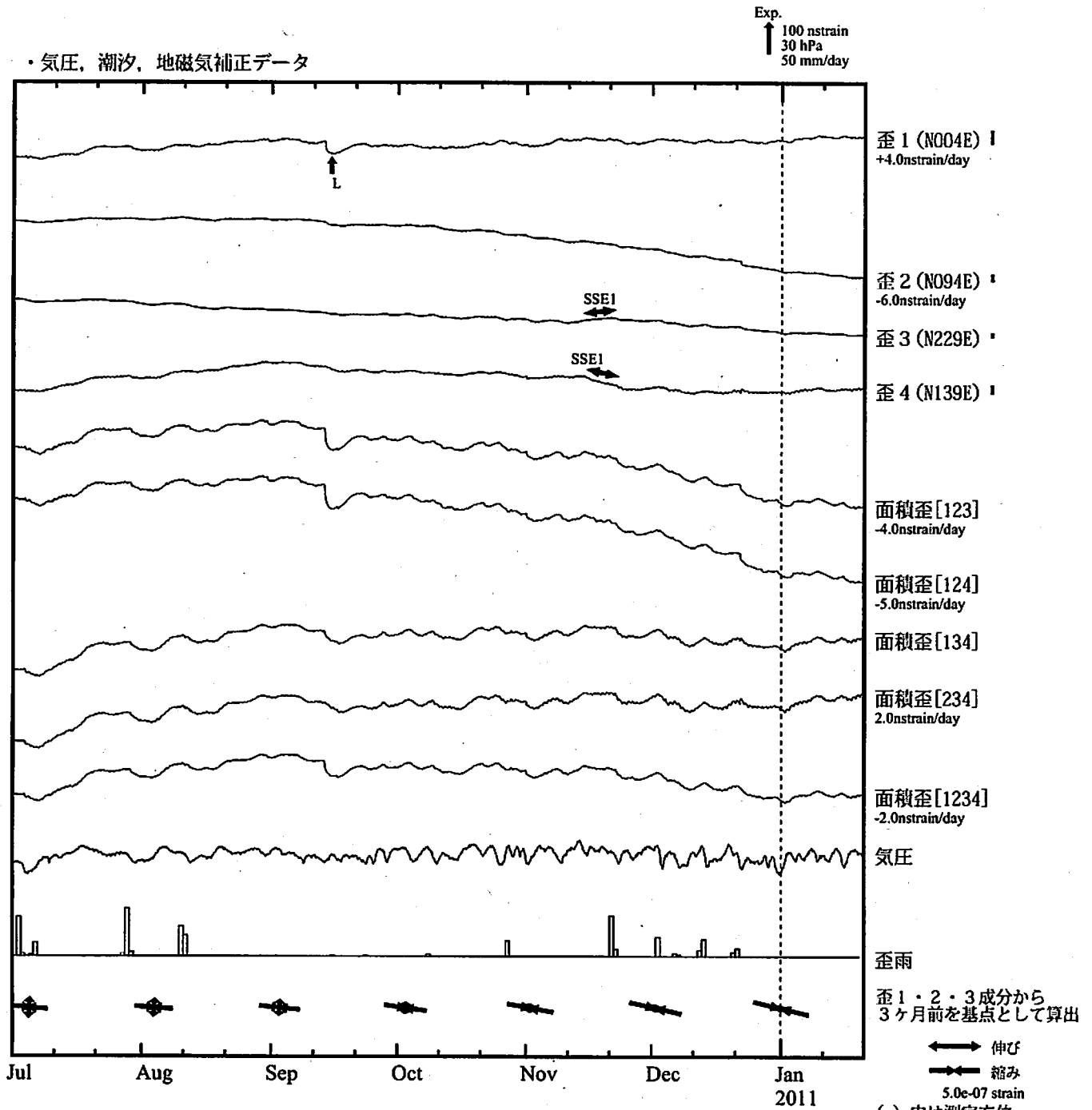
Exp.
↑ 2000 nstrain



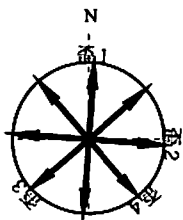
*最大剪断歪、面積歪および主軸方向は、東海道沖（紀伊半島南東沖）の地震および駿河湾の地震に伴うコサイスミックなステップを除去して計算している。

← 伸び
- - - 縮み
2.0e-07 strain

浜松宮口（はまつみやぐち）歪変化 時間値



※観測点名の右側のスケールは、平常時に1日間で変動し得る最大の変化の幅(ノイズレベル)を示す。



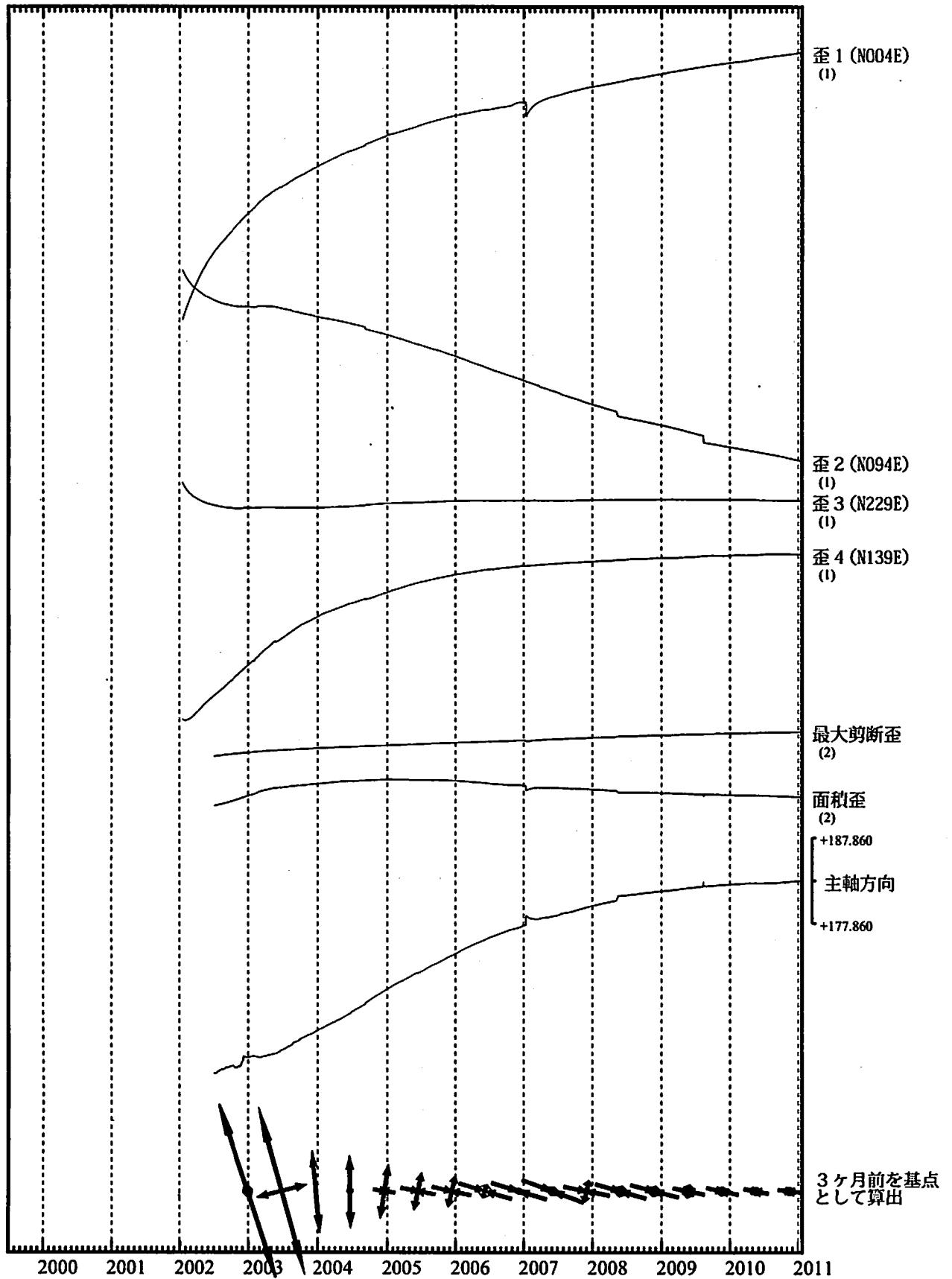
SSE1 : 短期的ゆっくり滑り 2010.11.13-11.22

- C : 地震に伴うコサイスマミックなステップ状の変化
- L : 局所的な変化
- S : 例年見られる変化
- M : 調整

浜松宮口歪変化 日値

・最大剪断歪、面積歪および主軸方向は歪1、2、3の各方向成分から
2002年7月1日を基点として算出

Exp.
↑ 5000 nstrain (1)
20000 nstrain (2)

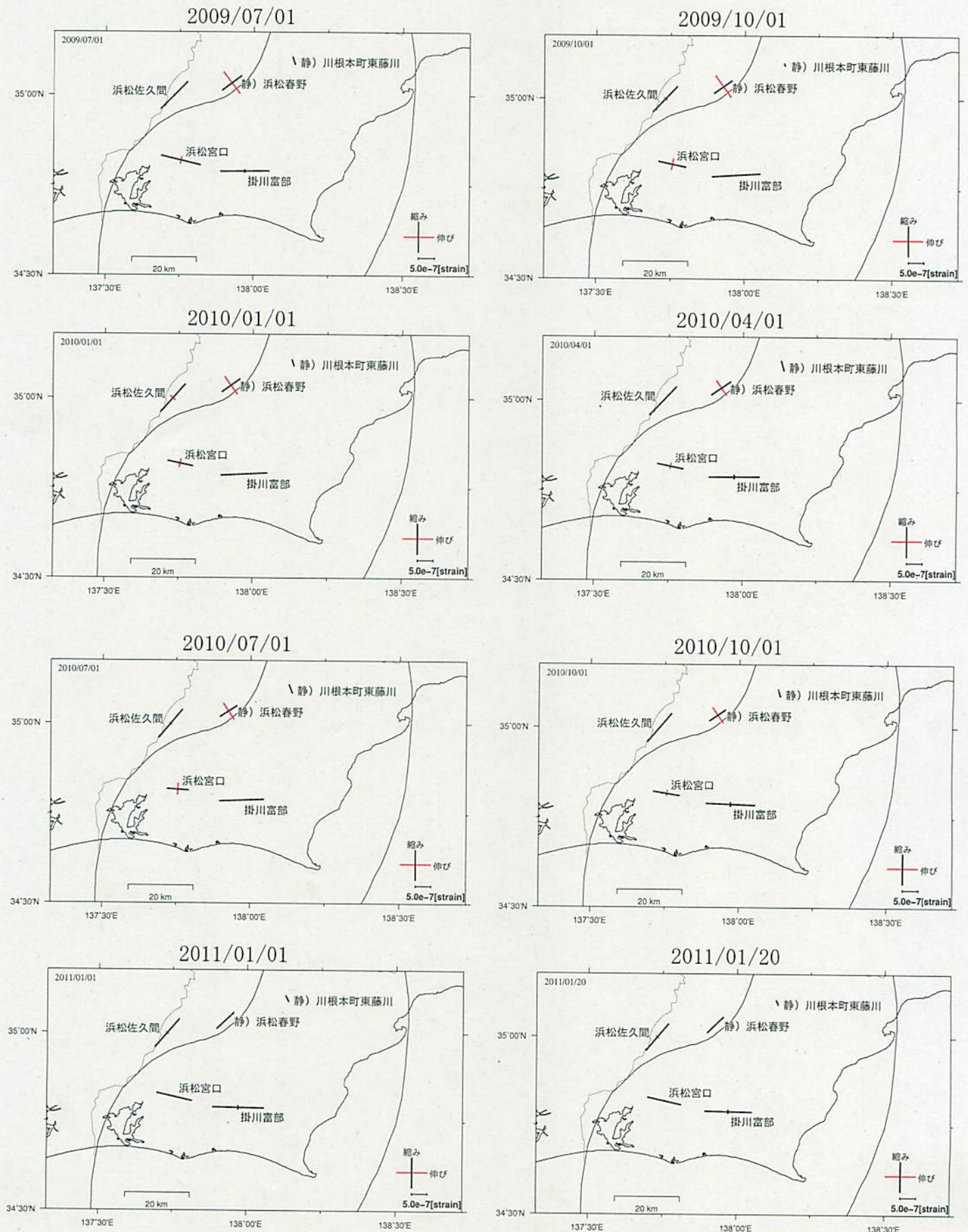


*各成分の括弧付き数字はスケールの番号に対応
*最大剪断歪、面積歪および主軸方向は、東海道沖（紀伊半島南東沖）の地震および駿河湾の地震に伴うコサイスマミックなステップを除去して計算している。

←→ 伸び
↔ 縮み
1.0e-06 strain

多成分歪計データ(歪1・2・3成分から90日前を基準として算出)

2009.07.01~2011.01.20



東海地域の短期的ゆっくりすべりの監視

2010. 12. 21 ~ 2011. 01. 14

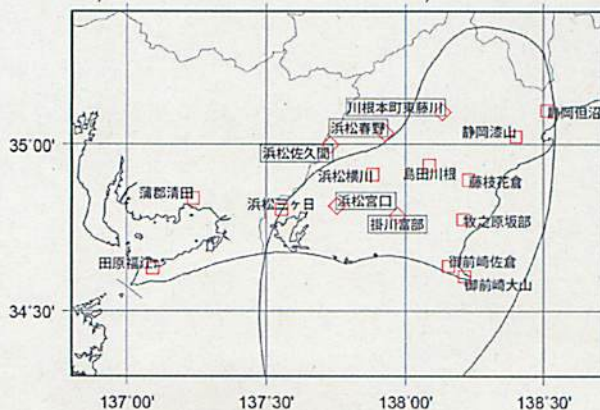
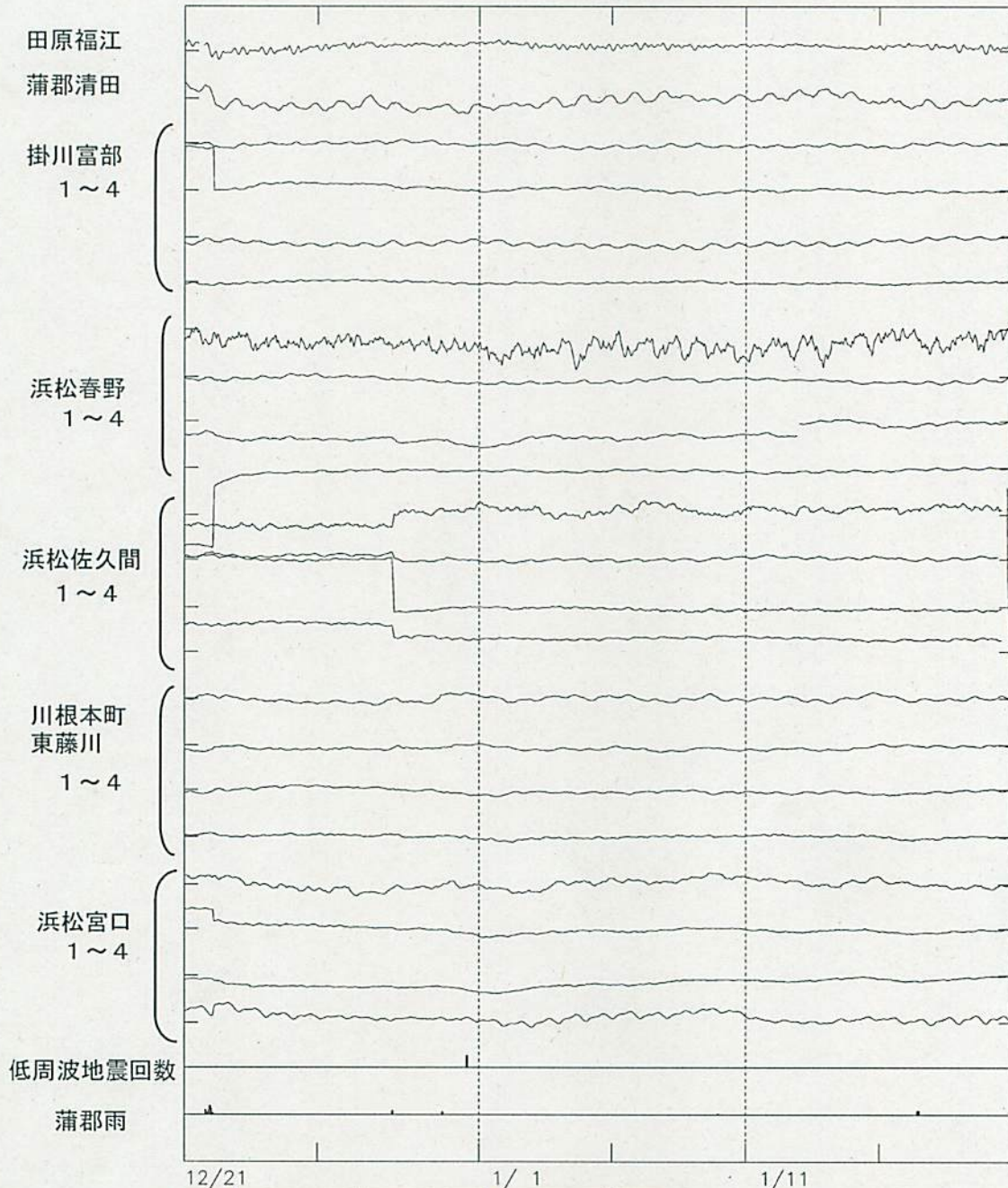
今期間、気象庁が監視している東海地方の各体積歪計、多成分歪計で短期的ゆっくりすべりが原因とみられる変化は観測されていない。

東海周辺歪変化 (時間値)

< 2010/12/21 0: 0 --- 2011/ 1/21 0: 0 >

気圧, 潮汐, 降水 (体積歪), 磁気 (多成分歪) 補正データ

1.0E-07 strain
60 mm/Hour
10 count/Hour



- 体積歪観測点
- ◇ 多成分歪観測点

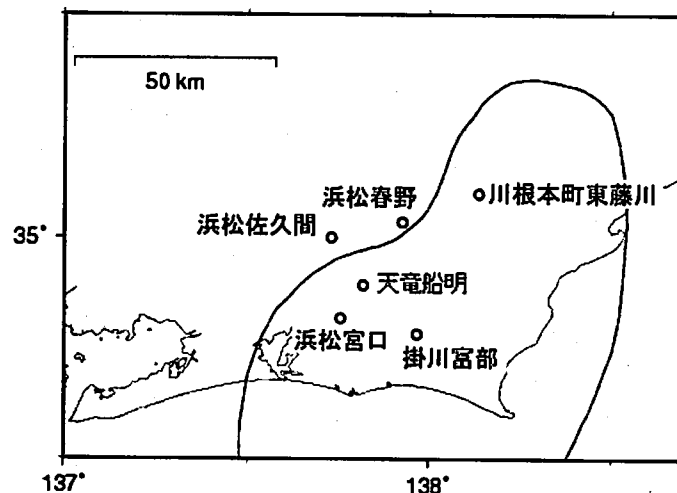
※浜松春野・川根本町東藤川は静岡県整備

気象庁作成

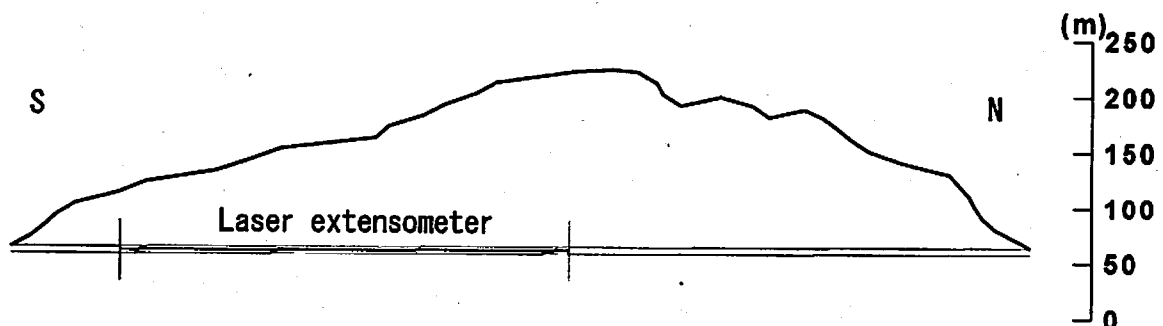
天竜船明（ふなぎら）観測点におけるレーザー式変位計による地殻変動観測

気象研究所は、天竜船明観測点（静岡県浜松市）において、レーザー式変位計（南北方向、基線長 400m）による地殻変動観測を行っている。レーザー光源の不調により平成 22（2010）年 3 月から観測を中断していた。レーザー光源を 9 月に再設置し、その後の調整を経て 11 月 5 日から本格的に観測を再開した。第 1 図に、天竜船明観測点および周辺に設置されている気象庁及び静岡県のボアホール型多成分歪計の配置、第 2 図にトンネル内におけるレーザー式変位計の設置場所、第 3 図に船明トンネルと船明ダムの位置関係を示す。

第 4 図に観測再開後のレーザー式変位計における歪変化を示す。11 月中～下旬の愛知県内の低周波地震と同期した伸びの歪変化が見られる。また、12 月 1 日～3 日頃の縮み変化は、船明トンネル近くの船明ダムの放流（国土交通省浜松河川国道事務所 Web ページの情報）によるものと考えられる。



第 1 図 天竜船明（ふなぎら）観測点と多成分歪計観測点の配置。



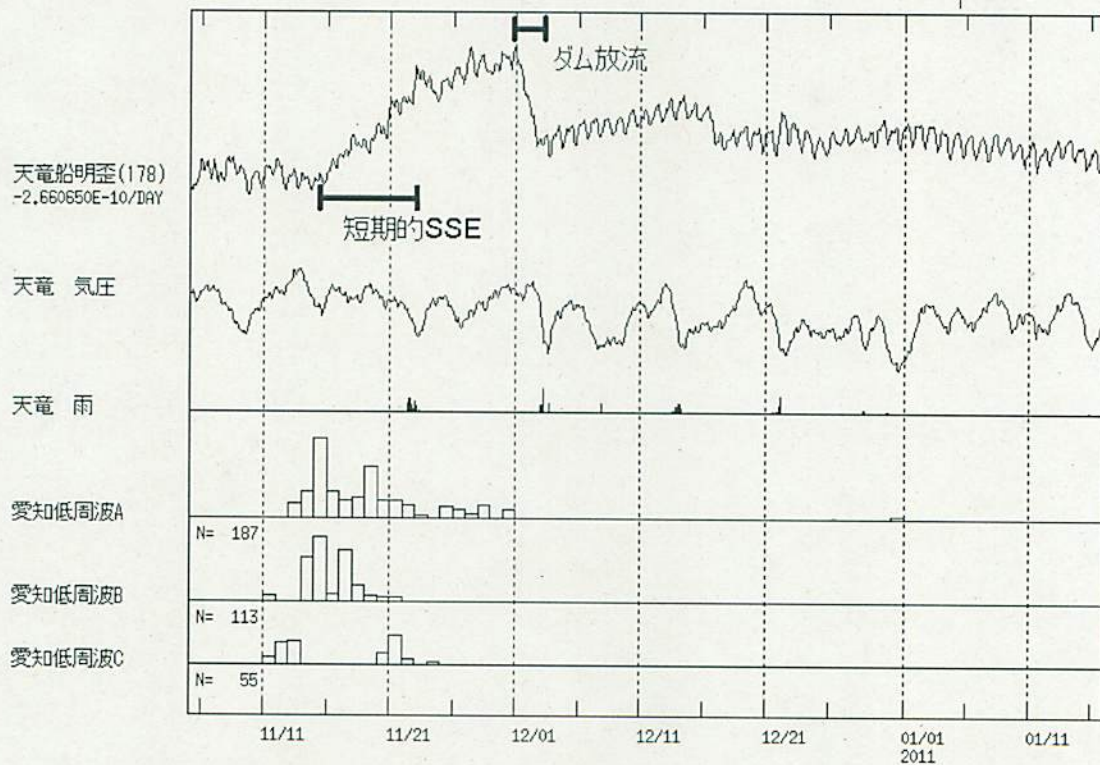
第 2 図 トンネル内における設置場所。右のスケールは標高を表す。



第3図 船明(ふなぎら)トンネルと船明ダムの位置図(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(二俣)に加筆)

(時間値) 天竜船明(ふなぎら)
2010/11/05 00:00 -- 2011/01/17 00:00

NEup | 1.0E-08 strain
30 hPa
30 mm/h
50 /day



第4図 天竜船明(ふなぎら)観測点のレーザー式変位計による歪変化(時間値; 2010年11月5日~2011年1月16日)。